



CROSS OVER

地理好き、歴史好き、
奈良に集まれ!



地歴甲子園

第19回 全国高校生歴史フォーラム

発表集

奈良大学
NARA UNIVERSITY

目 次

ごあいさつ	審査委員長・奈良大学学長 今津 節生	ii
審査結果の講評	第19回 地歴甲子園—全国高校生歴史フォーラム 実行委員長 岩戸 晶子	iii
審査結果 優秀賞		iv
審査結果 佳作		v
優秀賞研究レポート（発表順に掲載、敬称略）		
駒場東邦高等学校		1
研究者名：伊藤拓生		
研究タイトル：八王子城における石垣構造とその背景 －実測分析から見る北条氏の築城思想－		
岐阜県立関高等学校		17
研究グループ名：地域研究部		
研究者名：酒向絆叶・小栗千佳・林信之介・小森渚・山根優		
研究タイトル：船野城と津保・郡上の抗争 ～天正二年秋、郡上郡沓部をめぐって何が起きたか～		
長崎県立壱岐高等学校		33
研究グループ名：東アジア歴史・中国語コース2年歴史学専攻		
研究者名：宮野幸一		
研究タイトル：壱岐中世史解明の新視点 －誰が生池城を改修したか－		
高知県立高知国際高等学校		49
研究者名：澤田千代子		
研究タイトル：安政南海地震後に建てられた萩谷名号碑の碑文は、 どれだけ信用性があるか		
筑波大学附属坂戸高等学校		61
研究者名：梶野拓夢		
研究タイトル：越辺川の河床遺跡を検討する －新発見の越辺川吹塚西袋町A地区A1・A2地点河床遺跡を中心として－		
佳作ポスター（高等学校等コード順に掲載、敬称略）		77
第19回 地歴甲子園—全国高校生歴史フォーラム 研究タイトル一覧		83

ごあいさつ

審査委員長・奈良大学学長
今 津 節 生

奈良は日本の歴史・文化の原点です。飛鳥・奈良時代には都が置かれ、中国や朝鮮から多くの文化や技術を取り入れながらも独自の発展を遂げ、我が国の礎を築きました。三つの世界遺産や二百件を超える国宝をはじめ、数多くの文化財を有する奈良は、まさに日本文化の源流に位置する地といえるでしょう。古代の人々が理想の社会を求め、創意と情熱を注いだその歩みは、現代を生きる私たちに多くの知恵と示唆を与えてくれます。

奈良大学は、この歴史と文化の豊かな地に1969年に開学しました。文学部と社会学部の二学部六学科、大学院文学研究科・社会学研究科、さらに通信教育部を有し、約三千九百名の学生が一つのキャンパスで学んでいます。図書館の蔵書は五十六万冊を超え、文化財関連書籍の充実度では全国屈指を誇ります。奈良大学は、歴史・文化研究の「知の拠点」として、全国から集う若者が「本物にふれて学ぶ」場を提供しています。

本年2025年は、学校法人奈良大学の創立100周年という記念すべき節目の年にあたります。百年にわたり「地域に根ざし、文化を継承し、未来を拓く学び」を掲げてきた本学は、これまでの伝統を礎に、次の百年へ向けて新たな一歩を踏み出しています。その象徴の一つが、この「地歴甲子園—全国高校生歴史フォーラム」です。

本フォーラムは、高校生が自ら課題を見つけ、資料を調べ、考え、結論を導くという探究の学びを応援する場として、2007年に始まりました。第1回目は22校から応募がありましたが、第19回目となる今回は、30都道府県から69校、86編の応募をいただきました。審査委員会による厳正な審査の結果、優秀賞に5編、佳作として6編が選ばれました。特に優秀賞の5編については、奈良大学公式YouTubeチャンネルを通じて全国に同時配信され、各校の皆さんのが熱意ある研究成果を全国の視聴者と共有できることとなりました。研究に取り組まれた生徒の皆さんにとって、この経験が新たな学びの糧となることを心から願っています。

最後に、本フォーラムの開催にあたりご尽力くださった先生、そして探究心あふれる全国の高校生の皆さんに、心より感謝申し上げます。皆さんが歴史を通じて培った「問いを立て、考える力」は、これから社会を支える大切な力です。その成果が、地域を、そして日本の未来を豊かに照らす光となることを願って、私の挨拶といたします。

審査結果の講評

第19回 地歴甲子園—全国高校生歴史フォーラム実行委員長

岩戸晶子

今年も「地歴甲子園—全国高校生歴史フォーラム」の季節が巡ってきました。高校生が互いに切磋琢磨する姿をより鮮明に伝えるため、今年からこれまで副題であった「地歴甲子園」をメインタイトルとして掲げました。その地歴甲子園に、今年は全国69校から86点もの研究レポートが寄せられました。対象とする時代は古代から近現代に至るまでと幅広く、いずれも独自の関心や着眼点に基づいて地域の歴史や文化に真摯に向き合ってまとめ上げられた力作です。とりわけ今年は、クラブや学校単位の応募に加え、個人での応募が多かった傾向が見受けられました。

実行委員会では、厳正な審査をおこない、優秀賞5点、佳作6点を選出しました。応募作品の水準は例年以上に高く、審査委員一同、甲乙をつけるのに大変苦労しました。わずかな差で順位が決まっていたのが実情であり、入賞に至らなかったレポートのなかにもその独創的な視点や新しい発想に審査委員をうならせるものもありました。同時に、どのレポートも読み応えがあり、審査の時間そのものが非常に楽しく充実したものであったことも申し添えます。真夏の暑さのなかでの現地調査、図書館や資料館での史料との格闘、何度も推敲を重ねて仕上げたレポートは、まさに高校生のみなさんの「汗の結晶」です。その努力を積み重ねて応募され、地歴甲子園という舞台を目指したすべてのみなさんに、心から大きな拍手を送りたいと思います。

歴史や地理の探究は過去を単に知ることにとどまらず、現在を理解し、未来を展望する力を育むものです。今年のレポートのなかには、地域の伝承や忘れられかけた歴史を掘り起こして現代社会の課題に照らして新たな意義を見いだしたもの、また地理的な視点から地域資源の活用や防災を考察して未来への提言へつなげたものがありました。これらは、こうした研究が人々の生活や未来と直結していることを示しているともいえるでしょう。

また、この「地歴甲子園」は、自身の成果を発表する場であると同時に、同世代の仲間たちの研究に触れ、刺激を受け合い、学びを深める場でもあると思っています。ここで得られた出会いや経験が、みなさんの今後を支える大きな糧となることを祈っています。

最後に、調査と研究を成し遂げた高校生のみなさんの努力に心から敬意を表するとともに、ご指導くださった先生方、日々支えてくださったご家族、そしてこの大会を支えてくださった関係者の皆様に、厚くお礼を申し上げます。今後も高校生のみなさんが地理や歴史、文化財について関心を持ち、さらなる探求を続けていかれるよう奈良の地から祈念しております。

審査結果

優 秀 賞

(発表順に掲載、敬称略)



駒場東邦中学校・高等学校

研究者名：伊藤拓生

研究タイトル：八王子城における石垣構造とその背景
－実測分析から見る北条氏の築城思想－



岐阜県立関高等学校

研究グループ名：地域研究部

研究者名：酒向絆叶・小栗千佳・林信之介・小森渚・山根優

研究タイトル：船野城と津保・郡上の抗争
～天正二年秋、郡上郡沓部をめぐって何が起きたか～



長崎県立壱岐高等学校

研究グループ名：東アジア歴史・中国語コース2年歴史学専攻

研究者名：宮野幸一

研究タイトル：壱岐中世史解明の新視点－誰が生池城を改修したか－



高知県立高知国際高等学校

研究者名：澤田千代子

研究タイトル：安政南海地震後に建てられた萩谷名号碑の碑文は、
どれだけ信用性があるか



筑波大学附属坂戸高等学校

研究者名：梶野拓夢

研究タイトル：越辺川の河床遺跡を検討する
－新発見の越辺川吹塚西袋町A地区A1・A2地点河床遺跡を中心として－

審査結果

佳 作

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)



福島県立磐城桜が丘高等学校

研究者名：大渕絢慎

研究タイトル：沈船防波堤の戦争遺跡としての価値～小名浜港の沈船防波堤を論じて～



昌平中学・高等学校

研究グループ名：社会歴史研究部

研究者名：阿久津勇氣・小野将太

研究タイトル：杉戸町関連戦没者全記録－5冊の『戦没者名簿』をひもとく－



豊島岡女子学園高等学校

研究者名：松木雛子

研究タイトル：川越における十組仲間の解釈



長野県諏訪清陵高等学校

研究者名：平田翔太郎

研究タイトル：天守の比較から考える「高島城天守」の存在意義



天王寺学館高等学校

研究者名：宮城龍斗

研究タイトル：三好実休の肖像－二つの肖像画の謎－



愛媛県立松山北高等学校

研究グループ名：郷土研究部

研究者名：森川晴仁・岸本美花・藤井初佳・森貞裕太郎・谷口凱星
山住悠理・安部大晟・対馬小花・松本知隼

研究タイトル：衛門三郎伝承と河野教通
－四国遍路（伊予）をつくった戦国大名－

優秀賞研究レポート

(発表順に掲載、敬称略)



優秀賞

八王子城における石垣構造とその背景

—実測分析から見る北条氏の築城思想—

駒場東邦高等学校

伊藤 拓生



1. はじめに

八王子城は北条氏康の三男、北条氏照によって築かれた大規模な山城である。山頂の主郭を中心とした曲輪群の他、御主殿や太鼓曲輪、詰城など様々なパートによって構成されている。この八王子城は北条氏末期の城として縄張りなどに様々な工夫が施されているが、その中でも注目されるのが「石垣」の存在である〔註1〕。中世城郭は主に土を用いて築かれ、石垣を伴うところは少数派であった。北条氏もこれの例外ではなく、小田原城や鉢形城のように僅かに低い石垣を用いる城も存在するが、山中城や小机城といった北条氏の重要な拠点は主に土づくりであった。一方の八王子城では、2mを超えるような石垣を城内の各所に築いており、特に御主殿や詰城の周辺では石垣を基礎に城郭が形成され、北条氏の中では群を抜いて石垣を多用した城と評価される。

北条氏の城の中では貴重で奇妙な八王子城の石垣だが、現在十分に研究が行われているとも言い難い。八王子城自体御主殿を中心に何度も発掘が行われ、多くの成果が出ている城であるが、八王子城全体の石垣技術に関しては分からぬ部分も多い。額止め石〔註2〕など分かりやすく目に見える特徴は知られているが、八王子城内におけるすべての石垣に額止め石が確認されるわけでもなく、城内全体でどのような共通の技術があったのか、あまり明らかになっていない。そこで、この研究では八王子城に残っている石垣を網羅的に調査し、諸データを集めることによって、八王子城全域に共通する石垣の構造やその築城術について明らかにし、ひいてはその石垣技術から石垣が持っていた防御面以外の意味や、北条氏の築城思想の変化を解明する。

2. 前提として

(1) 八王子城の概要

八王子城（東京都八王子市）は、北条氏照（以下、氏照）が滝山城に代わる居城として築いた山城である。その築城時期は定かではないが、史料や氏照自身の状況などを踏まえて、1584年頃から本格的な築城が始まったと考えられている。1590年に豊臣秀吉によって行われた小田原攻めの際、城主氏照が不在の八王子城は、前田利家や上杉景勝といった名だたる武将たちに攻められ、僅か半日で落城した。この際八王子城は未完成だったとも言われるが確かではない。しかし、八王子城の規模や築城推定期から落城までの期間を考えると、その可能性は大いにありうる。

八王子城の構造を見ると、主にアシダ曲輪や御主殿からなる居館地区、主郭や金子曲輪、高丸などの要害地区、要害地区の奥に広がる詰の城〔註3〕、太鼓曲輪地区などに分けられる（図1）。居館地区は城山川沿いに築かれた曲輪群で、城主氏照の館があったとされる御主殿からはベネチア産のレースガラスも出土している。御主殿の周りに広がるアシダ曲輪は館の他に倉庫などがあったと考えられている。要害地区には、山頂の主郭を中心に松木曲輪や小宮曲輪といった曲輪を展開しており、居館地区とは200m程の比高がある。詰の城は、その名称からすると、落城前に主郭から逃げ込む所のようなイメージがあるが、その構造や立地から主郭西方を守備する役割があったと考えられる。太鼓曲輪地区は居館地区から城山川を挟んだ向かいにある尾根上の曲輪群で、深い堀切によって幾つにも切り分けられている。

(2) 八王子城石垣について

八王子城の石垣は、居館地区、柵門や金子曲輪などの要害地区、詰の城、太鼓曲輪地区と、城域に満遍なく分布している。特に御主殿周辺の石垣は、発掘調査によって大規模な石垣が見つかっており、その成果を生かして御主殿虎口の石垣は復元されている。現在残る要害地区や詰の城、太鼓曲輪の石垣は、断片的ではあるがその状態は良好である。詰の城には石垣だったであろう石も多く散乱しており（図2）、築城当時は長大な石垣ラインが築かれていたことが容易に想定される。主郭周辺では、現在石垣は見られないが、絵図などには石垣が記されており、当時は城のほぼ全体に石垣が築かれていた可能性もある。

八王子城の石垣は主に砂岩が用いられている。そのため、節理で一定の方向・大きさで割れる火成岩系の石とは違い、八王子城の石垣には材質的制約による大きさの統制は考えられない。城が築かれている山は砂岩質であり、場内には石切り場と伝わる場所もある。岩盤が露出する場所は城内に多く（図3）、伝承が確かかどうかは別として、城内またはその周辺地域で石が採集されたことはほぼ確実である。

3. 現地調査

(1) 調査方針

今回の研究では、北条氏がどのように石垣を築いていたのか、そのルールや法則を現在の遺構から明らかにしたい。石垣の構造というと表面に積まれている石だけでなく、その裏に詰められた裏込め石などもあるが、現在八王子城において直接観察できる範囲として、今回の調査対象は表面に積まれた石に限るとする。また、既に知られている八王子城石垣の特徴として頸止め石があるが、基底部に据えられているため土の中に埋もれているものが多く、表面観察できないため、研究対象外とした。

次に、石垣をデータ的に解析するにあたって、今回は石の縦と横の長さを計測することにした。石垣の縦横の長さを測ることによって、石垣を作る際に一定の基準を設けていたかが分かる。現在の石垣遺構は一部崩れていったりするが、石が複数個積まれている以上、縦と横の関係は変化しない。また、石が何段目に積まれているかも石の大きさと関係があると思われるが、土の中に石垣が埋まっていることや、石垣の下部が崩落した可能性なども考えると、正確なデータは取れないため、研究対象外とした。

(2) 調査方法

石垣の石の縦横を計測するにあたって、もっとも単純なのは、現地で実際に大きさを計測することである。しかしこの方法では、現地で測ったデータを石ごとに結び付けることが難しく、実測の際に無理に石垣に近づくと、貴重な遺構を傷つけてしまう可能性もある。そこで今回は3Dスキャンという方法をとった。3Dスキャンではデータを自由に分析することができ、さらに遺構と適切な距離を保ったまま調査をすることができる。使用したのは「Scaniverse」というスマホアプリである。対象物を様々な方向から連続的に撮影することで、対象物を正確に3Dでスキャンすることができる。取得した3Dデータでは、長さの計測も極めて僅かな誤差の範囲で行える。実際に八王子城へ行き、現地で八王子城の石垣をこのアプリで3Dデータ化した上で、そこから約450個分の石の長さを網羅的に分析した。

4. 結果

調査した個所は、既に石垣の存在が確認されている詰城の石垣などに加え、あまり石垣として取り上げられていないが石垣として認めてよい高丸の石垣の計16箇所である（図1）[註4]。太鼓曲輪地区の石垣も調査したが、残存状況は悪く、まとまったデータ数を確保できなかつたため、最終的にそのデータは用いず、研究の対象外とした。

要害地区：①馬蹄段下 ②金子曲輪下 ③柵門東下 ④高丸

詰の城：⑤詰城南尾根 ⑥詰の城南 ⑦詰の城北 ⑧詰の城大石塁

⑨詰の城北尾根 ⑩詰の城先端尾根 ⑪詰の城南尾根南

居館地区：⑫御主殿虎口 ⑬御主殿西壁 ⑭御主殿東壁 ⑮アシダ曲輪南 ⑯御主殿南

石垣の石の縦と横の長さは、すべて合わせると900個近い数のデータが取れた。それらをまとめると、表1～表16のようになつた。表番号は上記の調査地の番号と一致している。それぞれの表の下部には縦横の長さのそれぞれの標準偏差[註5]を求めた。図4～図13は実際に計測した3Dデータの一部、及び調査時に撮影した写真である。

5. 考察

まず、居館地区を除いた要害地区や詰の城の石垣について考察する。表1から表11までを見ると、すべての地点において縦の長さの標準偏差が横の長さの標準偏差よりも小さいことが分かる。加えて、縦の長さの標準偏差はその絶対値も小さく、中には大きさが約3の地点もある。これは分かりやすく言い換えると、全体的に八王子城の石垣は、石の縦の長さのばらつきが、横の長さのばらつきよりも小さいということである。そして、地点によっては、平均値±3cmの間に多くの石が収まるという強い統一性のもとに積まれていると言える。このことから、八王子城において、要害地区や詰の城では、石垣を積む際は、その地点の中で、横の長さより縦の長さを統一して積むことが意識されていると分かる。実際に観察すると、場所によっては大きな石がまれに積まれているが、基本的には横の目地を通す布積みに近い積み方がされていることが分かり、標準偏差のデータがそれを裏付ける形となっている。ここで、地点ごとに縦のばらつきが小さいことが分かった上で、これをそれぞれの地域全体でどのようにになっているか俯瞰する。箱ひげ図（図14）を見ると、要害地区や詰城のデータは、石の縦の長さの四分位偏差（箱の部分）が10cm～20cmの間にだいたい収まっており、平均値は15cm程度であることが分かる。つまり、石の縦の長さは石垣が築かれる地点ごとだけでなく、八王子城内の広い範囲で15cm前後に統一されていると考えられる。八王子城の広さを考えると、広域に築かれた石垣は複数の職人集団によって築かれ、それらの集団ごとに多少積み方が違つたことは容易に想像できる。そのような中で、これらに対して縦の長さが約15cmという一定の基準を設けていたということが、石垣の石を網羅的に解析することで明らかになった。

このように縦の長さには基準を設けていた一方、横の長さは標準偏差が10を超えるものが多く、ばらつきは大きいと言える（図15）。最大値と最小値は各地点である程度一致しているが、縦の長さのように基準が決められたとは言いつらい結果である。おそらく石を積みやすいように縦の長さだけ統一したうえで、横の長さは持ち運びやすい大きさにそろえられたというのが実態であると考えられる。

ここまで、要害地区と詰の城の共通点を考察してきたが、しかし、その間でも僅かでは

あるが差も見つけることができる。標準偏差を比較したグラフ（図16）において、要害地区と詰の城では、一般に要害地区の方がグラフの上に来ている。つまり、要害地区の方が一般的に縦の長さがばらついているといえる。その数値的差の要因として考えられるのは、要害地区に多い「外れ値的石」である。一般に箱ひげ図において、外れ値はプロットで表されるが、縦の長さの箱ひげ図では、要害地区ではそれが詰の城よりも割合的に多い。詰の城地域も大石壘のあたりで同程度の大きさの石があるが、その他の地点においては、要害地区のような大きさの石は確認されず、石の最大値に関しても、詰の城より要害地区の方が10cm程度大きくなっている。これらが標準偏差の差に表れていると考えられる。また、横の長さの箱ひげ図を見ると、詰の城地域は比較的図の形が各地点似ているのに対して、要害地区はそれぞれ異なる形をしている。特に馬蹄段下のデータは、30~40のあたりで固まるという他には見られない特有の結果となっており、この点で要害地区は詰の城地域と異なると言える。このように要害地区と詰の城は、共に前に明らかにした基準に従いながらも、積まれている石に多少の違いがみられるのである。

ではこの差の原因は何か。もちろん積まれた時代の違いや石切り場からの距離の問題なども考えられるが、ここでは積んだ集団の違いであると考えたい。まず、八王子城は正確な期間は分からぬが、およそ6年と比較的短期間に築かれた城郭であるため、時代によってこのような差が生まれるかは怪しい。両地域とも縦の長さは統一された規格に大体の石が収まっているという点で、時代差によって地域差が生まれたとは考えづらい〔註6〕。また、確かに石切り場が1箇所である場合、その場所からの距離によって石の大きさを変え、運びやすくすることなども考えられる。しかし、八王子城には石切り場と伝わる場所も存在するが、岩盤が露出する箇所も多い現在の八王子城の状況や、積まれたであろう石の量を踏まえると、石切り場は1箇所では足りず、石は様々な地点から採集されたと考えられる。よって、このような運搬の関係で横の長さに地域差が生まれることも考えづらい。一方、石垣の積まれた範囲や積まれた期間を考えると、複数の集団によって石垣が積まれた可能性は極めて高く、それによって横の長さに個性が出たことは十分に考えられる。石垣同士をつなぎ合わせることなどを考えると、縦の長さは基準を設ける必要がありそうだが、横の長さは特に制限を設ける必要性はなく、集団ごとに差が生まれたと考える。

このように、要害地区や詰の城の石垣からは、八王子城築城の際、大規模な石垣を築くために集められた多くの石工集団を統一し、明確な基準を設けた上で、作業に当たらせていた実態が分かった。当時の北条氏の築城では、基本的に百姓たちに労役として作業させることが多かった。しかし、八王子城のように専門集団を年単位で統制して、石の縦の長さを揃えて秩序立てた石垣を築かせるという築城体制は、当時の北条氏の中世的築城体制から、より専門的なものへと移り変わったことを示していると言える。

次に、御主殿の石垣について考察する。標準偏差の大きさをまとめたグラフ（図16）を見ると、居館地区の標準偏差が明らかに要害地区や詰の城といった他地域よりも大きくなっている。つまり、言い換えると御主殿周辺地域の石垣の石は、周りの石垣よりばらつきがとても大きくなっていることが分かる。箱ひげ図を見ても、同様にばらつき具合は他の地域よりも大きいことが分かり、特に縦の長さは他地域とは圧倒的な差がある。このような居館地区の特徴の原因として考えられるのが、城主の権威を表す鏡石の存在である。鏡石とは、城主の権威の大きさを表すように配置された巨石のことであり、八王子城もそ

の一例と考えられる。箱ひげ図において、外れ値としてプロットされているものはすべて鏡石と評価できる〔註7〕ものであり、中には縦横共に長さが1m近いものも存在する。鏡石と評価できる石は特に御主殿虎口やアシダ曲輪の石垣で特に多く見られる。これらの石垣は大手道に面し、御主殿の館へ訪れる外部の者に城主氏照の権威を大いに見せつけていた。戦国時代、武蔵の小倉城や信濃の桐原城、埴原城など東国の城にも石垣を持つ城は存在していたが、前述の通り、そのような城は割合的には少なく、石垣の存在自体が権威を示すものであった〔註8〕。北条氏の小田原城などにも石積みは見られるが、土留め程度の低層のものである。北条氏の城を含むこれらの城では鏡石と評価できるような巨石ではなく、当時の東国に鏡石という概念がなかった可能性がある。しかし、八王子城では、単なる石垣の存在による権威の見せつけから、鏡石の配置という東国では全く新しいワンランク上の見せつけ方をしていた。巨石を用いることは軍事的必然性を超えており、「見せる巨石」という明らかに他の東国の城郭とは異なる石垣に対する概念がある。鏡石自体、一般的に石垣の使用が多かった西日本の城に見られ、そのような点では、八王子城は概念がそれらの城に近く、先進的であるという評価も新しく与えられることが分かった。

また、この御主殿石垣に関連して、これらのデータから、氏照が単に八王子城を訪れる外部の者だけに権威をアピールしていたという訳ではないことも読み取れる。本来鏡石や通常より大きな石は、虎口周辺や通路沿いなど、目立つ場所に多く使われる。確かに八王子城においても、鏡石は御主殿虎口など目立つ所に配置されている。しかし八王子城の場合、御主殿東壁や御主殿西壁といった通路などからは見えないような所にも、他地域より一回り大型の石〔註9〕を多用しており、居館地区全体の石垣で、周りの地域の石垣と差別化しようとする意図が読み取れる。このことは、単に大手道を通って御主殿を訪れる外部の者への権力アピールだけでなく、八王子城を築く人々や、氏照の家臣までにもその権威を誇示しようとしていたことを表す。そして、外部との間に差を誇示するだけでなく、組織内部にも段階を設けようすることは、織豊系城郭のような、城郭における権力の階層化を目指していたと考えることができる。織豊系城郭における代表的な例を挙げると、安土城では、黒金門などの中心地域とその他の地域で、石の大きさや石垣の積み方が異なる。八王子城もこれと同様の特徴を示す。氏照の八王子城に移る前の居城である滝山城では、部分的に主郭の樹形を石畳にして差別化を図っていたが、主郭全体を石垣などで差別化するようなことはなく、内部に対しての権威の誇示は見られない。もし八王子城の居館地区が北条氏の内部に対しても権威付けするという考察が正しければ、小田原城など他の北条氏の城郭よりも、城郭に対する概念が、織豊系城郭などの先端的な城郭に近いものだったと、八王子城に全く新しい評価を与えることができる。そして、それは北条家が豊臣政権と緊張関係の中で、等しく渡り合うための道具としての役割があったという推測を可能にする。あくまでも推測の域を出ないが、かつて北条氏照の使者が安土や京都を訪れ、織田信長に謁見したことを踏まえると、十二分にありうることだと言える〔註10〕。

以上のように、八王子城はその石垣を用いて、それまでの東国の城郭とは異なる「城郭による権威の階層化」という、織豊系城郭の概念に近いものを生み出し、北条氏の城郭思想を質的に変えた可能性が見えてきた。それは北条氏にとって、城の防御面以外の面、具体的に権威の象徴としての側面を重視した最新の試みであり、八王子城はその北条氏が中世から次の時代へと向かう過渡期を象徴していたことが解明できた。

参考資料

参考文献

- ・黒田基樹『北条氏年表』高志書院、2013年
- ・児玉幸多、坪井清足『日本城郭体系 第5巻』新人物往来社、1979年
- ・東京都教育委員会『東京都の中世城館』戎光祥出版、2013年
- ・中井均『戦国の城と石垣』高志書院、2022年
- ・八王子市郷土資料館『八王子城 改訂増補版』八王子市郷土資料館、2024年
- ・三浦正幸『図説 近世城郭の普請 石垣編』原書房、2024年
- ・村田修三『図説 中世城郭事典 第一巻』新人物往来社、1987年
- ・open-hinata「open-hinata」<https://kenzkenz.xsrv.jp/open-hinata/?s=Ufb7Vc>、2025年8月25日

註釈

註1 石垣と石積みについて、両者を裏込め石の有無などによって区別する場合があるが、今回の考察では裏込め石の有無が関係しないため、表記は石垣に統一する。

註2 頸止め石とは、石垣の面に対して数十cm前にずらして積まれた基底部の石のこと。基本的には頸止め石が用いられるのは1段目だけであり、2段目からは普通の石垣の面に合わせて積まる。斜面に石垣を築く際に石垣が崩落することを防ぐために、このような構造をとると言われる。詰城の大石壠や四段石垣など、八王子城内の石垣の数か所で確認できる。八王子城以外にも頸止め石が確認できる城があるが、とても珍しい構造である。

註3 八王子城では、一般的に詰の城を含めた主郭周辺の山城部分を要害地区と呼んでいるが、ここでは詰の城を要害地区と分け、さらに要害地区も金子曲輪や柵門など主郭からは少し離れた地域を中心に議論する。

註4 八王子城の石垣では、御主殿裏の四段石垣が有名だが、普段はボランティアガイドの方の同伴が必要となる。しかし、調査をした夏季は、周辺で藪が極めて濃く、ボランティアガイドの方と一緒にでも調査をすることができなかった。市が調査した際の図面なども十分なものが得られなかつたため、詳細なデータを取ることができず、今回は調査対象から除外した。また、柵門付近の石垣も、四段石垣に次いで残存状況がいいものだが、これは遺跡保全の観点から近寄ることができないため、3Dデータをとることはできなかった。

註5 標準偏差は、どれだけデータが平均値からばらついているかを表す。数値が大きいほどばらつきは大きく、逆に数値が小さいとデータが平均値に集中していることを表す。

註6 八王子城の詰の城は、対豊臣が意識され始めてから、改修によって付け足されたという説もある。しかし、八王子城の守りのコンセプトとして、「直線的な防衛ライン」というものが挙げられる。金子曲輪～柵門の曲輪群や太鼓曲輪、御主殿のスロープ状の虎口などは、山中城の岱崎出丸にも通ずるような直線的で正面を意識した守りを展開している。その点で、詰の城のコンセプトはこれらと完全に一致し、詰の城、太鼓曲輪、金子曲輪の周辺曲輪はセットで考えるべきである。さらに、現在主郭周辺の曲輪には明確な虎口は見当たらない。八王子城から南に8km程のところにある北条

氏の支城、津久井城には、山頂周辺の曲輪に虎口が存在する。その他の北条氏の城と比較しても、この主郭周辺のつくりは大雜把であり、八王子城の主郭周辺は築城途中と考えるに十分な根拠がある。そのような中で、詰の城のような立派なものを新たに作るとは考えづらい。以上の点を踏まえると、詰の城は主郭などと同時期に作られたと考えるのが自然であり、詰の城の石垣もそうであると考えられる。

- 註7 大坂城などの大規模な近世城郭、とりわけ幕府権力関係の城では、虎口などの石垣に連続して巨石を使用することもあるが、基本的に「相対的に大きい石」が鏡石と評価されることが多い。よって、箱ひげ図において外れ値として認識できるものは、明らかに相対的に大きな石と評価でき、結果、鏡石と言うことができる。ただし、要害地区や詰の城の箱ひげ図における外れ値は、その絶対的長さが短く、鏡石ということはできない。
- 註8 関東含め山に城を築くとき、堀切や切岸などで岩盤を削ることがよくある。もし石垣をただ築城の際に出た石材を積んだものと理解すると、全国的に満遍なく石垣は分布するはずであり、関東であまり石垣が確認されないことに矛盾する。そのため、関東における石垣は、わざわざ積んだものであり、その理由として権力や技術力の誇示が与えられる。
- 註9 御主殿西壁や東壁の石垣には、鏡石といえるような巨石はないが、全体的に大型の石を使用している。他地域の石垣の石より、縦横の長さが共に 10~20 cm 程大きく、要害地区や詰の城の石垣とは明らかに異なる。近くで見た時の迫力は明らかに異なり、御主殿地域の権威の誇示に大きな役割を果たしている。
- 註10 北条氏照の使者が安土を訪れていることが知られており、そのことから八王子城は安土城を参考にしたのではないかという説は一応存在する。しかし、その根拠は北条氏にあまり見られない石垣が八王子城には存在すること、使者が安土を訪れた時期が八王子城築城時期に合うことなど、いずれも推測的要素が極めて強いものであり、あくまでも推測に近い。しかし、今回の研究では、東国の石垣とは権威の誇示の仕方が異なる鏡石の存在や、組織内部に対しても石垣を用いて差別化し、階層化が城郭で表されていることが、当時の織豊系城郭と類似していることが分かった。その点で、今までの説より根拠が明確であり、既に存在していた推測とは異なる。

図版

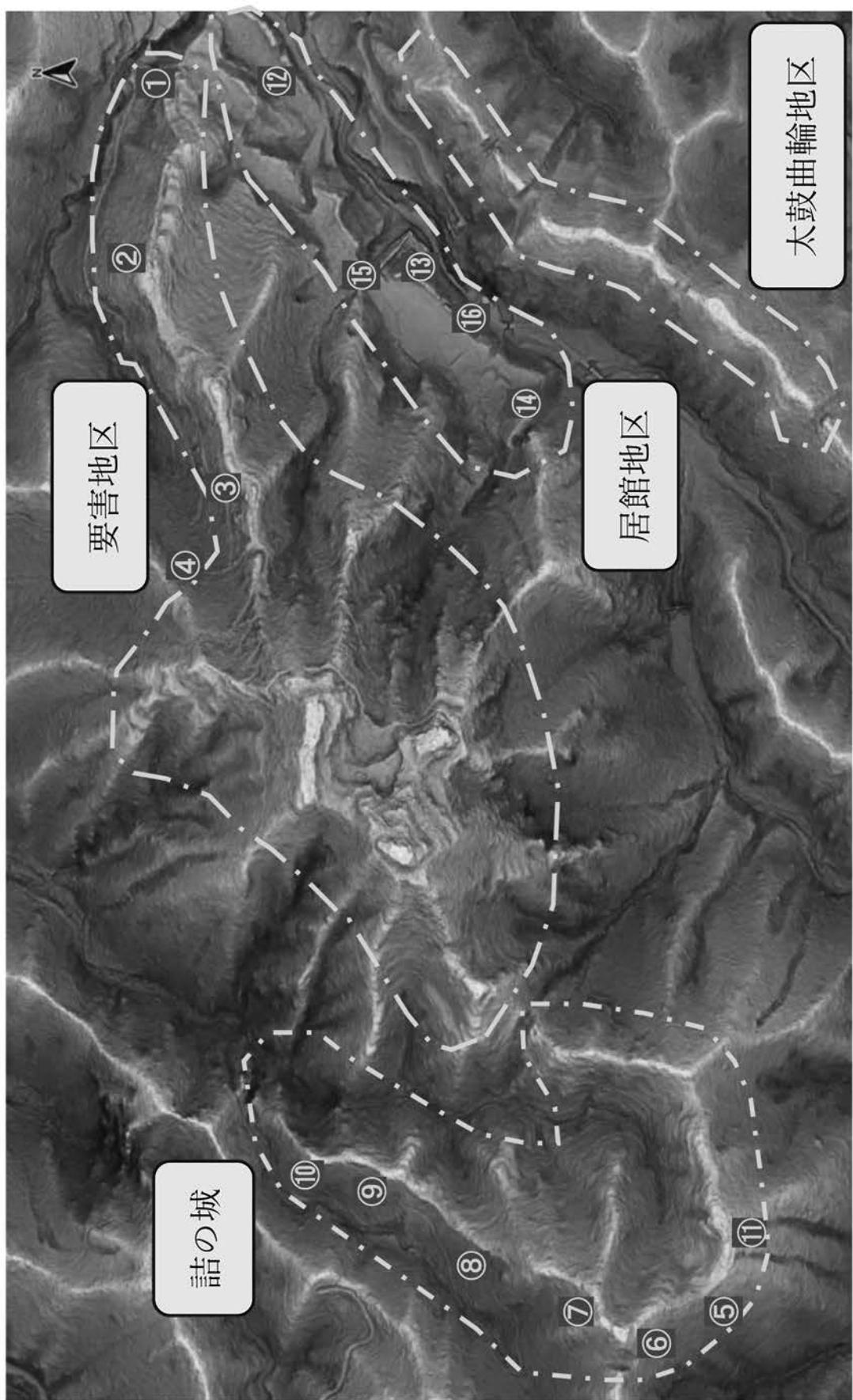


図1、八王子城赤色立体図（図中の番号はデータ採集地を表し、表番号に一致する）



図2, 城内に散乱する石



図3, 城内に露出する岩

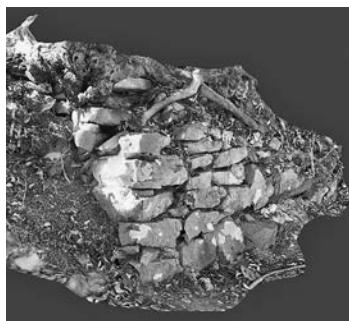


図4, 馬蹄段下石垣 3D データ

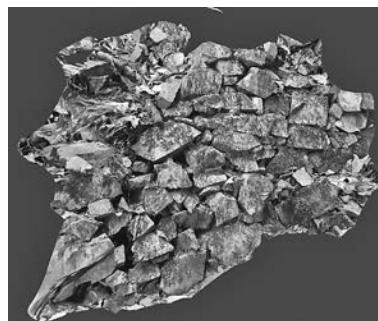


図5, 大石壠 3D データ



図6, 大石壠の実際の写真

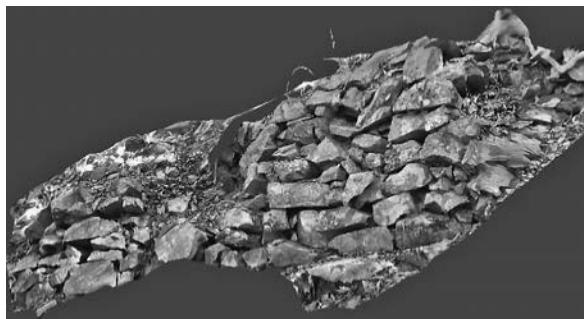


図7, 詰の城先端石垣 3D データ



図8, 詰の城先端石垣の実際の写真

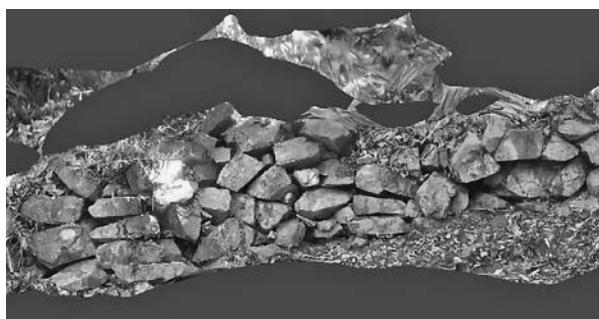


図9, 詰の城北尾根石垣 3D データ

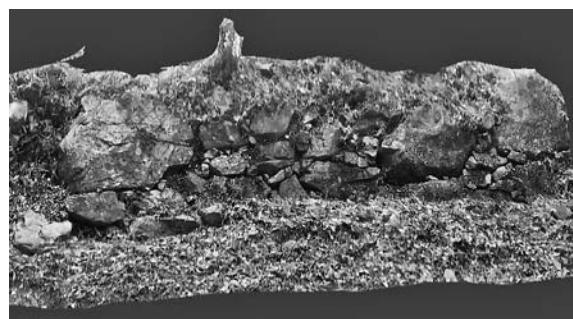


図10, アシダ曲輪石垣 3D データ

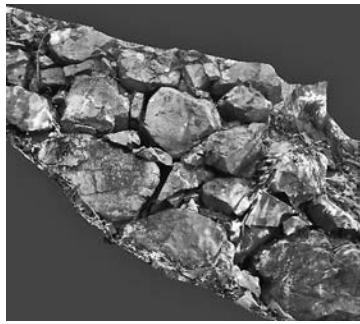


図 11, 御主殿西壁 3 D データ



図 12, 御主殿西壁の実際の写真

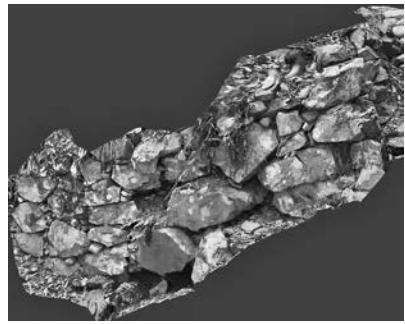


図 13, 御主殿東壁 3 D データ

表1、馬蹄段下データ

馬蹄段下	横 (cm)	縦 (cm)
	42	12
	49	18
	48	14
	44	17
	33	14
	41	20
	50	17
	41	17
	18	8
	23	9
	26	9
	35	7
	36	30
	37	26
	30	14
	35	13
	35	35
	34	18
	40	11
標準偏差	8.310125	7.20995

表2、金子曲輪下データ

金子曲輪下	横 (cm)	縦 (cm)
	22	31
	44	24
	24	16
	38	17
	40	21
	32	14
	42	15
	18	13
	45	14
	28	11
	28	15
	32	8
	13	15
	27	8
	11	6
	24	7
	21	28
	12	5
	33	24
	22	14
	25	27
	16	22
	49	25
	33	17
	25	11
	28	24
	38	17
	12	16
	43	12
	22	13
	32	22
	12	7
	13	6
	10	5
	43	12
	21	6
	32	14
	30	15
	37	29
	34	31
	40	15
	24	7
標準偏差	10.58185	7.379147245

表3、柵門東下データ

柵門東下	横 (cm)	縦 (cm)
	27	34
	27	12
	37	14
	53	20
	28	17
	19	14
	18	9
	19	10
	31	12
	27	18
	14	6
	12	13
	11	9
	11	4
	8	7
	9	4
	12	5
	8	5
	13	10
	19	16
	9	10
	7	8
	39	18
	44	33
	16	16
	25	16
	13	13
	13	11
	10	11
	37	27
	30	20
	27	18
	25	24
	41	17
	24	18
	24	8
	35	8
	15	17
	26	15
	21	19
	20	9
	14	7
	12	7
標準偏差	10.97147	6.919924

表4、高丸データ

高丸	横 (cm)	縦 (cm)
	48	16
	23	15
	16	11
	20	9
	20	5
	25	11
	37	10
	12	12
	14	9
	9	8
	19	7
	32	9
	17	12
	16	11
	15	14
	45	16
	32	22
	30	11
	25	25
	29	19
	22	27
	37	14
	47	31
	29	8
	17	12
	36	17
	36	18
	42	17
	38	13
	6	5
	6	7
	8	7
	12	7
	10	6
標準偏差	12.10765	6.204767

表5、詰城南尾根石壁データ

詰城南尾根石壁	横 [cm]	縦 [cm]
	16	13
	22	14
	14	10
	22	16
	31	21
	28	15
	30	12
	22	17
	23	11
	42	9
	39	11
	17	10
	20	11
	21	13
	15	11
	21	9
	15	8
	14	12
	29	18
	40	15
	37	10
	24	7
	21	17
	26	11
標準偏差	8.235994	3.390909

表9、詰の城北尾根データ

詰の城北尾根	横 [cm]	縦 [cm]
	50	25
	29	18
	24	16
	17	11
	37	16
	37	22
	31	14
	34	11
	42	13
	47	14
	18	16
	21	18
	41	20
	30	19
	13	11
	14	11
	16	19
	25	17
	27	18
	25	14
	20	15
	14	18
	34	15
	15	9
	29	12
	18	21
	15	10
	36	10
	39	16
	33	14
	20	6
	29	23
	18	18
	10	16
	27	21
	28	17
	8	11
	56	23
	20	16
	24	23
	40	17
	28	10
	26	12
	22	9
	11	14
標準偏差	10.9327	4.359409

表6、詰の城南データ

詰の城南	横 [cm]	縦 [cm]
	38	20
	53	18
	23	18
	26	15
	23	9
	8	6
	10	7
	35	24
	19	12
	28	22
	19	23
	33	20
	19	7
	11	10
	35	20
	10	8
	12	7
	7	7
	14	7
	11	8
	10	6
標準偏差	11.95342	6.388056

表10、詰の城先端尾根データ

詰の城先端尾根	横 [cm]	縦 [cm]
	26	13
	32	17
	16	12
	15	9
	48	26
	28	11
	30	13
	51	19
	16	13
	14	13
	27	13
	21	7
	11	7
	52	24
	26	14
	30	10
	19	14
	38	13
	18	21
	49	16
	46	23
	44	15
	23	18
	13	10
	31	21
	27	18
	43	14
	19	21
	9	8
	34	18
	33	18
	24	11
	36	25
	23	13
	24	15
	20	11
	48	21
	31	13
	13	9
	9	8
	19	10
	35	20
	23	5
	12	9
	21	17
	17	12
	11	17
	7	7
	34	12
	15	14
	30	19
	31	13
	9	6
標準偏差	12.04459	5.058715

表7、詰の城北データ

詰の城北	横 [cm]	縦 [cm]
	28	14
	18	16
	13	5
	15	11
	12	13
	13	15
	14	15
	22	17
	29	13
	13	9
	15	8
	9	8
	16	12
	25	16
	34	21
	21	23
	31	18
	46	29
	26	16
	19	11
	30	17
	18	15
	18	16
標準偏差	8.657307	5.102725

表8、詰の城大石壁データ

詰の城大石壁	横 [cm]	縦 [cm]
	25	27
	27	9
	22	21
	21	15
	16	10
	22	12
	32	14
	13	21
	7	19
	28	12
	32	18
	32	30
	21	14
	81	41
	39	39
	59	18
	45	24
	46	14
	24	10
	14	28
	19	6
	9	26
	39	14
	31	11
	18	12
	36	20
	28	18
	19	10
	16	12
	25	21
	40	29
	17	12
	22	21
	34	13
	30	21
	21	19
	17	10
	13	9
	50	22
	30	24
	30	31
	44	23
	48	23
	43	21
	32	30
	37	17
	21	18
	44	18
	48	15
	26	14
	65	16
	20	17
	28	10
	13	9
	32	11
	32	18
	38	24
	22	16
	35	28
	24	13
	26	20
	12	6
	20	14
	24	17
	22	11
	29	13
	26	10
	11	14
	19	7
標準偏差	13.31369	7.317994

表12、御主殿虎口データ

御主殿虎口	横 [cm]	縦 [cm]
	42	31
	51	25
	48	34
	41	18
	45	26
	31	19
	31	16
	30	16
	38	24
	34	27
	31	23
	29	20
	40	18
	15	9
	12	5
	29	12
	45	14
	39	20
	25	17
	13	12
	32	7
	44	36
	42	16
	32	18
	38	13
	36	33
	48	36
	59	12
	8	5
	30	19
	23	20
	29	21
	10	12
	9	8
	32	9
	32	19
	42	28
	27	12
	21	8
	35	18
	36	24
	26	7
	48	26
	14	8
	6	6
	38	30
	47	27
	35	23
	29	13
	14	9
	15	6
	30	16
	10	9
	10	10
	13	5
	15	7
	20	13
	87	92
	69	83
	90	55
	30	29
	64	37
	52	26
	36	32
標準偏差	17.08881	15.55408

表13、御主殿西壁データ

御主殿西壁	横 [cm]	縦 [cm]
	68	50
	64	35
	75	53
	30	29
	26	21
	13	11
	22	21
	25	22
	27	20
	32	25
	26	27
	44	45
	31	19
	20	11
	22	10
	42	35
	38	24
	41	34
	22	8
	21	18
	12	17
	31	27
	18	5
標準偏差	16.41245	12.56845

表14、御主殿東壁データ

御主殿東壁	横 [cm]	縦 [cm]
	61	36
	50	42
	48	28
	68	50
	53	31
	60	26
	86	34
	73	25
	57	17
	76	61
	28	22
	55	26
	95	50
	54	34
	45	22
	75	53
	89	35
	56	34
	55	32
	25	23
	33	14
	82	38
	17	18
	6	9
	8	15
	11	10
	10	8
	20	9
	11	9
	7	8
	11	8
	15	6
	23	11
	14	5
	7	7
	10	8
	8	6
	8	8
	10	12
	7	9
	6	6
	10	9
	16	12
	18	11
	12	9
	35	11
	11	9
	8	5
標準偏差	27.36196	14.58201

表15、アシダ曲輪南データ

アシダ曲輪南	横 [cm]	縦 [cm]
	54	52
	22	16
	12	11
	41	18
	15	9
	18	13
	27	14
	10	12
	21	18
	95	78
	40	38
	23	10
	23	7
	30	11
	36	12
	26	14
	17	16
	12	11
	99	61
	29	22
	76	30
	30	27
	12	8
	16	21
	12	11
	41	24
	14	8
	38	24
	24	23
	39	23
	30	17
	43	21
	11	11
	18	14
	103	73
	44	37
	47	23
	49	24
標準偏差	23.7267	16.90859

縦の長さの箱ひげ図

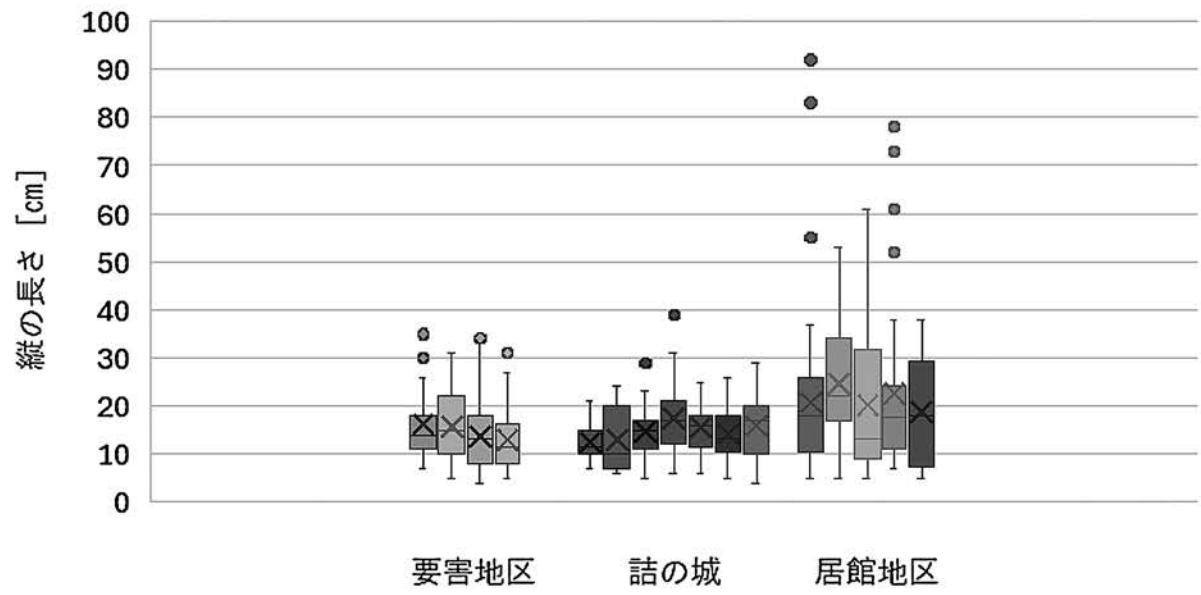


図 14, 石の縦の長さの箱ひげ図 (順番は左から表の並びと同じ)

横の長さの箱ひげ図

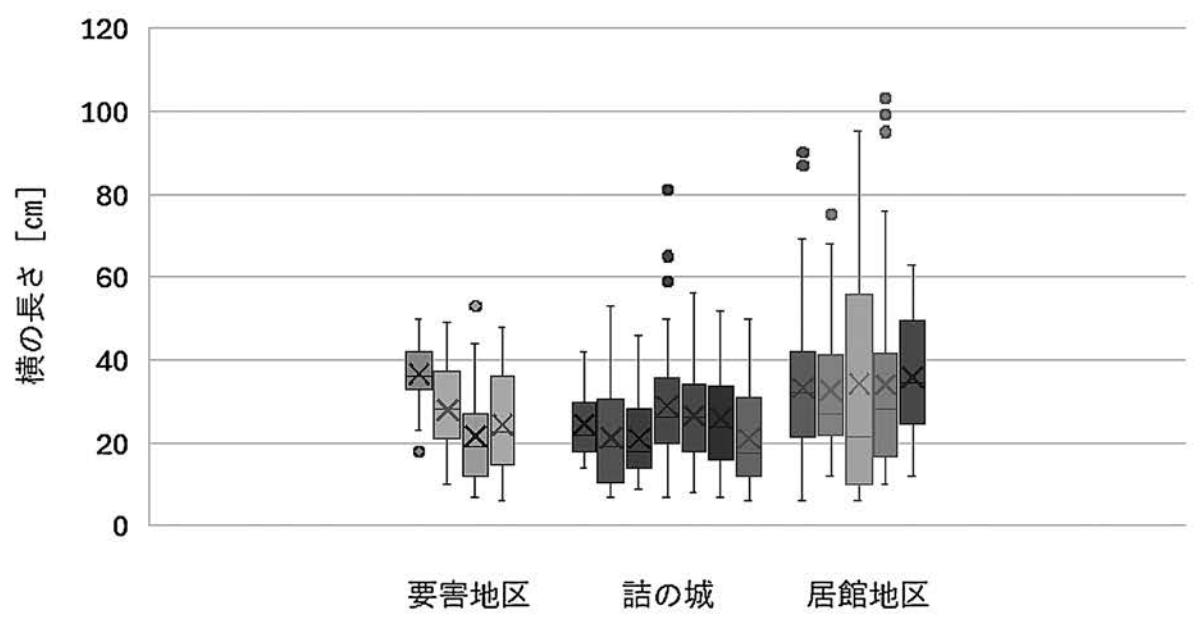


図 15, 石の横の長さの箱ひげ図 (順番は左から表の並びと同じ)

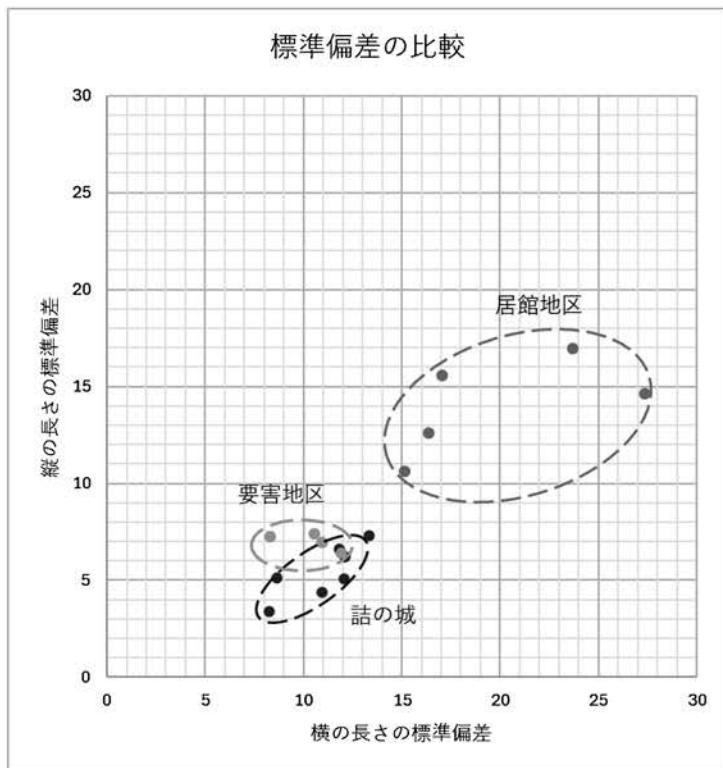


図 16. 標準偏差の比較

優秀賞

船野城と津保・郡上の抗争

～天正二年秋、郡上郡沓部をめぐって何が起きたか～

岐阜県立関高等学校地域研究部

酒向紹叶 小栗千佳 林信之介 小森渚 山根優



下呂市金山町船野城の踏査

目 次

はじめに

- (1) 家伝の記載内容
 - (2) 現地踏査と文献調査から合戦の経過を探る
 - (3) 神戸山はどこか
 - (4) 合戦の背景を地域の視点から探る
 - (5) 合戦の背景を周辺諸国の動きから探る
 - (6) 合戦の事後処理 ～信長の譴責と織田一門の危機～
 - (7) 田口、蟹沢両名について
- むすびにかえて ～津保・郡上の抗争、その後～

はじめに

船野城は、岐阜県下呂市金山町に所在する戦国期の山城である。馬瀬川沿いの船野山山頂付近に築かれた城で、小規模だが堅固な構えをもつ（図版1・2）。

郡上藩遠藤家家伝（以下、家伝と略）によると、天正2（1574）年、この城をめぐって郡上領主遠藤慶隆と加治田領主斎藤新五の軍勢が戦ったという。慶隆（1550-1632）は、織田信長に臣従しつつも反織田勢力と二重外交を行った武将として知られる。乱世を生き抜き、83歳の天寿を全うした。一方の新五（1551-1580）は、織田家の馬廻衆を務めた武将で、軍功により、加茂郡加治田・武儀郡津保を与えられふたつの城と城下町を有した。津保は郡上と境を接していたため、郡上側から「津保領主」と認識されていたようである。在地領主の慶隆に対し、馬廻衆の新五は、信長・信忠父子とともに畿内近国を転戦することが多かった。本能寺の変では信忠に殉じ、二条御所において31歳で討死した。

ともに信長配下であり、隣り合う領主でもあった慶隆と新五が、なぜ戦うことになったのか。郷土の武将の動向に関心を持った我々は、合戦に関し、文献、伝承、山城、地理環境等の調査を進めることにした。その過程で、当時の地域の諸問題や国内情勢が合戦の原因となったと結論付けた。以下に調査の概要と考察を述べたい。

（1）家伝の記載内容

郡上藩には『遠藤記』『慶隆御一世聞書』『秘聞郡上古日記』『東家遠藤家記録』等の家伝（江戸期、同系統の別本）が残されている（注1、添付資料・史料参照）。船野城の戦い（以下、船野合戦と略）に関しては、おおむね以下のようないいがてが伝えられている。

- ①天正2年、郡上に野心を抱いた津保・加治田領主斎藤新五が郡上に侵攻した。
- ②これに対し遠藤分家（木越）が夜襲をかけ、神戸山に立て籠もる斎藤方を討ち取った。
- ③田口・蟹沢両氏に率いられた斎藤勢が、郡上郡沓部村の船野山に立て籠もった。
- ④これに対し、遠藤本家（八幡）が船野山に討伐隊を送った。
- ⑤急峻な船野山攻略のため、粥川甚右衛門の計略で竹梯子を多数用意し夜襲をかけた。
- ⑥粥川甚右衛門の手勢が崖を駆け上って侵入し、敵将のひとり蟹沢氏を討ち取った。
- ⑦遠藤作右衛門の手勢が別方向から攻め、敵将のひとり田口氏を討ち取った。
- ⑧沓部村は、主将の粥川甚右衛門に恩賞として与えられた。

家伝からは新五の侵略に対し、二手に分かれた郡上勢が2カ所の城（神戸・船野）を次々と襲い、敵将を討ち取り、沓部奪回に成功した様子がうかがえる（注2）。

（2）現地踏査と文献調査から合戦の経過を探る

以下、船野城の現状を報告する。城の遺構は、飛騨川支流馬瀬川の蛇行点に向けて突き出た船野山の山頂付近（標高402m）に所在する（注3）。東西に延びる尾根上に主郭となる曲輪があり、その西側下段に曲輪、2つの曲輪をめぐる切岸の直下に帯曲輪、東側に堀切・土塁が残る。西側曲輪の西端及び南側には虎口がみられる（図版3、写真1・2）。主郭は20×14m程度、不定形な西側曲輪は12×12m程度の規模を有する。切岸直下の帯曲輪の内側には、本来、小規模な堀がめぐっていたという（注4）。堀の一部は今も西北に残るが大部分は土砂に埋もれている。東側の堀切の斜長は5mほどで、堀切の外側には、掘削土を盛り上げた土塁があり、この地点から西端の帯曲輪付近までの総延長は50m近い。東西の尾根道は比較的なだらかで、尾根をはさむ斜面は険しく攻めがたい。西側に虎口、東側に土塁と堀切を設けたのは、尾根伝いの敵襲を想定したことであろう。

家伝には、多数の竹梯子を用意した郡上勢が夜襲に成功したとある。郡上勢は、竹梯子を利用して南北どちらかの斜面から襲撃したと考えられる。馬瀬川を使えば、郡上郡和良から船野城付近まで舟で梯子を運ぶことも可能である。川から近い北側斜面から攻めたのではないだろうか。また、地元の伝承によれば、郡上勢は、密かに通じた下沓部（馬瀬川左岸の集落）の庄屋を道案内にし、西側の尾根筋から攻め寄せたという（注5）。

家伝の記載、地元の伝承、山城の立地や遺構の在り方を総合的に検討した結果、「まずは北側斜面から竹梯子を使って駆け上がって来た一隊（粥川甚右衛門勢）が奇襲により城内を攪乱し、その隙を突いて、西側尾根筋からやって来た一隊（遠藤作衛門勢）が第二波の攻撃を行ったのではないか」と、我々はイメージした（図版4）。あくまで推論ではあるが、今後の検討材料として、我々の思考過程を書きとめておく。

文献を読み、現地を歩き、地元の方々の話を聞くと、まるで合戦の状況が眼前に浮かんでくるように思えた。やはり現地踏査は欠かせないものだと、改めて感じた。

（3）神戸山はどこか

船野城に関しては、家伝のほか『新撰美濃志』にも記載があり（注6）、城や合戦に関する伝承が複数残されている（注7）。船野城の位置は確定的である。

では、神戸山はどこにあったのか（注8）。船野山に関しては郡上郡沓部村と家伝に地名が明記されているが、神戸山に関しては地名の記載がない。島田崇正氏（富加町教育委員会）から、津保城の北7キロほどの地点（関市上之保）に神戸の地名が残されていると聞き、現地を訪れてみた。神戸は津保川右岸の集落で、背後に切り立った山（標高406m、神戸山）がそびえたつ（図版5、写真3）。登山路がはっきりしないため、いまだ踏査を行なっていないが、立地や外観、赤色立体地図の地形情報（尾根沿いの平坦面等）から、津保から船野に向かう街道沿いのこの山こそ、神戸城の所在地であると判断した。

郡上勢の狙いは、神戸城占拠による津保・船野間の連絡路遮断と、孤立した船野城の占拠にあったにちがいない。

（4）合戦の背景を地域の視点から探る

次に我々は、家伝とその他の史料を比較検討し、合戦の経過を検証することにした。結果、合戦の背景に、地域の諸問題と国内情勢、ふたつの事情があることがみえてきた。

まずは地域の諸問題について触れる。永禄8（1565）年11月、東美濃を攻略した信長は、武儀郡の津保川流域、及び郡上郡沓部村を新五にあてがった（注9）。沓部は本来、慶隆の所領であったが、信長はこれを取り上げ新五の知行とした。新五は信長父子の馬廻衆であったから、沓部は織田直轄領となつたということになる。沓部から放生峠を越えて津保にいたるルートは、飛驒と岐阜城を結ぶ最短ルートである。広大な城下町と堅固な山城を有する津保は、そのルート上の要衝であった。岐阜城下町の整備を急ぐ信長は、木材資源確保のため、新五を通じ、流通ルートの直接掌握を狙つたと思われる（注10）。

一方、慶隆にとって、沓部は木曽川水系への唯一の出口であった。木材や薪炭など豊富な森林資源を搬出する利権は、相当なものだったと思われる（注11）。要地と利権を奪われた慶隆が不満を抱くのは当然である。慶隆が、信長に臣従しつつも、朝倉、浅井、本願寺、武田と連絡を取り合っていたことに関しては複数の指摘がある（注12）。二重外交を展開しながら、沓部奪回の機会を狙っていたのかもしれない。このような状況下、信長は、馬廻衆の新五や佐藤方秀に対し郡上監視を命じたと考えられる（注13）。郡上を包囲する

かのような津保城やその出城（神戸・船野）、加治田城、鉈尾山城、関城等、織田方の山城群の配置や遺構の在り方は、その証拠であろう（注14）。実際、織田領北辺の山城群は、反織田勢力にとって邪魔な存在であり、信玄や長政も警戒を怠っていなかった（注15）。

天正6（1578）年、信長の命を受けた新五は、美濃・尾張の兵を率いて越中に侵攻、上杉勢相手に越中月岡野で大勝を収めた（注16）。津保城は、この時、前進基地として重要な役割を果たしたと考えられる。永禄末～天正初年の段階で、交通路・市場の整備、情報収集、調略など、飛騨・越中攻略に向けた準備は、すでに、本格化していたはずである。

さらに見逃せない出来事として、天正元（1573）年の天正寺建立が挙げられる。津保城から5キロほど南に所在する臨済宗寺院であり、開山燈外宗晋は、飛騨安国寺住職や岐阜瑞龍寺輪番住山を務めた人物で、本山妙心寺の掲書にも名を連ねた高僧であった（注17、写真4）。飛騨や岐阜、京都を行き交い、織田本宗家ともつながった燈外が、津保に拠点を構えた意義は大きい（注18）。背後には織田政権の政治的意図があったと思われる。

このような津保における一連の動きは、郡上勢にとってみれば、領国を脅かす「敵対行為」と映ったのではないか。実際、家伝にも「津保・梶田（加治田）領主斎藤新吾と申者、郡上ヲ攻取んと…」「斎藤新五郡上ヲ心懸テ…」とあり、新五の侵略行為を強調する書きぶりとなっている（注19）。さらに、「河合角左衛門口上聞書」には、「但馬守様（注：慶隆のこと）…御若年之時、津保之斎藤新五殿と度々御取合御座候…」とある（注20）。

「御取合」とは奪い合いのことであり、船野合戦以外にも、慶隆・新五両者の間に領地や利権をめぐる争奪戦が度々あったことを示唆する史料である。

船野合戦のあった天正2年、慶隆は24歳、新五は23歳であった。ともに「御若年」である。諸史料を重ね合わせると、血気盛んな若武者ふたりの姿が思い浮かぶ。船野合戦の背景には、織田家中での立ち位置の違い、津保・郡上双方の地域対立、積年の怨恨、一向宗門徒の多い郡上の土地柄等、様々な要因が重なり合っているのであろう。

（5）合戦の背景を周辺諸国の動きから探る

続いて、国内情勢から合戦の背景を探りたい。合戦が起きた天正2（1574）年は、信玄の後継者勝頼が、織田氏や徳川氏を激しく攻めた年であった。1月、勝頼は、信濃から東濃に侵入、4月までに苗木城、岩村城など計18ヶ城を攻め落とした。信長・信忠は反撃を企てたが、武田の猛攻の前に撤退を余儀なくされた。5月、勝頼は家康の高天神城を攻め6月にこれを占拠し、9月には浜松の城下町を焼き払った。信長・家康にとっては、勝頼に振りまわされた1年といつても過言ではない（注21）。この頃、勝頼と戦っていた上杉謙信は、再三にわたり信長に出兵を求めたが、信長が兵を動かさなかつたため、苛立ちをあらわにする。事態打開を図るために、上杉家重臣河田長親に書状を送ったのは、取次役を務めていた新五であった（注22）。相次ぐ合戦への従軍、遠藤謀反への対応、さらには対上杉外交を同時にこなす新五及び家臣団の労苦は、並大抵ではなかつのではないか。

この間、信長は、勝頼の猛攻に苦しみながらも、伊勢長島一向一揆の鎮圧に乗り出した（注23）。信長・信忠父子は、7月13日、岐阜から伊勢方面に向かい、14日に長島攻撃を開始した。馬廻衆の新五や方秀も主君父子に同行している。激戦の末、信長は長島を攻略、9月29日、一揆勢を壊滅に追い込み、岐阜に帰陣している。

船野合戦は、まさにこのタイミングで始まった。慶隆は、信長や新五、方秀の留守を狙つて攻撃に踏み切ったのであろう。家伝の伝える夜襲の日付はまちまちだが、諸史料を総

合的にとらえると、神戸攻撃が7月14日（慶隆御一世聞書）、船野攻撃が8月14日（秘聞郡上古日記）だったのではないか。7月14日は長島攻撃・遠藤謀反の開始日であり、おそらくは一向一揆敗北の9月29日をもって、遠藤謀反もまた終わったのだろう。

以上にみたとおり、史料から復元し得る天正2年の動向と、家伝の記録に残る船野合戦の顛末に大きな矛盾はみられない。船野合戦は、津保と郡上の地域対立という事情に加え、信長と反信長勢力の抗争という国内情勢を背景に起きた出来事であった。

（6）合戦の事後処理～信長の譴責と織田一門の危機～

新五との確執があったにせよ、慶隆が信長に反逆した事実は動かしがたい。それにも関わらず、『信長公記』や一次史料からは、慶隆が罰せられた形跡がうかがえない。疑問を抱き諸史料にあたった我々は、「粥川氏由緒書」（以下、由緒書と略）の以下の記載に注目した（注24）。由緒書には「慶隆が信玄に味方したため、信長が郡上に使者を派遣した。慶隆は立花山（美濃市立花）まで出向き、粥川家の子息甚右衛門もこれに従った」「粥川らは信長に立ち向かうべく戦の準備を進めた。主命に従い自重しつつも撤退しなかった」「その後、無事に事が運び、何事もなく慶隆は帰った」と書かれている（注25）。

この史料に関し『郡上郡史』は、武田と通じた慶隆が、信長に譴責されたものの許されたと解釈する。そして由緒書に信玄の名が登場することから、この一件を信玄の西上作戦（1572-1573）と関連付ける（注26）。我々は、信長の譴責に関しては同意するが、時期に関しては、信玄ではなく勝頼の時代、すなわち天正2（1574）年のほうがより妥当と考える。確かに、信玄と慶隆は密書を交わしているが、慶隆が信玄に呼応して武力行使したとは、家伝を含めどの文献にも書かれていません。一方、天正2年には船野合戦が行われている。由緒書に信玄と書かれているとはいえ、郡上の中には信玄と勝頼を混同した事例があるので（注27）、由緒書に関しても誤記の類いと考えてはどうだろうか。

その後、遠藤勢は信長に従い、翌年5月の長篠の戦い、7月の越前一向一揆鎮圧で、めざましい活躍を見せた（注28）。裏切りへの寛大な処置に対し、必死になって報いるかのような行動である。信長の慶隆への寛容な態度は不可解にも思えるが、織田家の側にも事情はあった。伊勢長島の戦いの終盤、一揆勢の猛反撃により、信長の叔父信次や信実、兄信広、弟秀成、従兄弟信成・信昌・仙、義弟の信直や佐治信方等、有力な一門衆が次々討死したのである。一揆勢虐殺の陰で、織田一門も壊滅的といつてよいほどのダメージを被っていた。「ぶざま」（谷口克広氏）、「織田家の総帥としての面目まるつぶれ」（和田裕弘氏）とまで言われる惨状であった（注29）。このような状況に加え、勝頼や本願寺といった強敵を抱えた状態では、慶隆を許さざるを得なかつたのかもしれない（注30）。

（7）田口、蟹沢両名について

苗字のみで名前は伝わっていないが、新五の代官として船野を守っていた武将が、田口と蟹沢の両名である。田口は益田郡を本貫とする土豪であり（注31）、今でもこの地域には田口姓が多い。沓部の北、祖師野に所在する祖師野八幡宮の宮司は、代々田口氏が相続し今日にいたっている（注32、添付資料・史料参照）。八幡宮には元亀元（1570）年の棟札が残されている（注33、写真5、史料2）。宝殿新築の棟札写であり、別当坊及び社家一門が、国王安穩とともに、地頭・代官・氏子の繁栄を願う内容となっている。「地頭」は、元亀元年当時、この地の領主であった新五、「代官」は船野城の田口氏であった可能性が高いと考える。さらに「神主田口沙汰人」なる人物にも注目したい。この人物は「神

主」であると同時に、村の指導者「沙汰人」でもあった。「神主田口沙汰人」は「代官」すなわち船野城の田口氏と同一人物か、もしくは近親者であったと考えたい。

むすびにかえて　～郡上・津保の抗争、その後～

「河合角左衛門口上聞書」の記載が示唆するように、境を接した津保と郡上の間には、商業利権や土地の境、交通網整備など、地域特有の問題が積み重なっていたと考えられる。遠藤家としては、家伝編纂の段階で、旧主信長をあからさまに批判するわけにもいかず、新五を名指しで槍玉にあげるほかなかったのかもしれない。新五にとって、加治田が本城であって津保は出城に過ぎなかつた。であるにも関わらず「津保・加治田領主」「津保之斎藤新五殿」などと、ことさらに「津保」の地名を冠して呼ぶ当たりに、郡上側の心理や、立ち位置が読みとれよう。

慶隆にとって新五は、沓部を奪った仇敵だった。対する新五本人は、馬廻衆として各地を転戦することが多かったので、領内統治はもちろん、遠藤氏への備えや対上杉外交も、加治田衆と呼ばれる家臣団、禅僧・商人らの側近が担っていたと考えられる。佐藤利堯や佐藤忠能ら親族、崖良沢、長沼三徳、西村治郎兵衛、湯浅新六ら有力家臣に加え、有力商人や禅僧が、その役割を果たしていたと思われる（注34）。加治田では、佐藤忠能、崖良沢らが実務を担っていたと考えられるが、津保の様子は文献がないので不明である。ただ、城郭や城下町の規模から、相応の組織があったと想像される（注35、写真6・7）。加治田衆の有力者が津保に常駐し、飛騨川流域の建築材を扱った商人の長谷川三郎兵衛や、天正寺の燈外らがこれを支え、津保支配や北方対策全般に関わったのではないだろうか。

新五討死（1582）ののち、求心力を失った加治田衆は四散し、可児郡金山城の森家の統治下に入った（注36）。津保城も、郡上新城主となつた稻葉貞通の支配下に組み込まれた（注37）。新五の存在は人々の記憶から遠のいたようである（注38、写真8・9）。

ところが、新五の死後18年を経た慶長5（1600）年、驚くべき出来事が起きた。豊臣秀吉の怒りを買い郡上を追放された慶隆が、旧領奪回を目指し、突如郡上城を襲撃したのである（注39）。関ヶ原の前哨戦と位置づけられるこの合戦は、稻葉・遠藤両者の和約で終局を迎えるが、戦いの最中、最大の激戦地となつた搦手に「斎藤新五牢人」を名乗る人物が登場する（注40、写真10）。絵図には、この人物と思しき武者が、十文字槍を携えて戦う様子が描かれている（注41、写真11）。この人物は誰か。いかなる経緯で参戦したか。一切不明であるが、新五牢人と記されているところから考えると、かつての津保・郡上の抗争（1565～1574）が、伏線のひとつとして思い浮かぶ（注42）。稻葉氏の郡上城が遠藤勢の攻撃を受けていたころ、飛騨の金森可重も遠藤氏の援軍として参戦し津保城を襲撃している。津保城主は稻葉貞通の嫡男典通であり、典通は新五の甥にあたると考えられる（注43）。このことも、新五牢人が稻葉氏に加勢した背景のひとつなのかもしれない。

江戸期になると、津保・郡上の抗争は、忘れ去られた過去の出来事となった。今、残されたわずかな史料を読み返すと、当時の人々の情念が伝わってくるように思える。さらに諸史料へと探索を広げると、抗争の背景に、地方の事情や国内情勢が複雑に絡み合っていることが分かった。史料の読解や記録に際し、生成AI、三次元撮影、標高測定等の様々なアドセンスにも随分と助けられた。郷土史の奥深さや難しさ、パズルを解くような醍醐味を、一度に味わうことのできた貴重な体験であった。今後も、地元資料への丁寧な目配りを忘れず、しかも外に目を向け大局を見失わないようにしようと思う。

添付資料 【補注】【図版】【写真】【史料】の順に掲載。【協力】は末尾に付す。

【補注】

- (1) 八幡町教育委員会『郡上八幡町史史料編 1』1985 に掲載。このほか国立公文書館デジタルアーカイブで『遠藤家譜』(『遠藤家旧記』)が公開されている。いずれも江戸中期以降の所産で、同系統の別本に相当すると考えられる。史料を参照。
- (2) 遠藤氏には本宗家（八幡）と分家（木越）があり、両遠藤と称された。
- (3) 佐伯哲也「船野城」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第 4 集飛騨地区・補遺』岐阜県教育委員会 2005
- (4) 名和芳久氏（金山町船野地区在住）のご教示。
- (5) 同上
- (6) 『新撰美濃志』参照。江戸後期、尾張藩士がまとめた美濃国地誌。
- (7) 地域の方々から、下記のような伝承やエピソードをうかがった。
- ・下沓部集落は郡上に内通し、城攻めの際には案内役を務めた。
 - ・打尾集落に残るオシオキ（御仕置か）の地名は、郡上勢が城に籠った田口らを処断した場所と言われる。
 - ・下沓部集落の昌満寺（臨済宗妙心寺派）では、近年まで合戦犠牲者の供養が行われていた。今も境内墓地の一角にその供養塔と言われる五輪塔（16世紀の所産）2基が残る。
 - ・船野集落には軍装の地蔵尊石像や銘文のない墓石2基が祀られている。年代不明。
 - ・昭和 20 年代、地元の東小学校で、船野合戦の劇が学芸会で上演されたことがあるという。
- (8) 郡上郡教育会『郡上郡史』1922 では、神戸城を横井城（郡上市和良）に比定している。「奥御殿」と「斎藤佐玄太」なる人物の伝承を傍証とするが地名の一致はなく根拠は薄い。
- (9) 「斎藤新五宛織田信長知行宛行状写」(備藩国臣古証文)、「斎藤新五宛織田信長黒印状写」(備前国臣古証文)に記載（富加町教育委員会『富加町史史料編』1975 所収）。
- (10) 関高等学校地域研究部「戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材」『第 18 回全国高校生歴史フォーラム発表集』2024、同「「東美濃三カ所城」をめぐって～山城と古文書から考える中濃の戦国史～』『岐阜県立関高等学校地域研究部報告第 9 号』2024
- (11) 同上
- (12) 八幡町教育委員会『郡上八幡町史通史編上』1960、小笠原春香『戦国大名武田氏の外交と戦争』2019 ほか
- (13) 東美濃の北方に広がる飛騨や郡上には、武田や上杉の勢力が及んでおり、その双方との安定した関係を望む織田信長にとっては、いたずらに介入することがばかられる緩衝地帯でもあった。斎藤新五（加治田）と佐藤方秀（上有知）、ふたりの馬廻衆の領地は、その緩衝地帯と境を接する「織田政権北辺の要」に位置する。意図的な配置と考えられる。
- (14) 津保城では、郡上街道に面した西斜面に計 5 本の堅堀を設けている。織田氏の直轄領だった関町の関城も、曲輪群や堅堀で北斜面の防備を厳重に固めている。織田政権は、佐藤方秀の鉢尾山城、新五の加治田城の 2 カ所を核とし、内通の恐れのある郡上への抑えとしたと考えられる。遺構の現状と考察については、森島一貴「関城」「鉢尾山城」『岐阜の山城』2010、森島一貴「大洞城」『東海の名城を歩く』2019 が参考となる。なお、本稿で津保城と呼ぶ山城に関しては、大洞城の名称が定着しているが、誤認による命名が指摘されている（『富之保村誌』）

1925)。地域研究部では、戦国～江戸初期の文献で確認できる津保城の呼称を使用している。

(15)「元亀元年越陣宛武田信玄朱印状」「元亀四年越中勝興寺宛浅井長政書状」、注 10 を参照。

(16) 関高等学校地域研究部「「月岡野の戦い」の検証と創作活動への応用に関する試論～歴史漫画『斎藤新五利治』の制作をめぐって～」『岐阜県立関高等学校地域研究部報告第 7 号』2023

(17) 横山住雄「永禄・元亀・天正期の飛騨安国寺」『飛騨の中世第 9 号』2018 を参照。燈外に関しては、堀祥岳氏（安国寺住職）、小西弘道氏（天正寺住職）からご教示をたまわった。

(18) 「瑞龍寺方丈棟札（天正九年七月）」（『南化玄興遺稿』）に、岐阜城主織田信忠の保護の下、燈外が方丈を再建したとある。燈外は瑞龍寺に塔頭臥雲院を建立したことでも知られる。

(19) 注 1 掲載の家伝を参照。

(20) 『白鳥町史史料編』1973 所収、高橋教雄『郡上の中世と遠藤慶隆』1998 参照。

(21) 平山優『徳川家康と武田勝頼』2023 ほか

(22) 「河田長親宛斎藤新五利治書状写」（富加町教育委員会『斎藤新五利治』2023）を参照。

(23) 池上裕子『織田信長』2012、谷口克広『織田信長合戦全録 桶狭間から本能寺まで』2002、和田裕弘『信長公記 戦国覇者の一級資料』2018 ほか

(24) 郡上郡教育会『郡上郡史』1922 より引用。原史料は「経聞坊旧記」に収録。

(25) 由緒書に登場する粥川甚右衛門は、船野合戦で主将を務めた人物である。

(26) 前掲 (24)

(27) 「東家並遠藤氏家伝聞書」の中に「然所ニ信長より信玄を御退治被成、信長天下御治、追付太閤御代ニ罷成…」との記載がある（『白鳥町史史料編』1973 所収）。

(28) 長篠の戦いに際し、慶隆が派遣した弟慶胤は鳶ヶ巣山の戦いで軍功をあげた。越前一向一揆制圧戦においては慶隆自ら出陣した。越前で金森長近と合流、穴馬城及び大野城を攻め落としている（家伝）。『信長公記』によれば、長近は越前侵攻の前に郡上入りしたという。長近は、この時、慶隆に一向一揆との決別を迫ったと考えられている。慶隆はそれに応じ、織田家の武将として生きる道を選んだのであろう（小笠原春香「美濃郡上安養寺と遠藤氏」戦国史研究会編『戦国期政治史論集西国編』2017 を参照）。

(29) 谷口克広『織田信長合戦全録 桶狭間から本能寺まで』2002、和田裕弘『信長公記 戦国覇者の一級資料』2018 ほか

(30) 以後、織田政権は膨張を続けるが、織田家一門自体は打撃を受け弱体化した。

(31) 金山町教育委員会『金山町誌』1975

(32) 同上

(33) 「祖師野八幡宮棟札」は金山町教育委員会 1075 所収。添付資料・史料を参照。

(34) 富加町教育委員会『富加町史通史編』1984 ほか

(35) 高田徹「大洞城」『岐阜県中世城館総合調査報告書第 2 集』岐阜県教育委員会 2003、森島一貴「大洞城」『東海の名城を歩く』2019、『富之保村誌』1925、『上之保村誌』1938、『武儀町史』1992 ほか

(36) 富加町教育委員会『富加町史通史編』1984 ほか

(37) 八幡町教育委員会『郡上八幡町史史料編 2』1986

(38) 加治田や郡上には新五の文献・伝承が残されているが、津保地域では未確認である。

(39) 八幡町教育委員会『郡上八幡町史通史編上』1960

(40)『郡上城責後詰之図』臼杵市教育委員会所蔵資料、八幡町教育委員会『郡上八幡町史史料編2』1986所収

(41)『濃州郡上合戦図』臼杵市教育委員会所蔵資料、八幡町教育委員会『郡上八幡町史史料編2』1986所収

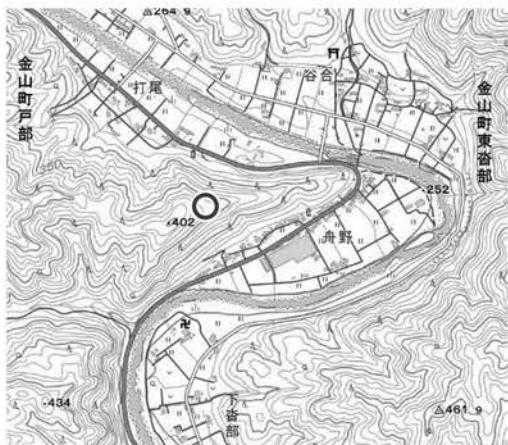
(42) 絵図に書かれた人名は、いずれも稻葉家かもしくは敵方の遠藤・金森家の将兵のものである。新五牢人の記名は異例であり、わざわざ大書するからにはそれなりに知名度や話題性があった人物の可能性がある。斎藤家旧臣の牢人でありしかも戦慣れした十文字槍の使い手、知名度のある人物、これらの要件を満たす人物として、加治田衆のひとり、湯浅新六をあげることができる。新六は加茂郡山之上村（美濃加茂市）の住人で、元々、佐藤忠能に仕えた人物であった。堂洞合戦（1565）では敵将岸信房の首をあげ、翌日の絹丸合戦では攻め寄せた長井道利の軍勢を撃退し、新五から一字を与えられ新六と名乗るようになったという（『永禄美濃軍記』『堂洞軍記』『南北山城軍記』等）。軍記には槍の使い手として登場する（『南北山城軍記』では十文字槍の使い手）。その実在は山之上の十二社神社棟札で確認できる。棟札には、天正11年、新六が施主となり社殿を再建したと記されている。本能寺の変の翌年にあたるので、社殿再建は旧主一周忌の追善供養だった可能性がある。加治田城廃城後は新たな主君に仕えず、山之上に居住し道牧入道と名乗った。前掲の軍記はいずれも同系統であり、このうち『永禄美濃軍記』（元禄13年）には、新六が子孫に語った内容を筆録したものと奥付されている。その後、新六の家系は山之上村の庄屋として存続し、子孫によって今も新六の供養が行われている。遠藤家家伝によれば、慶長5年8月、遠藤・金森の急襲を受けた稻葉家では、兵の不足を補うため、領内の百姓・町人・牢人を徵発したという。新六の生没年は不明だが、新五や慶隆と同世代とするなら50歳過ぎであろうか。加治田に伝わる江戸期の軍記には、潤色も多くみられるが、大筋は『信長公記』や一次史料と一致する。現状、「新五牢人＝新六説」は、もちろん推測の域を出ないが、「新五牢人」の候補のひとりとして紹介しておく。

(43)木下聰『斎藤氏四代』2020、富加町教育委員会『織田信長の東美濃攻略を考える』2021ほか

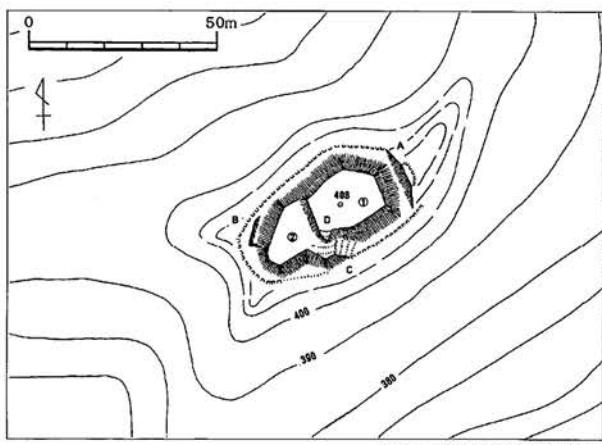
【図版】



(1) 船野城・神戸城・津保城位置関係図（国土地理院）2024ぎふ総文祭発表資料より



(2) 船野城位置図（国土地理院）



(3) 船野城縄張り図 注3文献より

①②曲輪 A堀切 B堀残存 C虎口



(4) 郡上勢侵攻想定図（国土地理院）



(5) 神戸城位置図（国土地理院）

【写真】



(1) 船野城

右から土塁、堀切、主郭切岸



(2) 船野城

堀切から切岸と主郭を臨む



(3) 神戸城推定地（関市上之保）



(4) 天正寺燈外宗晋像（関市下之保）



(5) 祖師野八幡宮棟札の調査

（下呂市金山町祖師野）



(6) 津保城石垣（関市富之保）



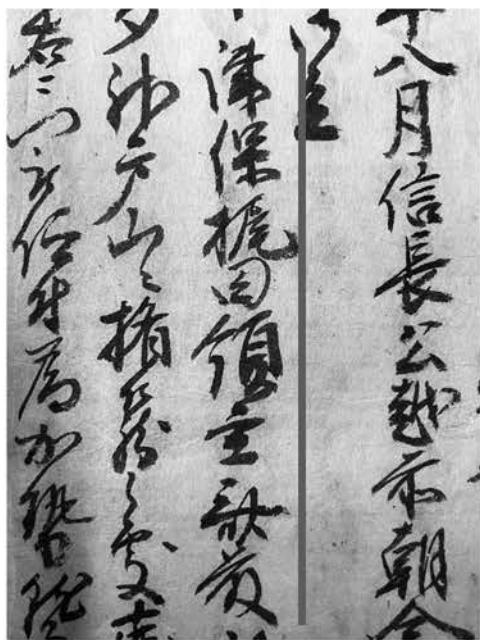
(7) 津保城（関市富之保）

津保川対岸の城下町より臨む



(8) 斎藤新五供養塔（京都市阿弥陀寺）

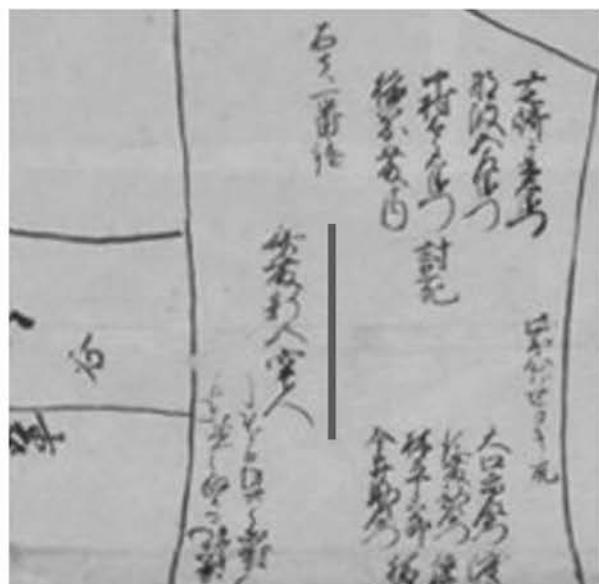
行年 31 歳を意味する銘文が刻まれている



(9)『慶隆御一世聞書』(部分)

(郡上高等学校蔵)

傍線部：「津保梶田（加治田）領主斎藤…」



(10)『郡上城責後詰之図』(部分)

(臼杵市教育委員会蔵)

傍線部：「斎藤新五牢人」



(11)『濃州郡上合戦図』(部分)

(臼杵市教育委員会蔵)

『郡上城責後詰之図』(守備配置図)との間に、対応関係がみられる。

青矢印の人物が「斎藤新五牢人」と考えられる。

【慶長 5 年郡上合戦・搦手の戦いの関連図・関連写真】



前掲『郡上城責後詰之図』(守備配置図) (部分)

青円内上端に、搦手の堀切が表現されている。上方からは寄せ手の金森勢が迫る。堀切を挟んだ下方に、稲葉方の武者 4 名 (1名討死)、斎藤新五牢人は配置されている様子がわかる。



前掲『濃州郡上合戦図』(左、部分)とその舞台となった郡上城の搦手堀切の現状(左)。
合戦図の左手が寄せ手の金森勢。右手が稲葉勢。

【史料】

調査対象とした史料のうち、郡上藩遠藤家家伝（『八幡町史史料編 1』1985 掲載）及び祖師野八幡宮棟札（『金山町誌』1975 掲載）の現代語訳を作成し掲載した。

（1）郡上藩遠藤家家伝のうち、『遠藤記』『慶隆御一世聞書』『秘聞郡上古日記』の翻刻及び現代語訳を掲載する。内容の分析、考察に関しては本文に詳述した。

『遠藤記』（宝暦七年、1757）

斎藤新吾郡上へ攻来ル事

天正二年当国津保梶田領主斎藤新吾と申者郡上ヲ攻取んと人数ヲあまた神戸山に楯籠ル之所新兵衛胤基之討手として吉田左京進竹村弥平吾蓑嶋弥兵衛に被仰付夜打にして攻落ス、同年九月斎藤新吾が残党田口蟹沢之両人郡上沓部村船野山に楯籠ル所慶隆之討手として鷺見弥五左衛門遠藤作衛門（勘解由之事）並餌取氏組下之者共指向十月十四日の夜不意に押寄せ甚右エ門計略ヲ以て竹にて階子ヲ数多用意し険山の岩壁フ安々・登り陣中に乱入切テ廻レハ兼而より案不知の斎藤勢逃ルニ通なく防ぐに術なく散々に成て追落され討る者數不知不覺也し事共也粥川甚右門ハ蟹沢ヲ計取作右工門ハ一方より忍入しに無難田口ヲ討取即時ニ城ヲ乗落しける此時餌取六右衛門家の子和田源左エ門山崎縫殿之介討死ス粥川甚右エ門此度の戦功抜群成りとて沓部村ヲ被下ケリ

<現代語訳> 天正2年、当国(美濃)津保・梶田の領主である斎藤新吾という者が、郡上を攻め取ろうと多数の兵を集め、神戸山に立て籠りました。これに対し、新兵衛胤基は討伐隊を編成し、吉田左京進・竹村弥平吾・蓑嶋弥兵衛らに命じて、夜襲を仕掛けさせ、これを攻め落としました。同じ年の9月、斎藤新吾の残党である田口・蟹沢の両名が、郡上の沓部村にある船野山に立て籠りました。これに対して、慶隆は討伐隊を送り、鷺見弥五左衛門・遠藤作衛門(勘解由)をはじめ、餌取氏配下の者たちを指揮して向かわせました。そして10月14日の夜、不意をついて討伐隊が押し寄せました。粥川甚右衛門は計略を巡らし、竹で多数の竹梯子を準備して、険しい山の岩壁を苦もなく登り、敵陣に乱入。敵を切りまくると、斎藤勢はあらかじめ逃げ道を把握していなかったため、退路もなく成す術もなく四散し、追い落とされ、討ち取られた者の数は知れませんでした。この戦いで、粥川甚右衛門は蟹沢を討ち取り、遠藤作右衛門は別の方向から忍び入って、田口らを討ち取り、そのまま即座に城を奪い落としました。しかし、この戦いの中で、餌取六右衛門家の子・和田源左衛門と山崎縫殿之介が討死しています。粥川甚右衛門はこのたびの戦功が抜群であったため、恩賞として沓部村を与えられました。

『慶隆御一世聞書』（年代不詳）

一 同二年津保梶田領主斎藤新五郡上ヲ心懸テ人数々多神戸山ニ楯籠候處、慶隆様ヨリ為討手ト粥川甚右衛門被仰付為加勢鷺見弥五衛門遠藤作右衛門並餌取氏組下之者共被指向七月十四日ニ夜討ニ仕候。険山故甚右衛門以武略竹梯子数多致用意岩壁をつたひ蟹沢を討取暫時に城を攻落候。作右衛門ハ一方より忍入田口を討取中候。此節餌取六右衛門家之子和田源左衛門山崎縫殿助致討死候。右忠節として沓部、粥川に被下候。

<現代語訳> 天正 2 年、津保・梶田の領主である斎藤新五が郡上を手に入れようと考え、多くの兵を率いて神戸山に立て籠もりました。これに対し、慶隆様は討伐軍として粥川甚右衛門に出陣を命じ、さらに加勢として鷺見弥五衛門・遠藤作右衛門、そして餌取氏配下の者たちを指揮して差し向いました。7月14日、夜襲を仕掛けました。神戸山は険しい山でしたが、甚右衛門は武略を巡らし、竹で数多くの梯子を準備し、岩壁をよじ登り、蟹沢を討ち取ったうえ、ほどなくして城を攻め落としました。一方、遠藤作右衛門は別方向から忍び入り、田口を討ち取りました。しかし、この戦いの中で、餌取六右衛門家の子息・和田源左衛門と山崎縫殿助は討死しました。この忠義と戦功への褒美として、沓部村が粥川に与えられました。

『秘聞郡上古日記』(文政六年、1819)

一 天正二年津保梶田領主斎藤新五攻來神戸山ニ楯籠所、為討手吉田左京進竹村弥平次箕嶋弥兵衛ニ仰付夜討ニ攻落、同年斎藤新五残党田口氏蟹沢氏沓部村船野山ニ楯籠所、為討手粥川甚石衛門加勢鷺見弥五右衛門遠藤作右衛門並餌取氏組下共被差向八月十四日夜討にす、陥山故粥川以武略竹階子多致用意岩壁を傳ひ蟹沢を討取、作右衛門へ一方より攻入田口を討取、此節六右衛門家子和田源左衛門山崎縫殿助討死、此時之為忠節沓部村粥川ニ被下

<現代語訳> 天正 2 年、津保・梶田の領主である斎藤新五が攻め寄せ、神戸山に立て籠もりました。これに対して討伐軍が編成され、吉田左京進・竹村弥平次・箕嶋弥兵衛に命じて夜襲を仕掛け、城を攻め落としました。同じ年、斎藤新五の残党である田口氏と蟹沢氏が、郡上の沓部村・船野山に立て籠もりました。これに対して討伐軍が再び編成され、粥川甚石衛門が討伐隊の主将となり、加勢として鷺見弥五右衛門・遠藤作右衛門、さらに餌取氏配下の兵たちも差し向けられ、8月14日の夜、夜襲を仕掛けました。険しい山だったため、粥川甚石衛門は戦略を巡らせ、竹で多くの梯子を準備し、岩壁をよじ登って蟹沢を討ち取りました。また遠藤作右衛門は別方向から攻め入り、田口を討ち取りました。しかしこの戦いで、餌取六右衛門家の子である和田源左衛門、そして山崎縫殿助が討死しました。このときの忠義と戦功への褒美として、沓部村と粥川村が与えられました。

(2) 「元亀元（1570）年12月祖師野八幡宮棟札写」の翻刻及び現代語訳を掲載する。昨年5月、棟札の現地調査を行ったところ、現物ではなく写であることが判明した。元亀元年の年号から考え、願文中の「地頭」は領主の斎藤新五をさすと考える。同じく願文中の「代官」と「神主田口沙汰人」、船野城で討死したとされる「田口」は、同一人物もしくは同族と推測する。

元亀元年、信長は、朝倉、浅井、延暦寺と対立、幕府や調停の仲裁を得て事なきを得ている。11月。朝倉と浅井は將軍義昭の仲裁に応じ、頑強に抵抗していた延暦寺も、12月には正親町天皇の勅命により和睦に応じている。願文にある「十二月吉日」の日付、「天長地久國王安穏武運長久」の文言は、この間の事情と関わると考える。

八幡宮御寶殿造立之事

聖主天中天 迦陵頻伽聲 哀愍衆生者 我等今敬禮

右神念者故地頭代官宇治子繁昌天長地久國王安穏武運長久求願圓滿

如意満足別者郡内安穩并在処栄養五穀成熟富貴自在息災延命
七難即滅 七福即生
殊者現世安樂後生善処自他和合皆令満足將仍如件
于時元亀元庚午十二月吉日 衆徒馬一足 代官馬一ツ
別當坊 □□
大禰宜
小瀬宜
神主 田口沙汰人
納人馬一疋
小神主 馬田
大工家次
小工

<現代語訳> 天におわす尊き主(釈迦牟尼仏のこと)よ、天の中の天におわし、迦陵頻伽(極楽浄土に住む美しい声を持つ想像上の鳥)のように、その声は清らかにして、哀れみ深く衆生を救い給うお方に、私たちは今、心より礼拝いたします。この神(釈迦牟尼仏)を念ずる者、すなわち地頭や代官、氏子たちが繁栄し、天は長く地は久しく、国王は安泰、武運は長久なることを願ってのことです。願わくは、すべての願いが満ち足り、郡内の人々が平穏に暮らし、住むところには栄えある養いがあり、五穀は豊かに実り、富貴を自由に得、災いを退け命を延ばすことができますように。七つの難(災難)はすぐに消え、七つの福(福德)はすぐに生まれますように。とりわけ、現世において安樂であり、来世には善き処(極楽)へと生まれ変わり、自他ともに和合し、みな満ち足りたこととなりますように。このように願いをこめて。

時に、元亀元(1570)年 庚午 十二月吉日

- ・衆徒：馬一頭
- ・代官：馬一頭
- ・別当坊：□□(記名不明)
- ・大禰宜
- ・小瀬宜
- ・神主：田口沙汰人
- ・納人：馬一疋 (馬の奉納)
- ・小神主：馬田 (馬の飼料の奉納か)
- ・大工：家次
- ・小工：(記名不明)

追記：ほかにも紹介すべき郷土の史料は多数あるが、紙数の関係上、最重要なものにとどめた。



優秀賞

壱岐中世史解明の新視点

—誰が生池城を改修したか—

長崎県立壱岐高等学校
東アジア歴史・中国語コース2年歴史学専攻
宮野 幸一



1. はじめに

壱岐島は、北に位置する対馬島とともに日本列島と朝鮮半島に挟まれた離島である（図1）。島のほとんどが溶岩台地であり、全体的に対馬に比べて標高が低くなだらかだが、詳細に地形を見ていくと浸食による細かい起伏が多くある（図2）。そのため実際に島内を歩いてみると、上り下りが多く徒歩による移動は大変である。日本列島と朝鮮半島をつなぐ位置にあることから、弥生時代の原の辻遺跡をはじめ、古代には刀伊の入寇、中世には元寇など大陸との交流や防衛の拠点としての歴史を有している。

私は城郭が好きで、特に構造に興味があり、壱岐高校東アジア歴史・中国語コースの島内巡査で1年時に壱岐の中世城郭である生池（なまいけ）城、亀丘（かめのお）城、覗城（とじょう）を見学した。その中で壱岐の中世の山城である生池城は二重の深い空堀になっており、横矢掛（よこやがかり）や障子堀（しょうじばり）などの構造から防御力の高さを見る事ができた。私の故郷である兵庫県丹波市にある山城とは全く構造が違い、初めて見るものばかりで驚いた。生池城の堀の深さ、規模の大きさに圧倒された。すごいと思った。壱岐にも大規模な山城があると知ることができ興奮した。そこで、私は壱岐の山城の特徴から、壱岐の中世の政治を読み取るという目標を掲げた。

2. 壱岐の中世史と城郭

（1）壱岐の中世史の概要

元寇後の壱岐は、長崎県北部・佐賀県北西部にあたる松浦地方で活動していた松浦党と呼ばれる武士集団の中の五氏（志佐氏、佐志氏、呼子氏、鴨打氏、塩津留氏）により分治されていた。しかし、1472年に松浦党の一員である波多氏の侵攻により五氏が敗れ、波多氏が壱岐を治めるようになる。詳細は後述するが、その後本土の波多氏内部でお家騒動が起きる。その中で波多氏と対立した家臣である日高氏は波多氏の本城である岸岳城を奪い、壱岐島を押領する。波多氏は岸岳城の奪還には成功するが、壱岐は奪い返せなかった。壱岐を領地とした日高氏は平戸松浦家に従属し、壱岐は平戸松浦領になった。このように壱岐の中世史には松浦党が深く関わっている。

（2）壱岐の城郭

『長崎県中近世城館跡分布調査報告書』によると、伝承地も含めて壱岐の城郭は51か所である。壱岐の中で詳細な年代が分かっている城郭の数は15カ所と少ないが、大半は中世の城郭とされる。また、遺構が残っている城郭の大部分が円形の単郭で、これは「松浦型プラン」と呼ばれている。

「松浦型プラン」とは壱岐を含む長崎県北部における中世城郭の特徴的な城の平面形態で、提唱者の木島孝之氏は、その特徴を「一、地形に合わせて素直に削平されおり、曲輪の形が丸っぽい。方形には整形されていない。二、周囲に帯曲輪が発達するが、基本的には単郭であり、上位・下位曲輪といった曲輪の明確な機能分化は発達していない。三、虎口は平入りか或いは明確でないものが多く、高度な虎口は発達しない」とまとめている（図3）。このようなプランが大半を占める原因として木島氏は、松浦地方では弱小領主が割拠する状態で大領主の出現は実現しなかったため突出した城郭は存在しなかった（図4）、としている（木島1992）。

壱岐の中世を記した文献は少なく、壱岐の中世史を解明するには中世の遺跡から考古学的手法でせまる必要がある。その中で城郭は地表に遺構が残っており、発掘調査をせずと

もある程度分析が可能である。

千田嘉博氏は、これまでの城館研究は1970年代までと1980年代以降に大きく二分できるとし、80年代以降を「城館を史料とした地域史研究推進の時代」としている。千田氏はこの転換の契機として村田修三氏が1980年に発表した「城跡調査と戦国史研究」を挙げている。この論文が城郭遺跡を地域史と結びつけ、縄張り図の読み取りによる城の機能や年代の推定が築城主体の評価に深く関わること、また縄張り図をベースに立地や分布の検討を行うことで築城主体や村と領主のかかわりを解明できると示したことから、城館研究が「歴史を解明していく一手段」として認識されることになったと評価した（千田1991）。壱岐の中世史を解明するために、このような認識のもとに壱岐の城郭を分析することにした。

まず『長崎県中近世城館跡分布調査報告書』から壱岐の城郭の位置と構造を縄張り図で確認した（図5）。次に壱岐の中世城郭である生池城、高津（こうづ）城、帶田（おびた）城、風早（かざはや）城、鶴翔（つるかけ）城に行き、縄張り図と現地の状況を確認した（図6）。その中で、生池城は藪が少ないため登りやすく、周囲の土地を確認しやすい。遺構の状態が良く、ほかの壱岐の城郭と比較して規模が大きく、防御性が高い。このような生池城の歴史的背景を解明することで、壱岐の政治状況、中世史が分かると考え、本稿の分析の対象とした。

（3）生池城とは

生池城は、壱岐市勝本町百合畠触（ゆりはたふれ）にある壱岐の中世城郭である。城主については、報恩寺に納められている十一面觀音菩薩坐像の像底に天文十年の年号とともに書かれている奉納の理由から（註1）、1541年には生池城は源壱の城であったと考えられている（勝本町教育委員会1977）。また、『印冠之跡付』の記述によると、「日本国一岐州居住本城源壱」と書かれており、壱岐の在地勢力の一人として朝鮮との通交で活躍したとされる。

生池城の防御施設としては、二重の深い空堀、障子堀、横矢掛、石積などがある。このような防御施設に注目して、生池城の防御施設とその他の壱岐島内の「松浦型プラン」を呈する高津城、帶田城の防御施設を見比べてみると、唯一、二重の空堀や横矢掛、障子堀などが備わっている生池城は異質な存在であることがわかる（図7）（註2）。

壱岐の中近世城郭を研究している林隆広氏は、長崎県内では横矢掛を持つ城郭は織豊系城郭の影響を受けているものに限られることから、生池城の横矢掛の存在も織豊系城郭の影響を受けて改修されたもので、その契機は豊臣秀吉による朝鮮出兵に伴う勝本城の築城と想定している。また、林氏は生池城の改修の目的として2つの理由を挙げている。1つ目は、兵士が島内の民家を略奪するなどの乱暴が激しく、取締りを試みたことが記録に残っていることから、治安維持のため。2つ目は、生池城が郷ノ浦と勝本浦の中間かつ壱岐国のほぼ中央に位置し、主要な浦である芦辺浦や湯本浦への接続に最も有利な場所に位置していることから壱岐国内の陸路の要衝を押さえるため、と考えている（林2013）。

しかし、朝鮮出兵を契機に生池城が改修されたとする林氏の研究には次の3つの問題点が挙げられる。1つ目は、勝本城の築城と同じ時期に改修されたのであれば、生池城にも同じように石垣を用いるのではないか（註3）。2つ目は、防御施設として突出部に横矢掛を改修するのであれば、樹形虎口に改修するほうが出入り口の強化に繋がるのではないか。3つ目は、壱岐島内の治安維持を目的に改修したのであれば、駐屯の中心であったで

あろう勝本浦に近い高津城が改修されていないのはなぜか（註4）、という点である。

のことから①生池城の構造について、②生池城の防御性の高さと立地の関係について再検討する。そして、これらの再検討から、誰が生池城の防御性を高くしたのか、について考察を行う。

3. 生池城の構造について

(1) 防御施設の配置

まず、生池城がどの方角の防御を固めているのかを知るために防御施設の配置を確認した（図7）。その結果、横矢掛や障子堀が縄張り図の北側に描かれていることから、城の北側に防御が集中していることが分かった。このことから生池城は北側からの攻撃を意識しているのではないかと考えた。

(2) 実地踏査

そこで、実際に城の周囲を見に行くことで本当に北側を守る必要があったのかを確認した（図8）。城の北側は平坦な広い谷であり、現在は水田になっていることから、生池城への進軍及び攻撃に適していることが分かった。東側は急峻な丘陵である。生池城へ向かうには丘陵を越えなければならず攻め込むのは難しい。西側も同様な丘陵であるため攻め込むのは難しい。南側も同様に丘陵があるが、尾根沿いに進むことができる。しかし、その先に堀切のような役割を果たす自然地形の谷があることから、生池城へ攻め込むのが難しくなっている。北側からの進軍は容易であるが、それ以外の場所からの進軍は難しいことから生池城は北側からの攻撃を意識していたのではないかと考えられる。

(3) 文献を用いた改修の契機の検討

生池城は、横矢掛や障子堀などの防御施設の改修をしていることから、戦いに備えるためか、戦い後の報復攻撃に備えるために改修されたと考えた。15～16世紀の城の改修が起きるような大きな戦いを文献から調べた結果、壱岐で起きた大きな戦いが4回あることが分かった（表1）。

各戦いの詳細は次のとおりである。1472年に松浦党の一員で唐津岸岳城を本拠とする波多泰（やすし）の侵攻により五氏が敗れ、波多氏は郷ノ浦の亀丘城に城代を置いて壱岐を治めるようになる（1回目）。しかし、1542年に没した波多盛（さこう）の後継者を巡って盛の後室と波多家家臣の対立が起こり、その最中に家臣が推す後継者候補で壱岐城代の波多隆（たかし）・重（しげし）兄弟が六人衆（註5）に暗殺されてしまう（2回目）。後室が推す藤堂丸（波多親（ちかし））が後継者となった後も対立は続き、家老の日高資（たすく）が後室に毒殺されると日高資の子、日高喜（このむ）は岸岳城を襲撃、領有し、さらに六人衆を攻めて壱岐島を押領する。岸岳城を追われた波多親は佐賀の龍造寺氏・島原の有馬氏らの助けを借りて岸岳城を奪還するが、日高喜は壱岐に逃亡し、岸岳城を攻められた際に援軍を求めた平戸の松浦隆信の傘下に下った（3回目）。波多氏は壱岐を奪還するために対馬宗氏に応援を求め日高氏を攻撃しようとするが、失敗に終わった（浦海の合戦）（4回目）。

以上の4回の戦いについて、年代・交戦勢力・勝者・どこから攻めてきたか、を表にまとめた（表2）。この中で方角について列挙すると、1472年の波多氏の侵攻は本土から来たため南側からである。1555年は六人衆と波多氏の争いであるため、壱岐島内での戦いである。1565年は本土からやって来る日高氏と六人衆との戦いのため南側からの侵攻である。

そして、1571年の対馬宗氏が日高氏と松浦氏と戦ったため、これが唯一、北側からの侵攻である。生池城は北側からの攻撃を意識していることから、生池城の改修の契機は北側から攻められた浦海の合戦であると考えられる。

4. 生池城の防御性の高さと立地について

(1) 文献から

宗氏の侵攻による浦海の合戦で、生池城が戦場となる可能性があったのかを確認するために、壱岐のことについて書かれている、江戸時代の史料である『壱岐名勝図誌』で浦海の合戦について調べた(図9)。浦海の合戦とは、以下のような出来事である。波多家内でお家騒動が起き、家臣である日高氏は壱岐を押領した。波多氏は対馬宗氏と協力して壱岐を奪還しようとした。宗氏は壱岐の湯本浦付近に領地を持っていたとされる立石図書に協力を求めたが、立石図書は日高氏と内通しており、船を隠しやすい壱岐の浦海海岸に来るよう宗氏に知らせた。日高氏は平戸松浦氏に従属し、壱岐の土地を平戸松浦氏に譲渡することで平戸松浦氏からの協力を得ることができた。1571年7月、立石図書の合図とともに宗氏の軍勢が浦海海岸に上陸した。上陸した軍勢は東進し銀台まで進軍したが、小浦海に待機していた日高氏の軍勢が宗氏の軍勢を奇襲した。宗氏の軍勢は退却し、日高氏の勝利で浦海の合戦は終わった。

宗氏が進軍した浦海から銀台までのルートについて、興味深いことに気がついた。それは私が一支国博物館・壱岐の元寇展(令和6年12月25日から令和7年2月24日)で見学した伝承地から推定される文永の役の元軍の侵攻ルートと一致するということである。文永の役では、浦海の合戦と同じ浦海海岸から上陸している。このことから、日高氏が想定した宗氏の進軍ルートと元軍の侵攻ルートが重なる可能性が高い(図10)。この仮説が妥当であるのかを確認するために実際に元軍の侵攻ルートを歩くことにした。

(2) 実地踏査

まず、浦海海岸上陸後の宗氏の目的地は、日高氏によって占拠されている壱岐市郷ノ浦町本村触にある亀丘城と考えられる。

浦海から亀丘城のある郷ノ浦方面へ向かう場合、銀台から南下して湯本を経由する道が近く見えるが、江戸時代後期に描かれた『壱岐国細見図』には浦海から湯本の海岸近くを通る道が描かれていません。このことから当時のルートではないと考えられる(図11)。現地を歩いてみると、現代では山を大きく切り通して道が造られている(図12-A)。そのため銀台から文永の役と同じく北に進み、菖蒲田(しょうぶた)池から東側の谷沿いを進んでいたと考えられる(図12-B)。この谷を進んでいくと、壱岐を南北に貫く国道382号線に出る(図12-C)。この道を南下すると、亀丘城にたどり着く。また、この国道沿いには壱岐古墳群があり、『壱岐国細見図』にも壱岐の南北を貫く道が描かれている。

また生池城の南側には壱岐を東西に走る道があり、その道沿いにも古墳や壱岐国分寺跡があることから、古くから使われている道であるといえる。壱岐の東西南北の道を押さえれる要衝に生池城があることから、宗氏は亀丘城を目指して進軍する場合、進軍の障壁となる生池城を攻めることになる(図13)。

5. 考察

以上のように、縄張り図の読み取りと現地踏査により、生池城は北側が最も攻められやすい地形となっていることが分かった。また、生池城の改修が戦いの前後であると考え、

改修の契機について検討したところ、対馬を出発し浦海から街道に沿って亀丘城への南下を目指す浦海の合戦が、改修の契機としてふさわしいと考えられた。また、生池城周辺の地形図の読み取りと現地踏査により、さらに次のような生池城の役割が考えられた。生池城は北側からくる軍を迎撃つことができ（図14-A）、また生池城を攻略せずに進軍した場合には街道を南に進む敵軍を追撃・挟撃できる（図14-B）。さらに、壱岐島の東部の芦辺方面への街道を押さえており、芦辺方面からの補給ルートとして利用でき、生池城が陥落した場合には、敗走ルートとすることもできる（図14-C）。このように、生池城は軍事的に非常に重要な場所に立地することが分かった。

以上の検討から、生池城は北側からの攻撃を意識した防御施設を持ち、浦海の合戦を契機とし生池城が改修されたと考えられる。このことから、日高氏が防御性を高くしたと結論づけられる。

6. 今後の課題

今回の構造と立地の視点を用いた分析の結果、生池城は浦海の合戦を契機として日高氏によって織豊期「前半」に改修されたという結論を得た。しかし、個別の遺構に対する詳細な分析ができなかったことが今後の課題である。その足掛かりとして横矢掛と障子堀の遺構の年代を調べたところ、本稿の分析との間に年代の齟齬が生じた。このことについて若干の考察を加えたい。

まず、横矢掛については、長崎県内で横矢掛を持つ城郭は、生池城と諫早市の古田城を除いて織豊系城郭に限られ（林2013）、長崎県内で織豊系城郭の技術が広まるのは朝鮮出兵が契機であると言われている。しかしながら、14世紀後半から15世紀初めに横矢掛が造られた京都市の石見城の事例もある。また、日高氏は佐賀県が出自の人物であり、生池城の改修に際し、長崎県だけなく九州本土部からの影響を受けたことも考えられる。

次に、障子堀については、西日本の4つの事例（大坂城・小倉城・松江城下町・御土居）について報告書を調べたところ、いずれも織豊期「後半」から江戸初期であった（表3）。このことについて2つの可能性が挙げられる。

1つ目は、防御のため偶発的に生池城でも発生した可能性である。障子堀の分類と編年を行った井上哲朗氏は、障子堀に類似する遺構が古墳時代の豪族居館（宮城県山前遺跡）にも見られることから防御施設は各時代の戦乱の時期に必要に応じて生み出された可能性を指摘している。さらに、江戸時代の軍学書では障子堀と水との関連が考察されており、また堀底に水溜土坑と考えられるものや井戸が発掘された事例を挙げ、障子堀が、保水・貯水のために自然発生することもありえると指摘している。『壱岐名勝図誌』によると、生池城は水を得ることが難しい土地であった（註6）。生池城で保水や貯水のための障子堀が自然発生する可能性は十分考えられる。

2つ目は、改修されたタイミングは複数回あり、障子堀が織豊期後半に改修された可能性である。この場合、横矢掛は日高氏による改修であり、障子堀は織豊期後半に構築されたということになる。この場合、林氏が指摘するとおり、朝鮮出兵の際の治安維持などのために改修されたものと考えられる。

生池城の築城年代や改修時期それに至る歴史的背景に迫るために、発掘調査による遺物と土層堆積の状況から、横矢掛と障子堀の年代に迫るのが有効な手段であると考えられる。

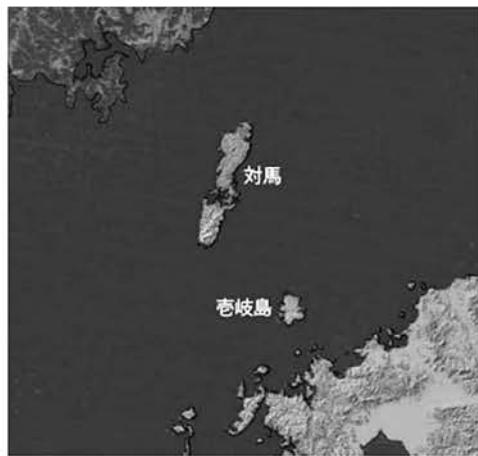


図1 壱岐島の立地



図2 壱岐島の地形

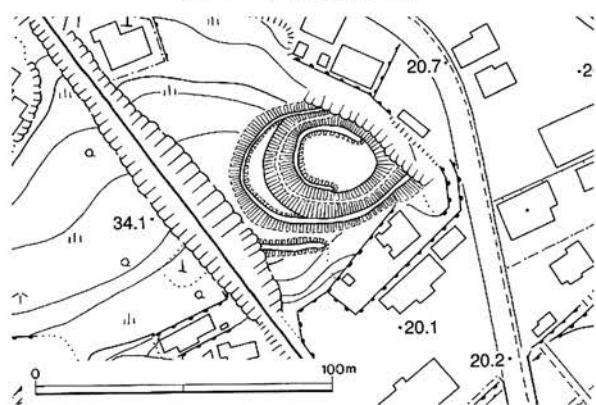


図3 松浦型プラン城郭の例：平戸市籠手田城跡
(長崎県教育委員会 2011)

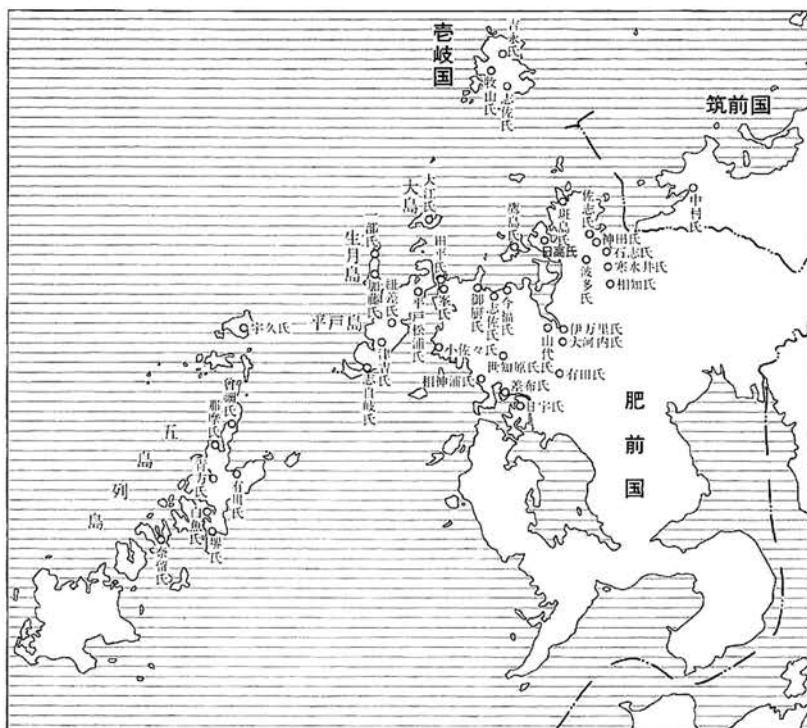
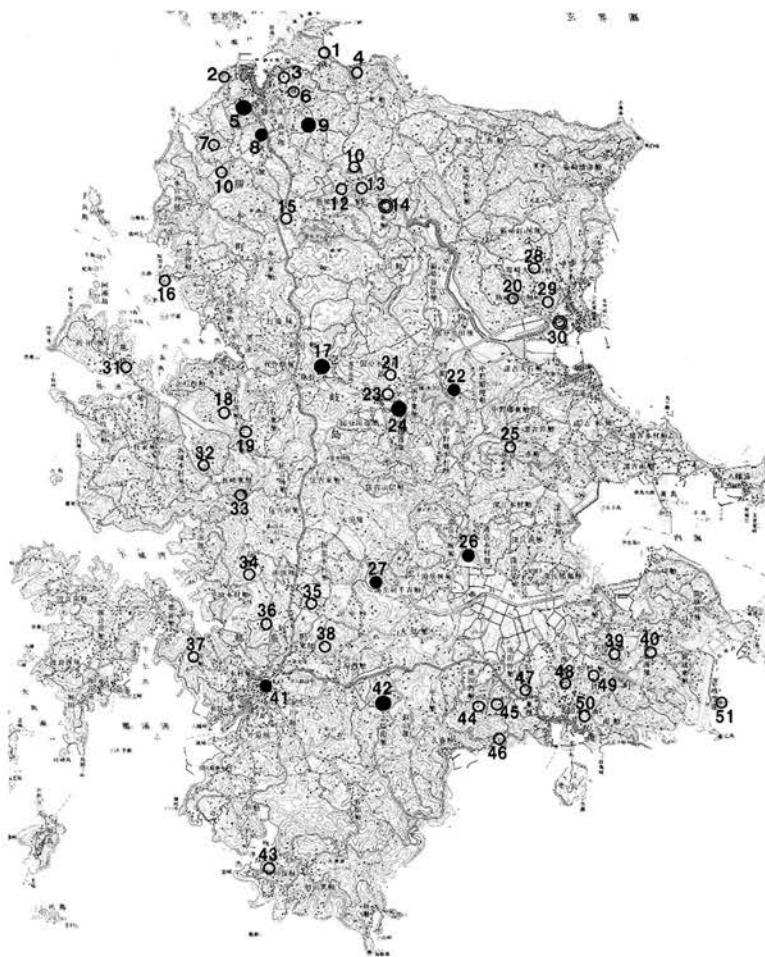


図4 松浦党分布図（国史大辞典編集委員会編 1992 の図に呼子 1965 を参考に日高氏を加筆）



●遺構の確認できる城跡 ○平坦面など遺構か否か判然としない城跡
○城館の推定地・伝承地（遺構の確認されない城跡）

No.	県分布調査	No.	県分布調査
1	おおたけじょう 大岳城	26	とじょう 韻城
2	うしろじょう 石城城	27	あさいこじょう 浅井古城
3	もとうらじょう 本浦城	28	あんじょう 安城
4	いちおじょう 一尾城	29	おたっちょ 館所
5	かつもとじょう 勝本城	30	ふなかくじょう 船置城
6	じみょうじじょう 地命寺城	31	じょうのつじ 城ノ辻
7	かがしろ 加賀城	32	かずらじょう 葛城
8	かざはやじょう 風早城	33	やまぐちじょう 山口城
9	こうづじょう 高津城	34	はんせいじょう 半城
10	からすじょう 鳥城	35	はちがたじょう 鉢形城
11	しょうのさぶろうじょう 庄ノ三郎城	36	おおやじょう 大屋城
12	ふるおおやかん 古大屋館	37	しろいしじょう 白石城
13	おおややかた 大屋館	38	あじょう 阿城
14	ひのつめじょう 樋詰城	39	いしだじょう 石田城
15	じんややまじょう 陣屋山城	40	つつき 筒城
16	たけしろ 懸城	41	かめのおじょう 龜丘城
17	なまいけじょう 生池城	42	おびたじょう 帯田城
18	ぬしろじょう 布代城	43	かまがさきじょう 鍋崎城
19	おかたやしき 御方屋敷	44	まゆみやかた 真弓館
20	おたっちょ 御館所	45	おおや 大屋
21	たて 館	46	いけだじょう 池田城
22	つるかけじょう 鶴翔城	47	うらやまじょう 浦山城
23	いきしきょかん 壱岐氏居館	48	杓子城
24	こおりじょう 郡城	49	くろきじょう 黒木城
25	たかおじょう 高尾城	50	きくじょう 菊城
		51	どうせんじょう 唐船城

図5 壱岐の中世城館分布図（林 2015 を加工）

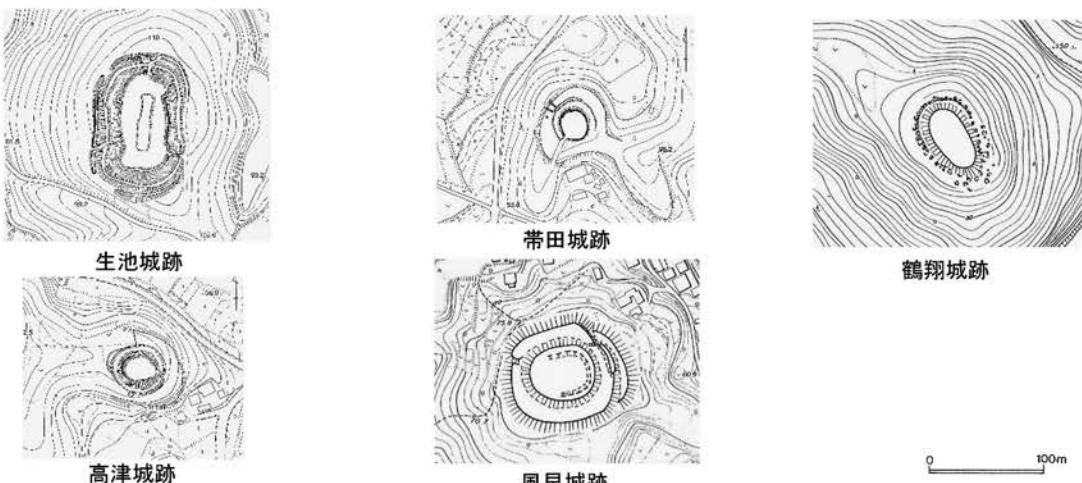


図6 壱岐の代表的な中世城館の縄張り図



外側の堀から見た横矢掛 B



障子堀



横矢掛 B から出入り口 3 を見る

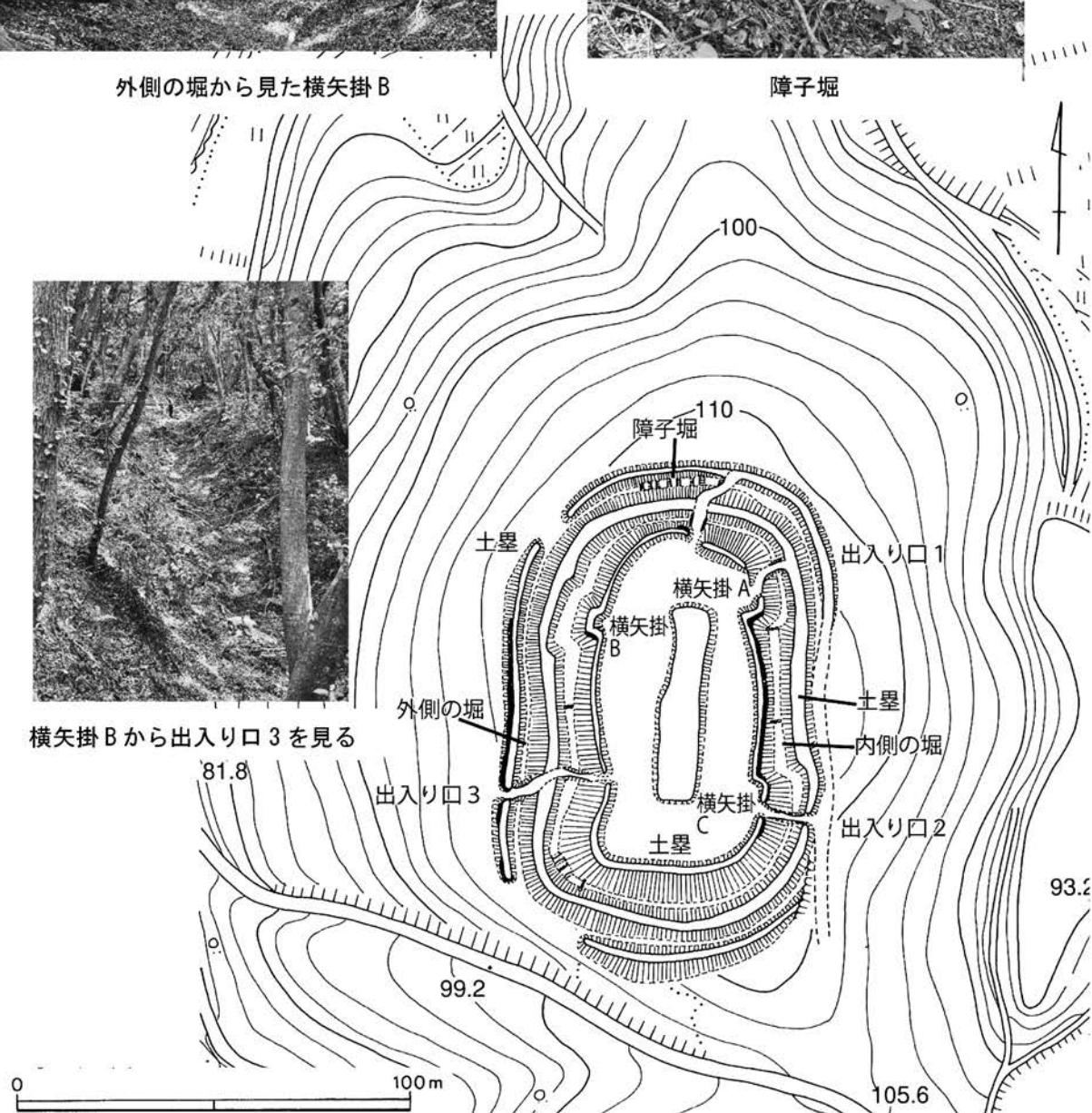
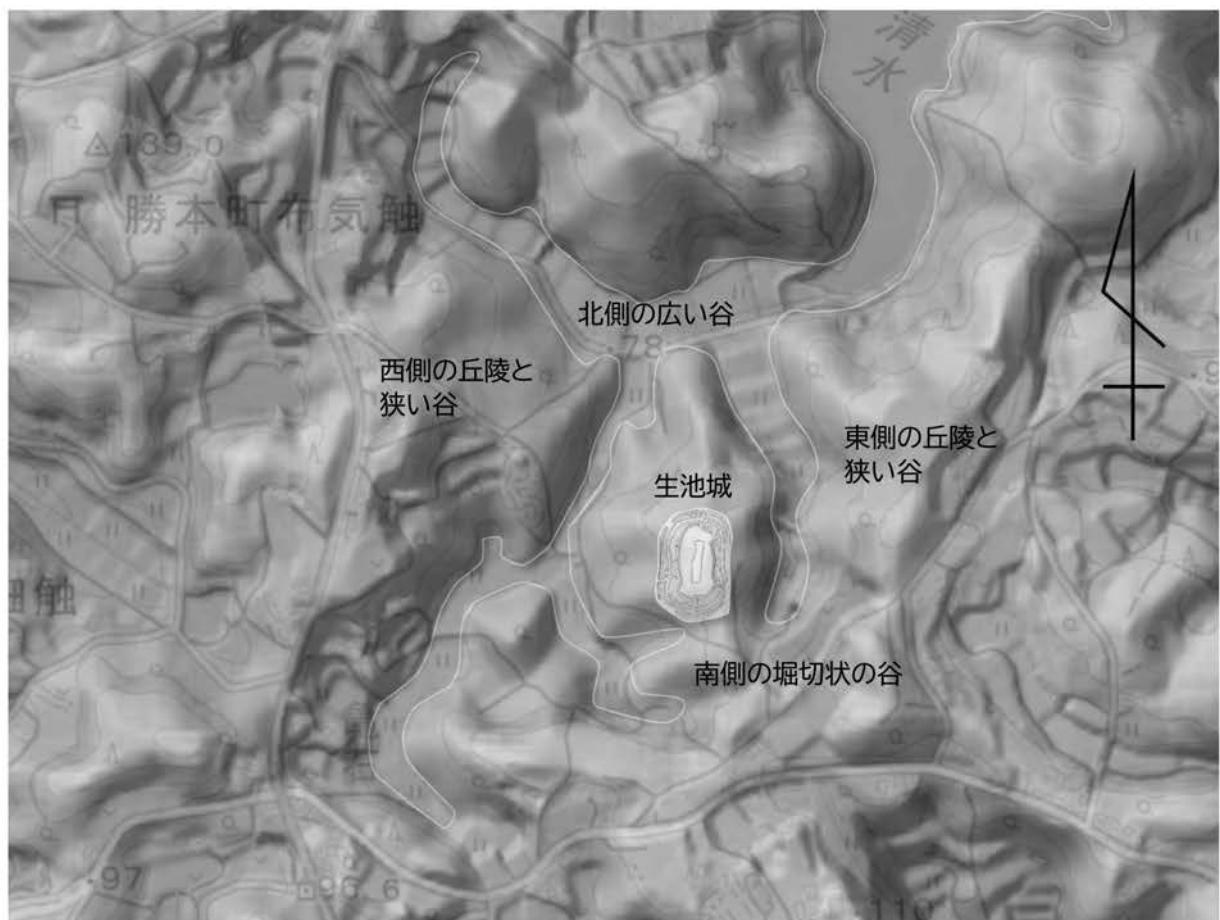


図7 生池城の縄張り図と防御施設の現状



生池城北側の谷（中央付近から西側）



生池城北側の谷（中央付近から東側）



生池城西側の谷と丘陵



生池城東側の谷と丘陵

図8 生池城周辺地形図

表1 壱岐の中世史年表

1274	文永の役	
1281	弘安の役	
14世紀 中頃～	松浦党五氏による壱岐分治	
1472	唐津岸岳城主・波多泰(やすし)が壱岐へ侵攻 五氏を破り亀丘城へ入城する(波多氏による壱岐統治)	①
1542	波多盛(さこう)が没し、盛の後室と波多家家臣の間で後継者を巡る対立が起こる。	
1555	六人衆が壱岐城代の波多隆(たかし)を暗殺。 後室の推す藤堂丸(後の波多親(ちかし))が波多家を継ぐ	②
1556	六人衆が波多隆の弟・重(しげし)を暗殺	
1563	後室が対立していた家老の日高資(たすく)を毒殺する	
1564	日高資の子・日高喜(このむ)が岸岳城を攻撃、奪取する。	
1565	日高喜(このむ)が壱岐を攻めて六人衆を倒し、波多政(まさし)を城代にする	③
1569	波多親が岸岳城奪還。日高喜は壱岐へ逃亡し、波多政を倒して壱岐守護を称する	
1571	日高喜が松浦隆信の傘下に入る。 波多親と結んだ対馬宗氏が壱岐を攻めるが失敗(浦海の合戦)	④
1591	豊臣秀吉の命により松浦鎮信(しげのぶ)が勝本城を築城する(文禄・慶長の役)	

表2 壱岐で起きた4回の戦い

年代	交戦勢力		勝者	どこから壱岐に攻めてきたか	
	攻め込んだ勢力	防衛した勢力		場所	方角
① 1472	波多泰	松浦党五氏	波多泰	本土から	南から
② 1555	六人衆	波多隆・重	六人衆	島内	—
③ 1565	日高喜	六人衆	日高喜	本土から	南から
④ 1571	宗氏 + 波多氏	日高氏 + 松浦氏	日高氏 + 松浦氏	対馬から	北から

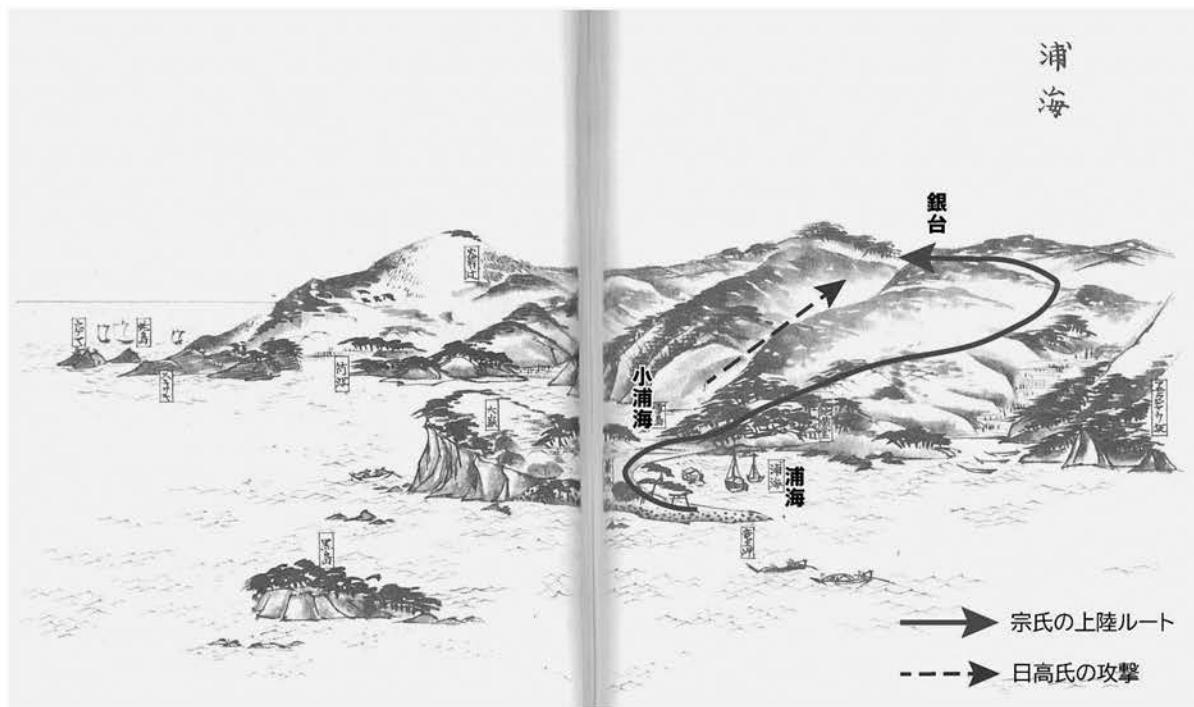


図9 『壱岐名勝図誌』に描かれた浦海の様子（浦海の合戦の状況を加筆）



図10 一・支国博物館による文永の役元軍侵攻推定ルートと浦海の合戦の宗氏上陸ルート
(壱岐市立一・支国博物館 2025 に加筆)

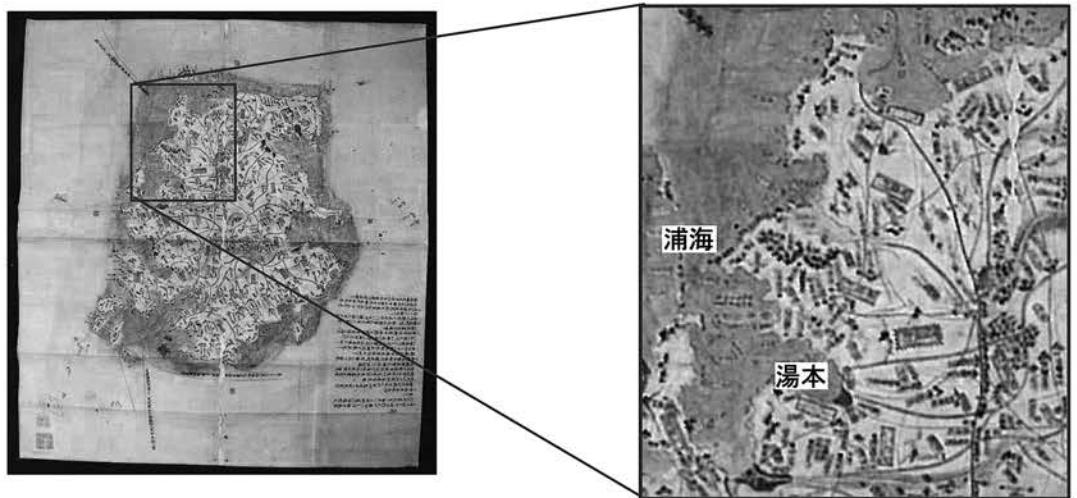


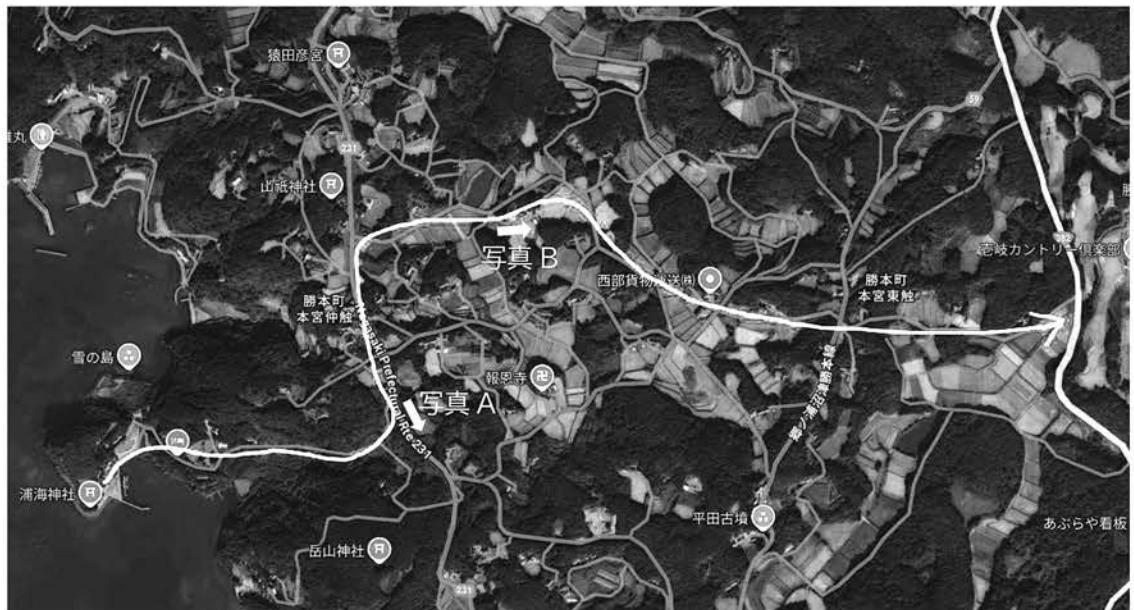
図 11 『壹岐国細見図』(壹岐市立一支国博物館 2011 から引用)



12-A 浦海からの道から南側の切り通



12-B 菖蒲田池付近の様子



12-C 宗氏進軍ルートの空撮写真 (Googlemap を引用、加筆)

図 12 予想される宗氏進軍ルートの様子



図 13 生池城と周辺の道の関係

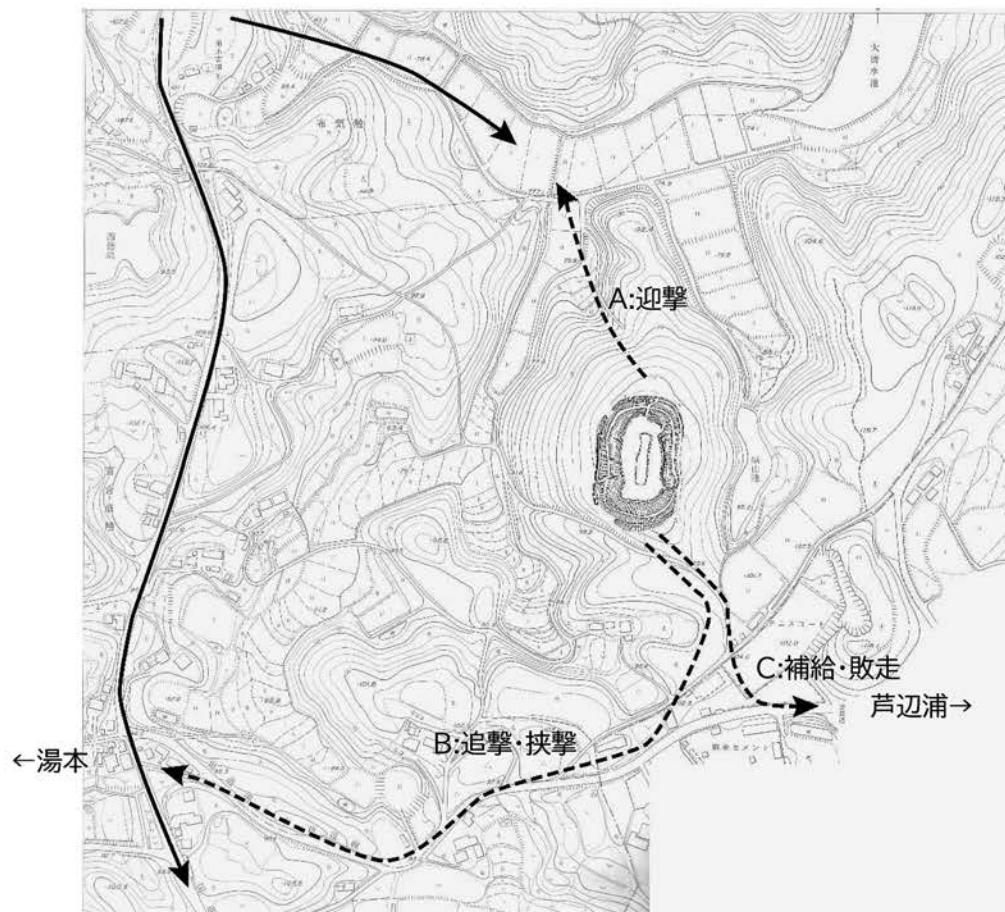


図 14 北からの攻撃に対する生池城の立地

表3 西日本での障子堀検出事例

遺跡名	所在地	掘削年代
御土居跡	京都府京都市	1591年
大坂城跡	大阪府大阪市	1598年
小倉城外堀跡	福岡県北九州市	1602年
松江城下町遺跡	島根県松江市	1607年

【註】

- (1) 像底には「右志奉刻彫觀音、大悲菩薩垂尊像安置、之旨如件、天文十年辛丑十一月吉日書之、仍寄進、井手忠兵衛尉、ナマ池九丈一所、右當檀那本命元辰源壱、為現世安穩後世善処、故也、敬白」と書かれている（勝本町教育委員会 1997）。
- (2) 生池城には現在城内に入る道が4つあるが、北側の道は近年城内に軽トラックで進入できるように作られたもので、当時の出入り口は図7に示した3か所である。
- (3) 秀吉の朝鮮出兵に際して築城された城は肥前名護屋城や、兵站基地である勝本城、対馬・厳原の清水山城のほかに肥前の星賀城塞群（佐賀県教育委員会 2017）、対馬北端である大浦の撃方山城（長崎県教育委員会 2011）などがあるが、これらの城にも石垣が用いられている。
- (4) 高津城は平戸市の籠手田城とプランがよく似ている（林 2023）。歴史的環境が異なる地域の城に全く同じ改修がなされたとは考えにくいため、高津城は改修されていないと考えられる。
- (5) 波多氏の壱岐統治の際に城代の下でそれぞれの村を支配した地方役人。六人の役人がいたので「六人衆」と呼ばれている。
- (6)『壱岐名勝図誌』の牛ヶ城墟（牛ヶ城は生池城の別名）の項には「統風土記云、此城、何れの代、誰人の築けるといふ事詳ならず。唯敵にかこまれ、用水尽きて赤井（牛イ）を集め精米をあみせて、水ありしと見せし故に、牛か城と名附けしと云伝ふるのみ云々。」とあり、水を得にくい環境にあったことが推測できる。

【参考・引用文献】

- 壱岐市立一支国博物館 2011『古地図が語る壱岐の姿』壱岐市立一支国博物館第6回特別企画展図録
 壱岐市立一支国博物館 2025『壱岐の元寇展～伝・説・語』壱岐市立一支国博物館第72回特別企画展図録
 井上哲朗 2000「障子堀の分類と編年」『千葉県文化財センター研究紀要』20、財団法人千葉県文化財センター
 勝本町教育委員会 1977『勝本町の文化財』勝本町文化財調査報告書第1集
 木島孝之 1992「九州における織豊期城郭—縄張り構造にみる豊臣氏九州経営—」『中世城郭研究』第6号、中世城郭研究会
 国史大辞典編集委員会編 1992『国史大辞典』13、吉川弘文館
 後藤正恒 1861『壱岐名勝図誌』(1975『壱岐名勝図誌』下、名著出版)

佐賀県教育委員会 2017『佐賀県の中近世城館第4集 各説編3 東松浦・西松浦地区』佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書IV, 佐賀県文化財調査報告書第216集

千田嘉博 1991「中世城館研究の構想」『中世の城と考古学』新人物往来社

長崎県教育委員会 2010『長崎県中近世城館跡分布調査報告書I』地名表・分布地図編, 長崎県文化財調査報告書第206集

長崎県教育委員会 2011『長崎県中近世城館跡分布調査報告書II』詳説編, 長崎県文化財調査報告書第207集

林隆弘 2013「長崎県内城郭における横矢（横矢掛り）について～生池城、古田城の検討を中心に～」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号, 長崎県埋蔵文化財センター

林隆弘 2015「長崎県・壱岐国の城郭について—調査・研究の現状と課題—」『九州の城』北部九州中近世城郭研究会

林隆弘 2023「籠手田城」「生池城」「九州の名城を歩く」佐賀・長崎編, 吉川弘文館

呼子重義 1965『海賊松浦党』人物往来社

優秀賞

安政南海地震後に建てられた萩谷名号碑の碑文は、どれだけ信用性があるか



高知県立高知国際高等学校
澤田千代子

1. 研究の背景

1.1. 導入

私は防災に取り組む学生団体で活動している。その際、南海地震のことを伝える碑が高知県内に多く存在していることを知った。同じ場所で同じことを伝え続ける石碑の内容は、今の私達にとっても有益で、信用性のある情報なのかということに興味を持った。そのため、高知県内にある石碑の碑文を研究することにした。

日本では古くから地震や台風などの自然災害が頻発し、人々は被害や教訓を碑文などの形で後世に伝えてきた。しかし近年、それらの記録が十分に活用されず、同じ場所で再び同様の被害を受ける例もある。特に地震は周期的に発生するが、その周期は長く、忘れられやすい。記憶を風化させないため、2019年に国土地理院によって「自然災害伝承碑」が新たに地図記号として制定された〔注1〕。これは、自然災害の教訓を地域の人々に伝えるとともに、被害の軽減を目的とする。実際、2011年の東日本大震災時に、岩手県宮古市では「此処より下に家を建てるな」という過去に建てられた大津波記念碑の教訓を守り、家屋に被害が生じなかった例もある〔注2〕。その一方で、2018年の西日本豪雨で多くの犠牲者が出ていた広島県坂町には、水害を伝える碑があったものの教訓を十分に活かすことができなかつた例もあった〔注3〕。

1.2. 背景

地域における災害知の形成に関する調査を進めると、この研究は特に理工学系の研究者によって進められている点、歴史的分析が少ない点を知った〔注4〕。理工学系の研究は周期や規模を明らかにするものだが、歴史学では先人たちがどのように命を守ったのかを明らかにできる。理工学系の研究により南海地震も繰り返し発生するとわかっているため、歴史学の分野からは来るべき地震に活かす知識を明らかにするべきであると考えた。実際に加納（2021）は「地震学と歴史学が交わる場が歴史地震研究である」〔注5〕と述べる。歴史地震研究における現在の課題は、使用する資料の信用性をほとんど考慮せずに理工学系の研究が行われていることである。現在のように地震計の使用が進められたのは、明治以降である〔注6〕。それ以前の地震については、人々が書き残した歴史資料を収集し、記述内容の信用性に注意しながら分析する必要がある〔注7〕。そのため、歴史学の視点から資料や記述内容の厳密な分析が求められ、地震を歴史的事象として研究することに価値がある。現在は、内閣府（2005）による「1854 安政東海地震・安政南海地震」という報告書の「第3章 安政東海地震・安政南海地震の災害教訓例」〔注8〕で明らかにされているように、全国にどのような教訓が存在するのか、地震を伝える石碑にはどのような傾向があるのかなどといった研究が多く、範囲が広い。そのため、資料の記述内容の評価をするような一つの碑文を対象にした詳細な研究も必要である。

西日本の太平洋側を中心に被害をもたらす南海地震は100年から150年の間隔で発生している〔注9〕。現在、前回の南海地震発生から80年が経とうとし、日々発生の危険性は高まっている。特に高知県では、過去に甚大な被害を被ったことから、災害発生時の行動に関する教訓が、次の地震に備えるべき人々にとって重要である。そのため、現在を生きる私達は、石碑などに残される内容から過去の人々に学ぶ必要がある。高知県は、岩手県に次いで2番目に多い102基の伝承碑が登録され、特に南海地震に関する碑が多い。

本研究は高知県でも被害が大きかった土佐市宇佐にある萩谷名号碑 [図1、2] を分析対象とする。2つの視点からこの碑文の信用性を評価する。1つ目は、碑文の内容がどれだけ安政南海地震の被害と一致しているかだ。これは安政南海地震の被害を残した他の文献と比較することで検証されるため、『真覚寺日記』を使用する。これは、宇佐にある真覚寺の住職だった井上静照師が地震後の15年間を残した日記である [注10]。同じ地震を同時期に記録した文献と比較することで、碑文にある被害内容の信用性を評価するとともに、碑文の持つ役割を特定する。2つ目は、災害発生時にどれだけ碑文の教訓を活用できるのかという視点である。災害伝承碑の目的が後世に教訓を伝えることであれば、実際に碑文によってその目的が達成されていたのかを検証する必要がある。昭和南海地震の証言をもとに、安政南海地震の教訓がどのように伝えられ、残されていたのかを明らかにする。

2. 本論

2.1. 碑文内容の評価

2.1.1. 碑文の分析

萩谷名号碑には、1854（嘉永7・安政元）年に発生した安政南海地震の被害と、その教訓が記されている [図3]。碑文の冒頭には、安政南海地震がどのような地震で、どのような被害をもたらしたのかについて「安政元甲寅歳十一月五日申の刻大地震日入前より津浪大に溢れ進退八九度人家漂流残る家六七十軒溺死の男女」 [注11] と書かれている。いつ地震が起き、何度津波が宇佐を襲ったのかなど、津波による大きな被害を残す。これらの部分は、地震がこの地域に与えた影響について言及し、教訓的な内容も同碑文の中に残されている。まず、「昔寶永の変にも油断の者夥敷流死」 [注12] と同地域で安政よりも前の宝永に同じような地震があったことを示す。碑文にある「寶永の変」 [注13] とは1707（宝永4）年に発生したとされる宝永地震の記述だろう。安政南海地震だけではなく、昔の災害を示すことで、南海地震が繰り返し発生していることを伝えている。そして、「山手へ逃登る者恙なく衣食等調度し又ハ狼狽て船にのりなとせるハ流死の数を免れす」 [注14] とあり、山へ何も持たずに逃げた人は助かったのに対して、服や食料を持って逃げようとした人たちが亡くなつたとある。このような教訓が地震の記録と共に残されているのは、『真覚寺日記』で明らかになっている、碑を立てた目的にある。井上静照（1970）によると、「此度当浦萩谷口ニ石碑を立一ツには大変ノ砌溺死ノ男女追善ノ為」 [注15] と安政南海地震によって亡くなつた人たちを供養することを目的にしている。また、「ニツニハ後代此碑を見る者子孫傳言ノ一端共なれかしと思ふ」 [注16] と2つ目の目的として、子孫に伝えるためとある。このことから、安政南海地震を経験した人々は、被害だけではなく、どのように逃げるのかなどの教訓も共に伝えることを望んでいた。この碑は「当浦中にて石碑料を集メ」 [注17] という記載があることから、宇佐の人たち全体の意見によって立てられたと考えることもできる。

2.1.2. 実際の被害との比較

次に、『真覚寺日記』との比較を行う。日記には、「間もなく沖より山のごとき波入り来たり宇佐福島一面の海と成る（中略）浪の入りし時諸道具打ち捨て置き 山へ逃げる者は皆命を助かり 金銀雑具に目を懸け油断せし者は悉く溺死す」 [注18] と被害状況や、

避難行動の教訓が碑文と同じようにある。地震直後から「地震日記」と名付けて記録してきた理由は、日記のはし書で明らかになっている。「此の録相応の名も有るべきなれども只自家後裔に伝示を是とす」〔注19〕とあり、真覚寺の中で後世まで地震のことを伝え続けていくために書いていることがわかる。どちらの資料でも地震のことを伝えることが目的である点は一致する。

しかし、日記に記載されているのにも関わらず、碑文には記述のない津波の被害について重要な部分がある。日記には、「壹番浪より弐番三番の引き汐に浦中皆流るる」〔注20〕とどの波により宇佐の人々が多く犠牲になったかの記載がある。一方で、碑文には「津浪大に溢れ進退八九度人家漂流」〔注21〕と津波の回数のみが書かれる。資料の目的は、後世の人に伝え続けることで一致するものの、それぞれが果たす役割が異なることにより、書かれる内容に違いが見られるのだろう。『真覚寺日記』は、被害をまとめているが該当する部分を読まなければ、その情報を知ることはできない。現在は日記が再編成されるなどして、多くの人が閲覧できる。しかし、「自家後裔」〔注22〕にと書かれていることから、著者の住職は、その後の寺に関わる人々を対象としていたのだとわかる。碑文よりも詳細な被害状況の記述があることから、日記が持つ目的は震災の詳細を残すことにあるだろう。その一方で、碑文は日記とは異なる性質を持つ。水松（2022）は、「宝永地震後と安政地震後との碑文の比較をすると（中略）安政地震津波は、死者の慰霊供養に加えて後世に生きる人々の生存を祈念するという建立目的をもち、慰霊供養型に加えて教訓型石碑が登場することが特徴」〔注23〕と述べる。さらに、「安政地震を経験した人々が宝永地震など過去の災害を想起し、今後も大地震の後に大津波が来るかもしれないという周期性を自覚したことで、（中略）もう一度起こるかもしれない災害で被災する人々に向け、災害の教訓を残そうという動きが起ったことが、安政地震後の変化の一つである」〔注24〕とあり、碑文は日記よりも後世の人々に向けて広く残すことが目的と言える。さらに、萩谷名号碑は、かつて津波が到達したと言われている山の麓に建つ。水松（2022）によると、石碑は四国遍路の道の側にあり、宇佐の人に加え、遍路を歩く人々の目に入りやすい場所にあると分かる〔注25〕〔図4〕。碑文は特定の人々ではなく、不特定多数の人々に向けられていた。地震を伝えるという共通の目的があったとしても、対象者や媒体、保存される場所などの条件が違うことによって内容が異なっている。

2.2. 伝承内容の評価

2.2.1. 昭和南海地震の証言からの検証

ここまででは、碑文の内容自体を検証してきた。しかし、碑文の目的が後世に伝えることである以上、その後の災害発生時にどのような役割を果たしてきたのかを検証することも必要である。安政南海地震後、1946年に昭和南海地震が発生した。この地震は戦後の復興に向かう最中だったため、写真や被災者の証言などが残されている。宇佐など高知県各地にいる昭和南海地震被災者の証言が『南海大震災の記録 - 裂けた大地』〔注26〕にまとめられている。実際に碑文と一致する証言がいくつか存在する。籠尾幸雄（当時24歳・漁船員・新宇佐町宇佐）（新宇佐町は現在の土佐市宇佐町）の証言には「宇佐では、昔から古のいい伝えで、地震いうたら津波だから、なんちゃ持たずに山へ逃げえという事がいわれておった。須崎とちがって、宇佐の被害がすくなかったのは、古のいい伝えがあつた

ので、それを忠実に守ったからだと思う。」 [注27] とある。奥田清志（当時31歳・雑貨店・新宇佐町福浜）は、「子供のときから、よく言い聞かされてきたことは、地震、台風のときは、欲をすべてまず山へ逃げよということだった。だから、物を持ち出すということは考えないことだね。」 [注28] と述べた。昭和南海地震の宇佐での被害は、廣木（1949）には、津波が3回宇佐を襲い、高知県で最も甚大な被害だったとある [注29]。甚大な被害だったにも関わらず、土佐市（1978）の記録では、この災害による死者と行方不明者共にたったの1名だった [注30]。森田寅吉（当時32歳・漁業・宇佐町東仲町）の証言によると、この亡くなった子供は空襲の時にいつも浜に逃げていたため、同じように行動し、津波に襲われた [注31]。証言に碑文と一致する内容があること、実際に被害が抑えられていたことから、宇佐で過ごしていた人々には碑文の教訓が十分に共有されていたと推測できる。

しかし、これらの証言の中には碑文には見られない内容も教訓として宇佐に残ることがわかる。同じく森田寅吉の証言には「うちのオヤジなど、安政の地震からの言い伝えで、井戸の水を見よと教えられていた（中略）ほいたら、水がこじちゃんとひいちょるきに、こりや必ず津波がくる。」 [注32] と津波が来るかどうかを井戸の水の引き具合で判断したことがわかる。岩本繁寿（当時32歳・教員・新宇佐町松岡）も「こりや、えらい地震じゃと思い、井戸の水を見たが、このときはあまりは水は少なくなかった。」 [注33] と井戸の水を見るることを基準にしていたことがわかる。他にも岩本繁寿は、「川が二つあるから、早く橋を渡ってないと逃げられなくなるぞという事を、耳にタコができるほど聞かされました。」 [注34] と避難方法に関する教訓も残されている。このように碑文の内容と異なることも教訓になっている。そのため、碑文の内容と一致している証言の一部も異なる媒体から伝え続けられてきたと考えられる。

地域に言い伝えを残す手段は碑文だけではなく、安政南海地震を経験した人々から直接口伝され昭和南海地震の時まで残ってきたことも考えられる。実際に、高知県の黒潮町田野浦では「大潮まつり」という安政南海地震の記憶を継承するまつりが昭和初期まで続いていた [注35]。このまつりで年に一度地震について語ることで地震の記憶をつないでいた。また、昭和9年に『土佐史談』に掲載された「福島浦安政大震考」の中に「川がありその橋は皆落ちて渡る事を得ず」 [注36] と記載されている。この雑誌は安政南海地震から80年近く経って出版されたものだが、昭和南海地震発生前であり、著者である江口又衛の父が安政南海地震を経験し、日記に残していた文章が公表されたものである。このように碑文にはない内容が他の書籍などに残っている可能性は大いにあり、その媒体がもたらす効果もあるだろう。特定の地域における教訓は碑文や他の書籍、口伝など様々な方法が混ざり合うことで形成されると考えられ、それぞれの媒体が人々に与える影響の大きさを特定することは、極めて困難である。

2.2.2. 証言の資料的価値

他の媒体による伝承を考えることも必要だが、証言という資料の性質を考察することも必要だろう。昭和南海地震の証言は地震発生後に振り返ったもので、掲載される証言は昭和50年代前半に収集され [注37]、地震発生から約30年が経過している。人々が過去に発生した大きな災害を冷静に振り返ることができるだけの時間がある。記録に残そうとした

時点で、昭和南海地震の記憶も既に、安政南海地震と同じように過去のものになり、当時の話や状況をそのまま残すことは不可能である。被災者が地震発生時に何を考え、行動したのかなどを完全に示していない点を考慮しなければならない。これは証言に残す際に、自分がとった行動と言い伝えを結びつけることができることも示す。証言は、実際の被災者から収集した価値はあるが、不確実性が残る。また、証言は生存者しか残すことができない。これは碑文も同様だが、生き残らなければ自らの行動を他者に伝えることは不可能である。だが、次の地震で私たちの命を守るために、生存者の証言に十分な価値がある。

証言から、碑文との共通点を多く見つけることができた。しかし、碑文と異なる教訓も含まれていること、証言には限界も見出すことができ、証言にある知識が確実に碑文から得た知識であるとは言いきれない。しかし、碑文が後世に伝えようとしたことが多くの人々に共有されていたことは事実だと考えられ、碑文の影響も一定あったと言える。

3. 結論

萩谷名号碑の碑文は概ね信用性がある。碑文の内容は、大部分が安政南海地震の被害を詳述した『真覚寺日記』と一致していた。碑文は不特定多数の人々を対象に地震があったことを伝えようとする特徴を持っていた。一方で、日記は特定の範囲で詳細に被害を伝えようとする特徴があった。このように目的の違いがあるため、碑文に含まれていない内容が日記には含まれていた。そのため、多数の人々に災害の存在を伝えることが目的である碑文の内容は十分に信用できるものだと考えられる。

碑文の教訓が昭和南海地震発生時に活用できたかどうかは、明確に言い切ることはできない。他の媒体による影響を捨てきれず、検証も困難だ。それは、複数の媒体による言い伝えが結びつき、昭和まで教訓が残った可能性があるからだ。ただ、碑文の言い伝えと一致している証言が複数あることから、言い伝えを残す複数の媒体の中に石碑が含まれていたと言えるだろう。碑文が残そうとした教訓は、多数の人々が関わることによって受け継がれていくものだろう。そのため、一つの碑文の信用性を特定することは困難であった。しかし、萩谷名号碑の碑文は被害についても明確であり、後世にも残っていたことから、災害を伝承する石碑の碑文として概ね信用できる。

4. 今後の展望

次の地震で生き残るための教訓として、生存者の証言は重要視される。過去の地震から何を学ぶことができるかを明らかにすることは大いに重要性があると感じた。しかし、今回の研究では一つの碑文のみを対象とした。こうした研究を多くの碑文に適応させなければならないが、『真覚寺日記』のように別の媒体に同じ地震の記録が残っているとは限らない。そのため、やはり地理学とより多くの連携が必要となる。津波が到達したと考えられる範囲と、地層などのデータから得られる範囲を照合するなどの方法が取れるのではないかと考える。さらに、検証で終わらすのではなく現在の私たちにとっても意味のある研究にしなければならないと考えるため、現在あるハザードマップとの比較も重要だ。東日本大震災では、震災前に作成されたハザードマップと実際の被害を比較した時、浸水範囲が震災前の想定を大幅に超えていた〔注38〕。碑文内容を分析することで津波到達地点のより正確な予測につなげることができるかもしれない。

脚注

1	国土地理院(2019).「新地図記号が「防災の日」にデビュー ~「自然災害伝承碑」を掲載した2万5千分1地形図を刊行開始 ~」.< https://www.gsi.go.jp/chizuhensyu/chizuhensyu61001.html >2025年4月27日閲覧.
2	復興庁.「自然災害伝承碑」. < https://www.reconstruction.go.jp/10year/traditional.html?utm_source=chatgpt.com >2025年5月17日閲覧.
3	国土地理院.「自然災害伝承碑の取組について」. < https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi_about.html >2025年5月17日閲覧.
4	水松啓太(2022).「高知県における安政・昭和南海地震の災害継承について」.『地域歴史文化フォーラム愛媛 安政・昭和南海地震の新研究報告書』.科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列 島における地域存続のための地域歴史文化の創成」グループ(研究代表者:奥村弘).p20
5	加納靖之(2021).『歴史のなかの地震・噴火 過去がしめす未来』.東京大学出版会.p3
6	西山昭仁(2015).「史料を用いた歴史地震の研究」. < https://www.jishin.go.jp/resource/column/column15win_p10/?utm_source=chatgpt.com >2025年5月17日閲覧.
7	加納.前掲書.p3
8	内閣府(2005).「災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 平成17年3月 1854 安政東海地震・安政南海地震」. < https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1854_ansei_toukai_nankai_jishin/index.html >2025年4月27日閲覧.
9	気象庁.「南海トラフ地震について」. < https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/jishin/nseq/index.html >2025年4月27日閲覧.
10	土佐市(2022).「真覚寺の日記」.< https://www.city.tosa.lg.jp/life/detail.php?hdnKey=4731 >.2025年4月3日閲覧.
11	田所金久(2011).『真覚寺日記(改訂版第一集)』.土佐市郷土史研究会.p199
12	田所.前掲書.p199
13	田所.前掲書.p199
14	田所.前掲書.p199
15	井上静照(1970).『土佐群書集成(二十二巻)真覚寺日記二(地震日記三、四)』.高知市立市民図書館.p78
16	井上.前掲書.p78
17	井上.前掲書.p78
18	田所.前掲書.p8~9
19	田所.前掲書.p3
20	田所.前掲書.p8
21	田所.前掲書.p199
22	田所.前掲書.p3

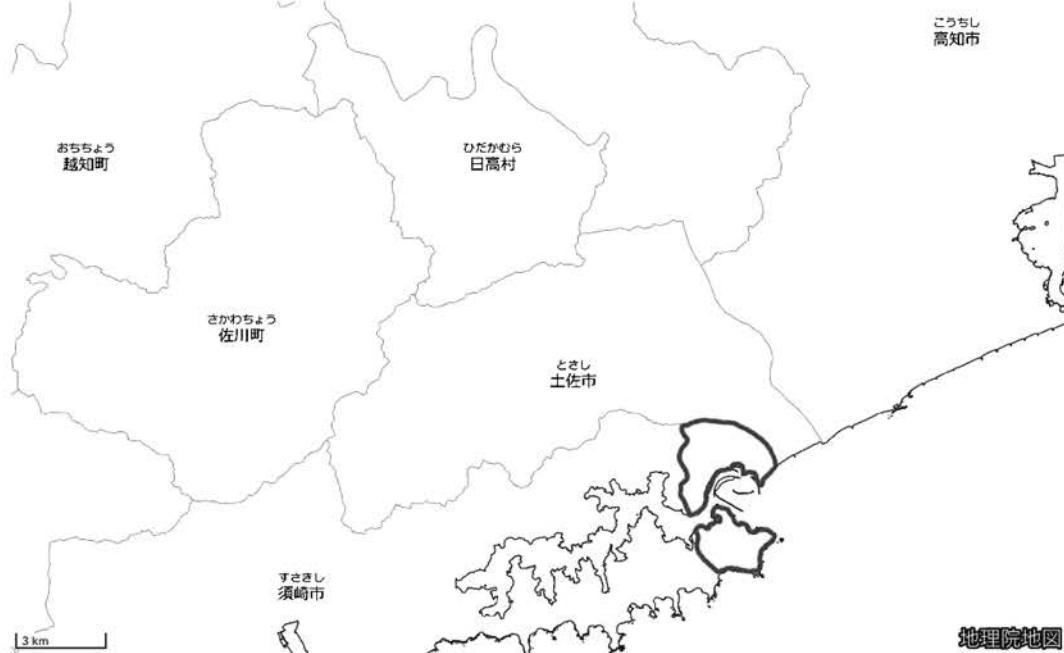
23	水松.前掲書.p22
24	水松.前掲書.p53
25	水松.前掲書.p22~23
26	市原麟一郎(1981).『南海大震災の記録—裂けた大地』.土佐民話の会.p258~275
27	市原.前掲書.p261
28	市原.前掲書.p271
29	廣木三郎(1949).『南海大震災誌』.高知縣.p589
30	土佐市(1978).『土佐市史』.土佐市.p1071
31	市原麟一郎(1981).『南海大震災の記録—裂けた大地』.土佐民話の会.p265
32	市原.前掲書.p265
33	市原.前掲書.p269
34	市原.前掲書.p268~269
35	高知県立高知城歴史博物館(2025).『高知の地震災害史—紡がれた記憶と記録—』.高知県立高知城歴史博物館.p19
36	江口又衛(1934).「福島浦安政大震考」.『土佐史談(47)』.土佐史談会.p163.国立国会図書館デジタルコレクション< https://dl.ndl.go.jp/pid/7913023 >2025年05月8日閲覧.
37	高知新聞(2023).「小社会 昭和南海地震77年」. < https://www.kochinews.co.jp/article/detail/708203 >2025年5月7日閲覧.
38	応用地質株式会社(2021).「東日本大震災から10年—「最大クラスを想定しなければならない」変化した津波 への考え方と対策」< https://www.oyo.co.jp/bousai-gensai/005.html >2025年6月5日閲覧.

図1.萩谷名号碑



高知新聞(2023).「津浪溢れ」「人家漂流」地震碑40基、高知県内に 克明な被害と教訓伝える阪神大震災から28年」.<https://www.kochinews.co.jp/article/detail/622527> 2025年5月7日閲覧.

図2.土佐市宇佐町(地理院地図を筆者が編集して作成)



国土地理院、「地理院地図」。

<https://maps.gsi.go.jp/#12/33.491733/133.379860&base=blank&ls=blank&disp=1&vs=c0g0j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0> 2025年5月17日閲覧.

図3.宇佐萩谷口の津波溺死者供養碑(拓本縮小版と解説文)



宇佐萩谷口の津波溺死者供養碑
(拓本縮小版と解説文)

南無阿弥陀佛

安政元甲寅歳十一月五日申の刻大地震日入
前より津浪大に溢れ進退八九度人家漂流
残る家僅六七十軒溺死の男女宇佐福島を
合而七十餘人なりき都て宇佐の地勢は前高く
後低く東ハ岩崎西は福島の低ミより汐先逃
路を取卷故昔寶永の変にも油断の者夥
敷流死の由今度もその遺談を信し取あへ
登船走曲今度も機運き難候候より而立
人山を出む者皆を食す御倉公
狼狽て船のうらを食す者流死
可哀哉其正當日御倉開けて御救米頂戴し
凍餓を免むる者甚多
之義亦不捨也人皆内疚よ似ま候る而
と並流れる急病流、患者多く死んで亦
有り候るを知る御倉主御宝庫を廻るべく
募集貯金して被災者舟舟にて
之を助す高野堂を青白寺附院に立てる
ものと云爾 安政丁巳十一月 西村耕助識

図4.四国遍路道と萩谷名号碑(地理院地図を筆者が編集して作成)



国土地理院「地理院地図Vector」。

〈<https://maps.gsi.go.jp/vector/#14.062/33.447591/133.442231&ls=vpale&disp=1&d=l>〉2025年5月17日閲覧.

参考文献

- ・安喰靖(2023).『自然災害伝承碑』.『国土地理院時報(2020, 133集)』.
〈<https://www.gsi.go.jp/common/000229082.pdf>〉2025年5月17日閲覧.
- ・市原麟一郎(1981).『南海大震災の記録—裂けた大地』.土佐民話の会.
- ・井上静照(1970).『土佐群書集成(二十二巻)真覚寺日記二(地震日記三、四)』.高知市立市民図書館.
- ・江口又衛(1934).『福島浦安政大震考』.『土佐史談(47)』.土佐史談会.国立国会図書館デジタルコレクション〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/7913023>〉2025年05月8日閲覧.
- ・応用地質株式会社(2021).「東日本大震災から10年—「最大クラスを想定しなければならない」変化した津波への考え方と対策」〈<https://www.oyo.co.jp/bousai-gensai/005.html>〉2025年6月5日閲覧.
- ・加納靖之(2021).『歴史のなかの地震・噴火 過去がしめす未来』.東京大学出版会.
- ・気象庁.「南海トラフ地震について」.
〈<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/jishin/n-teq/index.html>〉2025年4月27日閲覧.
- ・高知県立高知城歴史博物館(2025).『高知の地震災害史—紡がれた記憶と記録一』.高知県立高知城歴史博物館.
- ・高知新聞(2023).「津浪溢れ」「人家漂流」地震碑40基、高知県内に克明な被害と教訓伝える
阪神大震災から28年」.〈<https://www.kochinews.co.jp/article/detail/622527>〉2025年6月6日閲覧.
- ・高知新聞(2023).「小社会 昭和南海地震77年」.
〈<https://www.kochinews.co.jp/article/detail/708203>〉2025年5月7日閲覧.
- ・国土地理院.「自然災害伝承碑の取組について」.
〈https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi_about.html〉2025年5月17日閲覧.

- ・国土地理院(2019).「新地図記号が「防災の日」にデビュー～「自然災害伝承碑」を掲載した2万5千分1地形図を刊行開始～」
[⟨https://www.gsi.go.jp/chizuhensyu/chizuhensyu61001.html⟩](https://www.gsi.go.jp/chizuhensyu/chizuhensyu61001.html)2025年4月27日閲覧.
- ・国土地理院.「地理院地図」。
[⟨https://maps.gsi.go.jp/#12/33.491733/133.379860&base=blank&ls=blank&disp=1&vs=c0g0j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0⟩](https://maps.gsi.go.jp/#12/33.491733/133.379860&base=blank&ls=blank&disp=1&vs=c0g0j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0)2025年5月17日閲覧.
- ・国土地理院.「地理院地図」.
[⟨https://maps.gsi.go.jp/#9/33.293533/133.522864&base=blank&ls=blankdisaster_lore_al&disp=11&lcd=disaster_lore_al&vs=c0g0j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0⟩](https://maps.gsi.go.jp/#9/33.293533/133.522864&base=blank&ls=blankdisaster_lore_al&disp=11&lcd=disaster_lore_al&vs=c0g0j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0)2025年6月15日閲覧.
- ・国土地理院.「地理院地図Vector」。
[⟨https://maps.gsi.go.jp/vector/#14.062/33.447591/133.442231&ls=vpale&disp=1&d=l⟩](https://maps.gsi.go.jp/vector/#14.062/33.447591/133.442231&ls=vpale&disp=1&d=l)2025年5月17日閲覧.
- ・田所金久(2011).『真覚寺日記(改訂版第一集)』.土佐市郷土史研究会.
- ・土佐市(1978).『土佐市史』.土佐市.
- ・土佐市(2022).『真覚寺の日記』。
[⟨https://www.city.tosa.lg.jp/life/detail.php?hdnKey=4731⟩](https://www.city.tosa.lg.jp/life/detail.php?hdnKey=4731)2025年4月3日閲覧.
- ・内閣府(2005).「災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 平成17年3月 1854 安政東海地震・安政南海地震」.
[⟨https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyoukunnokeishou/rep/1854_ansei_toukai_nankai_jishin/index.html⟩](https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyoukunnokeishou/rep/1854_ansei_toukai_nankai_jishin/index.html)2025年4月27日閲覧.
- ・西山昭仁(2015).「史料を用いた歴史地震の研究」。
[⟨https://www.jishin.go.jp/resource/column/column15win_p10/?utm_source=chatgpt.com⟩](https://www.jishin.go.jp/resource/column/column15win_p10/?utm_source=chatgpt.com)2025年5月17日閲覧.
- ・廣木三郎(1949).『南海大震災誌』.高知県.
- ・復興庁.「自然災害伝承碑」。
[⟨https://www.reconstruction.go.jp/10year/traditional.html?utm_source=chatgpt.com⟩](https://www.reconstruction.go.jp/10year/traditional.html?utm_source=chatgpt.com)2025年5月17日閲覧.
- ・水松啓太(2022).「高知県における安政・昭和南海地震の災害継承について」.『地域歴史文化フォーラム愛媛安政・昭和南海地震の新研究報告書』.科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」グループ(研究代表者:奥村弘).
- ・宮古市役所.「重茂姉吉地区の教訓「ここより下に家を建てるな」」。
[⟨https://miyako-archive.irides.tohoku.ac.jp/tatakai/showasanriku/4/⟩](https://miyako-archive.irides.tohoku.ac.jp/tatakai/showasanriku/4/).2025年5月17日閲覧.
- ・讀賣新聞(2024).「大潮祭り 100年ぶり復活」。
[⟨https://www.yomiuri.co.jp/local/kochi/news/20241105-OYTNT50102/⟩](https://www.yomiuri.co.jp/local/kochi/news/20241105-OYTNT50102/)2025年5月20日閲覧.



優秀賞

越辺川の河床遺跡を検討する

-新発見の越辺川吹塚西袋町A地区A1・A2 地点河床遺跡を中心として-



筑波大学附属坂戸高等学校

梶野拓夢



遺跡概要

- 遺跡名：越辺川吹塚西袋町 A 地区 A1・A2 地点河床遺跡（仮）【以下 A 遺跡】
- 所在地：埼玉県比企郡川島町吹塚西袋町・越辺川左岸砂州 ● 座標：35° 59' 33.4"N 139° 26' 05.4"E ● 発見日：2024.12.08 ● 発見者：梶野拓夢 ● 発見遺物：埴輪片・須恵器片
- 遺跡地図：図 1

1. 調査理由

川島町は四方を河川に囲まれ、河床遺跡が多く確認されている。中でも荒川・入間川では、『川島町史』（2006）により、縄文時代中期の河床遺跡の存在が報告されている。一方、越辺川流域では2024年現在、遺跡の確認例はなく、2006年以降は調査も実施されていない。私はこの未調査領域に着目し、越辺川には本当に河床遺跡が存在しないのかという疑問を抱き、本調査を行った。

2. 調査方法

初めに、川島町内の河床遺跡の特徴について、町史や郷土史等の資料を用いて調査を行った。次に、調査対象地域を越辺川左岸の上伊草地区から長楽地区赤尾落合橋跡までと設定した。対象地域では、河床と遺跡の有無を確認するため、次の調査を実施した。

①グーグルアースおよび土手上からの観察による河床の有無確認、②河床確認時には現地で降下可能性の検証、③降下できた場合は表面採集による遺物の有無調査、④遺物発見時の写真撮影と採集地記録、⑤遺物の検討、⑥遺物から採集地点の遺跡存在について考察

3. 先行研究の調査

3-1. 川島町について

埼玉県比企郡に所在する川島町は北に市ノ川、東に荒川、西に越辺川、南に入間川を隔て四方を河川に囲まれている（図 4）。川島町は比企郡最東部に位置し、面積は41.72km²、東西 11.2km、南北 7.9km と、細長い形状をしている。町内は荒川低地となっており、町内をはしるそれぞれの旧流路によって自然堤防が形成されている。越辺川の自然堤防は新期自然堤防に当たる。同町では芝沼堤外遺跡をはじめとして、縄文時代早期から人が住みはじめた痕跡がみられるが、弥生時代になると人の痕跡が少なくなる。古墳時代には大規模集落や各地に古墳がつくられ、箱式石棺が出土した東大塚古墳がある。奈良時代以降は条里制遺構が見受けられる。また遺跡の立地は自然堤防上が大半を占めている。

3-2. 川島町の河床遺跡について

川島町史（1999）に基づき、町内における河床遺跡の分布を表 1 の通り整理した。荒川と入間川において縄文時代の遺物を中心とした遺跡が確認された（図 7）。荒川では芝沼堤外遺跡を中心に諸磯式土器および木製品が河床遺跡にて出土している。入間川では多くの河床遺跡で縄文前期の土器や諸磯式土器に加え、土師器および須恵器が採集されていることから、複合遺跡の可能性が指摘される（図 8）。一方、市ノ川および越辺川においては、表 2 のとおり河床遺跡の存在は確認されていない。

これらの結果から、川島町の河床遺跡は町内東南部、特に荒川・入間川周辺で縄文期の遺跡が多く確認されていることが分かる。また川島郷土史や新編武藏国風土記などにおいて河床遺跡の存在は確認されていない。川島町における河床遺跡は川島町史以外に指摘するものは管見の限り見当たらなく、比較的最近認知され、実態については未解明な点が多

いことがわかる。

3-4. リサーチクエスチョンの設定

以上のように越辺川流域と、入間川および荒川流域の流域間の差異を踏まえ、本研究では、越辺川に本当に河床遺跡が存在しないのか、仮に存在する場合、入間川・荒川流域との相違点は何か、という2点をリサーチクエスチョンとして設定した。

4. 調査概要

4-1. 越辺川について

越辺川は埼玉県越生町の黒山三滝を水源とし、鳩山町で鳩川、坂戸市で高麗川、川島町で都幾川と合流し、川島町角泉付近で入間川に合流する。一級河川である。今回の調査区域は国土交通省の管轄であり、両岸に高い堤防が設けられている。また越辺川は川島町と隣接する埼玉県坂戸市との境となっている。

4-2. 発見した河床について

今回、グーグルアースでの調査と土手上からの目視で発見した河床は以下の通りである。

- ・川島町吹塚西袋町・越辺川左岸砂州（天神橋100m上流地点）
- ・川島町八幡五丁目10の39越辺川左岸砂州（天神橋1.2km下流地点）
- ・川島町吹塚前袋町・越辺川左岸砂州（天神橋100m下流地点）
- ・川島町吹塚浅間前・越辺川左岸砂州（水道橋10m上流地点）

以上の4地点のうち、降りられた河床は川島町吹塚西袋町・越辺川左岸砂州であり、この河床を以下では便宜上A地区としながら内容を記す。

4-3. 河床の現状について

降りられた河床の現状について述べていく。

A地区（越辺川中流域右岸）：河床には5cm程度の小石が広く分布し、その間に乾燥した泥が堆積する。漂流物は少なく、流木も確認されなかった。堤防近くは草木が生い茂り地表の観察は困難であるが、河川側には小石・泥が約20cm堆積し、河道は右岸に蛇行する。河床と堤防の間には三日月湖が形成され、堤防からの距離は約110mであった（図1）。

5. 遺物の採集について

本調査において、A地区およびの両地点において遺物の表面採集が可能であった。

A地区では、同一の河床から約300mにわたる広範囲で遺物が分布していたことから、採集地点を細分化し、図2に示すようにA1およびA2の2地点に区分した。さらに、それぞれの地点内における採集位置にはイ～カの記号を付して整理を行った。（図3・表3・表4）A1地点は、越辺川下流・天神橋付近の河床約100m四方に形成された砂州上からの表面採集によるものであり、砂州上に多くの遺物が集中していた点が特徴である。

一方、A2地点は越辺川上流・水道橋付近の河床200m四方を範囲とし、河原石と泥が混在する地形上から遺物を採集した。A2地点で確認された遺物の内容は表4にまとめた。

以上の調査結果を総括すると、A地区では須恵器を中心とした土器片が主に確認され、いずれも流路から離れた砂州の内側に集中していた。

6. 遺物についての検証と考察

A地区から発見した遺物を表5表6の通り再分類した。

土器：ここでは須恵器、埴輪に分類をすることができなかつたもの4点の総称として土器という言葉を使用する。共通して摩耗が激しく、胎土に雲母と白い小礫が含まれるもの

が多い。dの土器片は、外面の3分の1程度の範囲に黒斑が認められる。また内面は全体にわたり黒斑が認められる。このことから京都橘大学考古学研究室の指摘「黒斑は焼成中に温度が上がらずに炭素が吸着した部分で、窯のなかで焼成されていないことがわかる」を踏まえると、本土器片は野焼きにより制作されたものであると考えられる。jの土器片は摩耗が激しく、全体に丸みを帯びており、詳細な検討は困難である。kの土器片は立ち上がり部が残存しており、口縁部に由来する可能性がある。lは平底部とみられ、器種としては杯や椀などの小型土器が推定される。

須恵器：須恵器片は計6点出土した。全体的に摩耗が進行し、白色小礫を含む胎土を持ち、焼成は甘い。一点色調が違うものがある。これらの特徴は広徳寺古墳出土の須恵器と共通し、川島町教育委員会（1994）は6～7世紀の比企地方特有の様式とする（図11）。また、松岡喜久次（2024）はこの胎土が岩殿丘陵産泥岩に由来することを指摘しており、本遺物も同様に6～7世紀に比企地域で生産されたと考えられる。ただし1点は8世紀の須恵器である可能性があるものがある。

aの須恵器片は表面に自然釉がかかり、格子叩きもしくは羽状文様の叩き目が認められるが、内面には当て具痕は見られない。丸みがないことから大甕などの大型器と考えられる。内面の無紋の当て具によって製作された可能性もある。特徴から6世紀ごろのものと推測する。内面裏面に2cm四方の黒斑がある点は使用痕として注目される。bの須恵器片は大きな平面と薄さから、高さのない平底盤状坏の可能性が高い。底部には糸切痕が見られる。平底盤状坏はこの地域で坂戸市長岡遺跡など7～8世紀の遺跡から出土している為、本品も7～8世紀と比較的新しい遺物であろう。cの須恵器片には叩き目と内面の同心円状の当て具痕があり、比企産の大甕と考えられる。叩き目があることから6世紀ごろのものと推定する。fの須恵器片は厚く大型であり、外面上部に波状文が確認される。波状文は須恵器の口縁部に施されることが多く、本片もその部分にあたると考えられる。内面には同心円状でない当て具痕が認められる。波状文より6世紀ごろのものと推定する。gは摩耗が著しい。胎土から比企産とみられる。hは焼成不良で内部は土器状であり、土師器に近い。平底で外面には糸切痕、内面中央には渦巻状の成形痕と刻線が一本確認される。杯の可能性がある。iの色調は灰白色で、比企産でなく東海産とも考えられる。外反した口縁部を持ち内面には刷毛目痕が確認される。外面には頸部沈線が1条認めらる。以上の特徴から長頸瓶と推定される。6世紀後半の桜山古墳群出土須恵器（埼玉県埋文調査事業団1983）でも同様の報告がなされている。よって、本品も6世紀後半～7世紀前半の須恵器と考えられる。

埴輪：埴輪は2点出土した。いずれも摩耗が著しく形状の復元は困難だが、刷毛目や透孔などから埴輪に分類される。両者に共通性は認められず、産地・年代は異なる可能性がある。eの埴輪片は外面に縦刷毛、内面に斜め刷毛が施される。藤野龍宏（2016）は、埼玉県では5世紀末以降、簡略な刷毛目の埴輪が登場すると指摘しており、本例もそれに該当する可能性がある。白色の胎土には小礫が含まれ、5世紀末の埼玉古墳群稻荷山古墳出土の武人埴輪と色調が類似する。以上のことより本埴輪片は5世紀末のものと考えられる。mの埴輪片は外内面ともに刷毛目が見られないが、透孔の痕跡が部分的に残存しており、孔周囲の粘土の盛り上がりから透孔と判断できる。埴輪片は緩やかに内反しており、円筒埴輪と推定される。類例として明治大学所蔵玉里舟塚古墳出土の円筒埴輪がある。

7. 河床遺跡についての考察

7-1. 河床遺跡の定義と川島町越辺川における河床遺跡の存在について

まずは河床遺跡の定義づけを行う。ここでの河床遺跡の定義は川島町史の報告事例に基づき、堤外に位置し水中に沈む期間がある河床にて複数遺物が採集される地点を河床遺跡と定義する。A地区では複数遺物を採集することに成功した。このことからA地区は河床遺跡の定義にあてはまる為A地区を河床遺跡とする。ここではA地点を「越辺川吹塚西袋町A地区A1・A2地点河床遺跡（仮）」（以下本遺跡と記載）と定義し、考察を行う。

7-2. A地区遺跡の構築年代について

まず、採集された遺物に基づき、本遺跡の性格と年代について検討を行う。埴輪片については、既述のとおり5世紀末以降に属するものと考えられる。また、須恵器片に関しては、広徳寺古墳より出土した7世紀の須恵器甕と共に通する特徴が認められ、7世紀の資料と見なすことができる。これらの点から、本遺跡は古墳時代中期末の5世紀末頃から、後期にあたる7世紀頃にかけての遺跡と考えられる。特に採集された埴輪片、須恵器の大甕、およびフラスコ形須恵器は、いずれも6～7世紀に位置づけられ、同一時期の遺物として重なり合うことから、本遺跡は6～7世紀を中心とした活動の痕跡を示すものと捉えるのが妥当であろう。一方で、採集された須恵器杯の一部には8世紀に比定されるものが含まれており、他の遺物との年代に隔たりが見られる。7世紀末になると本遺跡の西方約1キロ地点には、勝呂廃寺が登場するようになることから、本遺跡の主要な活動期は6～7世紀と考えられる。8世紀の須恵器杯はこうした活動終息後の混入遺物とみる可能性が高い。

7-3. A地区遺跡の成立について

遺跡の所在は、遺物の採取地点から大きく分けて2地点に分けられ、2地点とも吹塚西袋地区内にある砂州とその周辺であると考えられる。確認された遺物はすべて埋没しておらず、砂州表面に打ち上げられたような状態で存在していた。A1・A2地点を通じて採集された遺物は計12点であり、いずれも遺物片であって完形品の出土には至っていない。また、遺構とみられる痕跡も認められなかった。このような状況は入間川河床遺跡A地点でも確認されている。このような採集状況を川島町史（2006）では「河川敷の自然堤防上の遺物が壊されて流れ出てきたもの」という指摘をしている。この指摘を採用し、本河床遺跡の以上の状況から考察をすると、本遺跡は越辺川上流に存在する遺跡の封土が川の流れにより侵食され、流失し、堆積した古墳関連遺物の集積地である二次遺跡と推定する。次に、想定される遺跡の遺構について考察を行う。本遺跡は二次遺跡としての考察を行ったが、その遺跡はどのようなものであったのであろうか。雄山閣（1992）では埴輪が出土する墳丘では石棺や木棺といった埋葬施設を伴う可能性が高いことを指摘している。さらに大甕出土は、内山敏行（2024）では栃木県宇都宮市竹下浅間山古墳にて甕の出土が報告、また川島町文化財保護審議会（1994）では、同町大字表所在の広徳寺古墳にて須恵器甕の出土が報告されていることから大甕が古墳の副葬品としての性質を持っていたことが分かる。本遺跡においても埴輪・須恵器等の出土状況から、埋葬施設を伴う古墳との関連性が示唆される。河床からの古墳発見の先行事例は、滋賀県近江八幡市江頭南遺跡にみられる。この遺跡の発見は地表に姿を現した埴輪片からであった。その為本遺跡にも埋葬施設を有する可能性が高いと考えられる。出土遺物の規模感は円墳とされる広徳寺古墳に類似している。このことから、円墳が存在した遺跡であると考察することができる。これら踏まえ、

遺物が他の遺跡から流出した場合の出所を考察すると、本遺跡から上流 1km ほどの地点に古墳時代最大級の集落あった反町遺跡や銭塚遺跡、野本將軍塚古墳などがある。その中でも反町遺跡と銭塚遺跡に注目していく。初めに反町遺跡では、河川に浸食されやすい低地に古墳時代中期から後期にかけての古墳が埼玉県埋蔵文化財調査事業団（2009）の発掘で確認されている。この遺構は先述の遺構の考察で述べたものと合致する。特に前方後円墳は5世紀末に築造されたものがある。加えて6世紀に築造された円墳、埴輪類も確認されている。この年代は今回採集した埴輪片と合致する。さらに平底盤状坏も確認されている。次に、銭塚遺跡では、埼玉県埋蔵文化財調査事業団（2010）によって第18号住居跡より、南比企産須恵器の大甕、東海産の長頸瓶、須恵器壺類などが出土したと報告している。これらの遺物は今回採集した遺物と同様のものである。以上のことから本遺跡の成立には反町遺跡や銭塚遺跡などの関連性が伺える。加えて反町・銭塚遺跡が所在する地域は氾濫平野であり、令和元年東日本台風の際に都幾川堤防の決壊により氾濫し、軽自動車や多くの物品が本地域へと流されている。このようなことは古墳時代以降にもあったであろう。埼玉県埋蔵文化財調査事業団は「川島町域に当たる低地には大規模な遺跡が展開しており、反町遺跡の都幾川・越辺川の下流域に当たることから両者の関係が問題となる」とも指摘している。これらのことから構築当時の反町遺跡の埋葬施設や銭塚遺跡が川の浸食によって遺物が流失し、川島町西袋町の河床に堆積したものが本遺跡の成立であると考察する。よって本遺跡は二次的に堆積した反町・銭塚遺跡関連遺物の集積地であり、川島町西袋町の河床は遺構がないものとも言える。なお、本遺跡の遺物が反町・銭塚遺跡以外の遺跡から流出した可能性も否定できず、今後の調査が必要である。

8. 川島町越辺川における河床遺跡について

今回の調査により、越辺川において二次遺跡としての河床遺跡が確認された。これは、荒川・入間川流域における先行調査の成果と対照的な結果を示すものである。荒川および入間川では縄文前期から後期の土器が河床から採集され、縄文時代の遺跡の存在が指摘してきた。これに対し、越辺川では縄文時代の遺物は確認されず、代わって古墳時代中期～後期に属する須恵器片や埴輪片が採集された（図7）。すなわち、越辺川流域の河床遺跡は縄文時代の痕跡ではなく、古墳時代中後期の遺物を中心とするという点で越辺川は他の河川に存在する河床遺跡と比べ、比較的新しい時代の河床遺跡が存在するという特徴を示している。また、越辺川自然堤防上には表7に示すような遺跡群が展開し（図6・図5）、さらに上流域にも図10に見られる銭塚遺跡や反町遺跡など、古墳時代の遺跡が集中する。中でも川島町堂地遺跡においては比企産の須恵器が確認されており、本調査で得られた遺物とも時期的に整合する。以上のことから、越辺川流域には古墳時代中期以降の遺跡が集中的に分布しており、川島町域を流れる越辺川においても縄文時代の遺跡がなく、古墳時代の遺跡が占める特異な地域といえる。

9. 結論

本調査では、川島町越辺川河床において未確認だった二次遺跡を発見した。採集された遺物より、他地点の6～7世紀の遺跡から流出した可能性が高く、入間川・荒川流域の縄文時代中期の河床遺跡とは年代が異なる特徴をもつことを示した点で極めて意義深い。今後の越辺川流域の河床遺跡研究のさらなる進展を期待し、本調査の結論とする。

表1 「川島町の河床遺跡について」

遺跡名	時代	採集物	備考
荒川河床遺跡	縄文後期から古代	堀之内式土器・土師器・木桶など	昭和30年に慶應義塾大学により発掘。 所在地不明
荒川河床市ノ川合流地点遺跡	縄文前期	諸磯式土器・土師器	阿津溝稻荷近く。 現在も採集可(①)
荒川河床太郎衛門橋付近遺跡	縄文中期	諸磯式土器・加曾利E式土器	太郎衛門橋下。現在も採集可(②)
入間川河床A遺跡	縄文前期・古墳	加曾利E式・関山II式・諸磯b式土器・須恵器	菅間樋管近く 複合遺跡を指摘
入間川河床D遺跡	縄文前期・古墳	黒浜式土器の深鉢・須恵器	町内最古級遺跡指と摘。横塚樋管近く。 複合遺跡を指摘
入間川河床G遺跡	縄文前期・古墳	諸磯式土器・土師器	高木樋管付近。 複合遺跡を指摘。

表2 「川島町を流れる河川と遺跡数」

川名	遺跡件数
入間川	3件
荒川	3件
越辺川	0件
市ノ川	0件

表3 「2024. 12. 08 埼玉県比企郡川島吹塚西袋町A地区A1地点採集品観察表」

整理番号	採集地地点	法量	形態の特徴・手法の特徴	採集地点状況
a	A 1 ホ	横9cm・縦5.3cm・厚さ9.2mm	表面に葉・菱状の平行線文様あり。刻線凹部2.5mm・凸部1.8mm	ホ地点で採集。河原石と共に上に外面が見える形で発見
b	A 1 イ	横7.8cm・縦6cm・厚さ7cm・高さ9.7mm	底部。一部に側面上がる部分あり。	イ地点で採集。砂で盛り上がった地点の斜面で発見
c	A 1 ニ	横7.5cm・縦6.6cm・厚さ9.8mm	裏面に円形文様あり。表面に平行線文様あり。凹部1mm・凸部3mm	ニ地点で採集。内面が見える形で砂利と泥が固まった場所で発見
d	A 1 ロ	横6.3cm・縦4.1cm・厚さ(底部)1.25cm・厚さ(側面)6.5mm・高さ2.8cm	一部底部を含む。底部には焦げなく、底部から3cmの箇所から焦げがある。裏面焦げる。雲母を胎土に含む。	ロ地点で採集。砂で盛り上がった地点の頂上で固まった泥に埋もれた形で発見
e	A 1 ハ	横7.8cm・横5.5cm・厚さ1.5cm	多少の内反縦に見せる。縦刷毛か。裏面に刷毛目が縦方向にあり。表面は刷毛目横方向にあり。横刷毛。色調は白い。	ハ地点で採集。川原石と乾いた泥に埋もれた状態で小さく塚のようになった場所で発見。

表4 「2024. 12. 08 埼玉県比企郡川島吹塚西袋町A地区A2地点採集品観察表」

整理番号	採集地点	法量	形態の特徴・手法の特徴	採集地点状況
f ト	A2 ト	横 9.1 cm・縦 7.1 cm・厚さ 13.7 mm	裏面に手ごね痕あり。表面に波状文様あり。	ト地点採集。川原石と乾いた泥に埋もれた状態で内面が見えたのを発見
g チ	A2 チ	横 7.9 cm・縦 5.7 cm・厚さ 9.5 mm	摩耗が激しい。	チ地点採集。地面に張り付いた除隊で発見
h オ	A2 オ	横 6.1 cm・縦 3.2 cm・厚さ 4.4 mm	須恵器質だが焼きが甘く土師器に近い。底部に糸切痕が残る。	オ地点採集。河原石が散布する地点で発見
i ヌ	A2 ヌ	横 3.1 cm・縦 5.5 cm・厚さ 8 mm・口縁部 2.3 cm	口縁部に刻線が入る。 口縁部にかけて外反する	ヌ地点採集。砂州の表面で発見
j ワ	A2 ワ	横 4.7 cm・縦 4.5 cm・厚さ 1.2 mm	内反する。摩耗が激しい。	ワ地点採集。河原石が散布する地点で発見
k ル	A2 ル	横 4.5 cm・縦 3.7 cm・厚さ 7.5 mm	胎土には白い小礫と雲母が含まれている。外面の色調は白色に近い	ル地点採集。河原石が散布する地点で発見
l リ	A2 リ	横 3.9 cm・縦 3.2 cm・厚さ 9.3 mm・高さ 1.2 cm	色調が橙色に近く胎土に白い小礫と雲母が含まれている	リ地点採集。河原石が散布する地点で発見
m カ	A2 カ	横 5.9 cm・縦 6.3 cm・厚さ 1.1 mm	刷毛目無し。上部に透孔あり。透孔下に穴を抜いた際に押し出された粘土あり	カ地点採集。河原石が散布し土砂が乾燥した地点の表面で発見

表5 「A地区 A1 地点発見遺物の再分類化」

整理番号	器種	採集地点
a	須恵器片	A1 ホ
b	須恵器片	A1 イ
c	須恵器片	A1 ニ
d	土器片	A1 ロ
e	埴輪片	A1 ハ

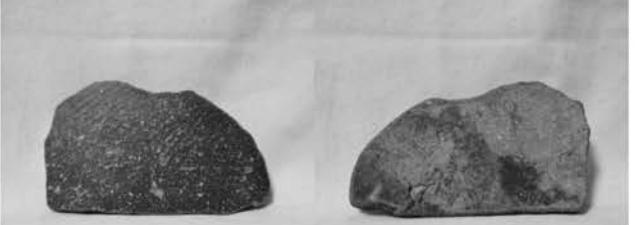
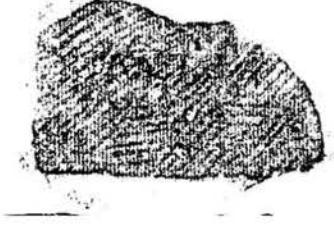
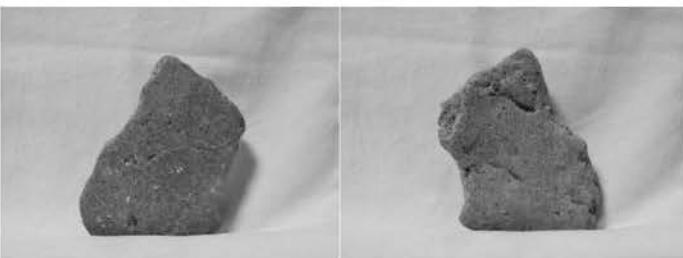
表6 「A地区 A2 地点発見遺物の再分類化」

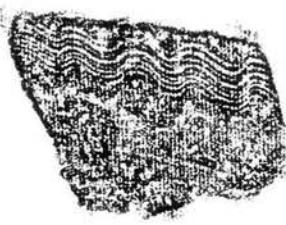
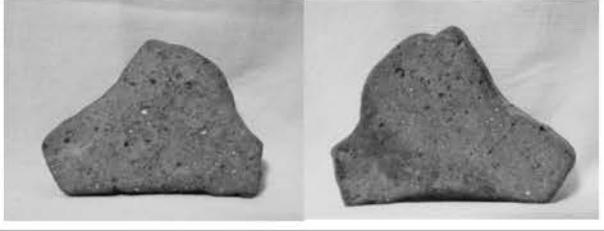
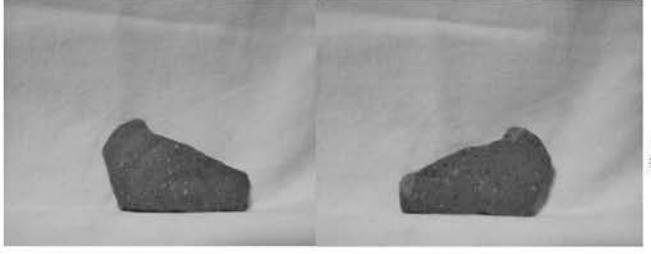
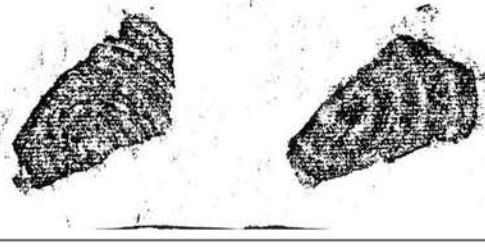
整理番号	器種	採集地点
f	須恵器片	A2 ト
g	須恵器片	A2 チ
h	須恵器片	A2 オ
i	須恵器片	A2 ヌ
j	土器片	A2 ワ
k	土器片	A2 ル
l	土器片	A2 リ
m	埴輪片	A2 カ

表7 「越辺川自然堤防上に所在する遺跡」

名称	年代	遺物	備考
新田町遺跡	古墳～平安	土師器片 1 点	東山道の遺構か
中廓天神遺跡	古墳～平安	土師器片・須恵器片	南比企窓跡群産
正泉寺遺跡	古墳～平安	土師器片・須恵器片	南比企窓跡群産
京塚古墳	古墳時代中期？	なし	塚の可能性あり
堂地遺跡	古墳～鎌倉	埴輪片 1 点・土師器・須恵器・小札など	古墳未確認

採集品

整理番号	器種	採集地點			
a	須恵器片	A1 示			
b	須恵器片	A1 イ			
c	須恵器片	A1 二			
D	土器片	A1 口			
e	埴輪片	A1 八			

整理番号	名称	採集地点	
f	須恵器片	A2 ト	 
g	須恵器片	A2 チ	
h	須恵器片	A2 オ	 
i	須恵器片	A2 ヌ	
j	土器片	A2 ワ	
k	土器片	A2 ル	

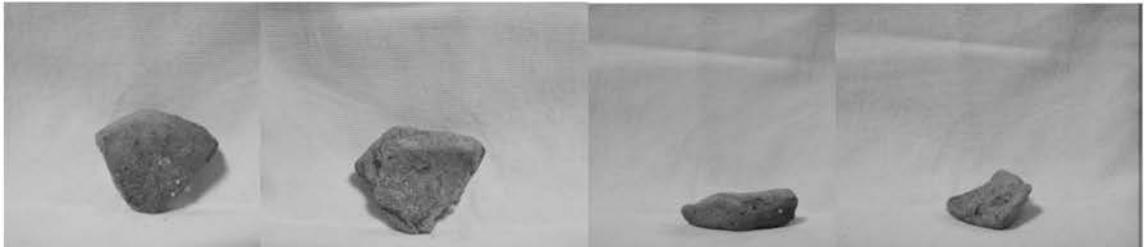
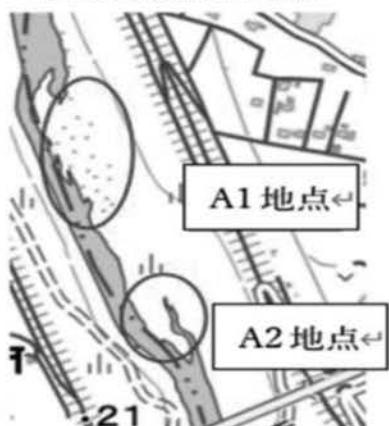
1	土器片	A2リ	
m	埴輪片	A2力	

図1 「越辺川西袋町河床の地図」



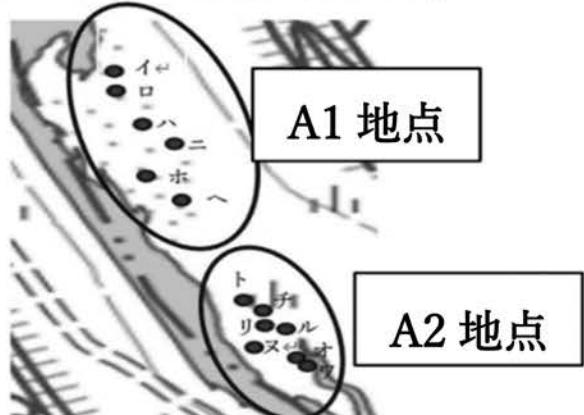
国土地理院地図を加工して使用

図2 「越辺川西袋町河床A1・A2地区の地図」



国土地理院地図を加工して使用

図3 「A地区A1・A2地点詳細採集場所詳細地図」



国土地理院地図を加工して使用

星印位置が該当河床



図4：埼玉県比企郡川島町
(国土地理院地図を加工して使用)



図5：川島町の古墳時代の遺跡
(川島町史地質考古編 出典)

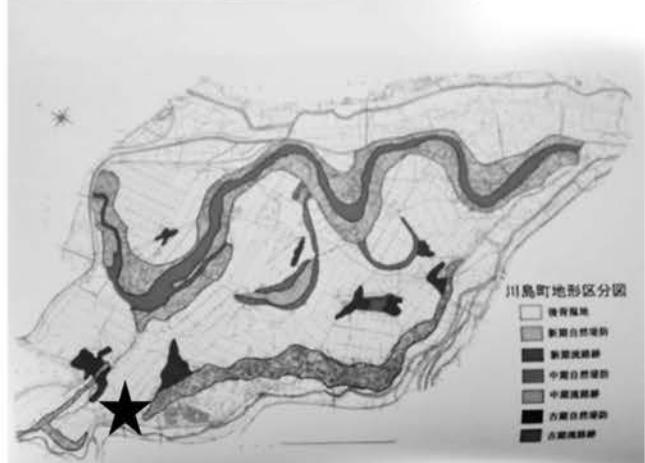
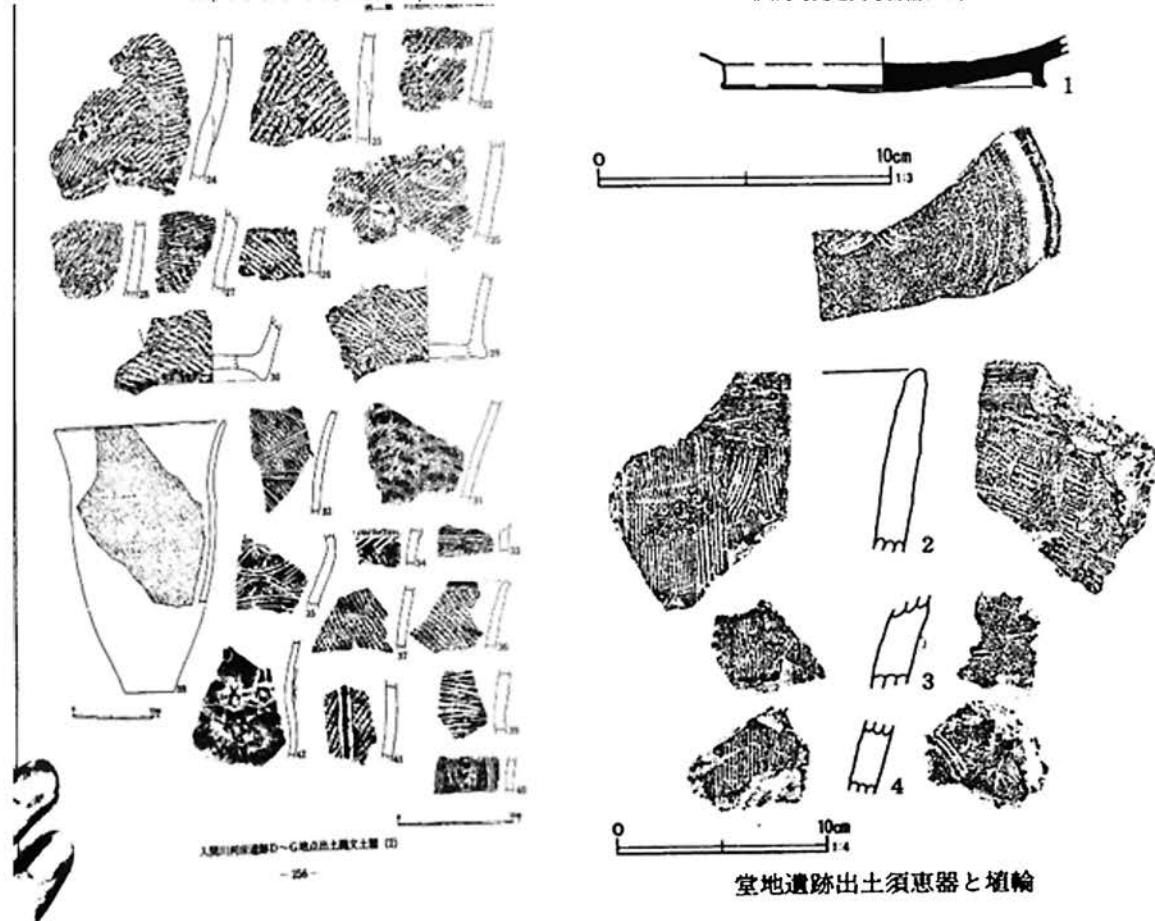


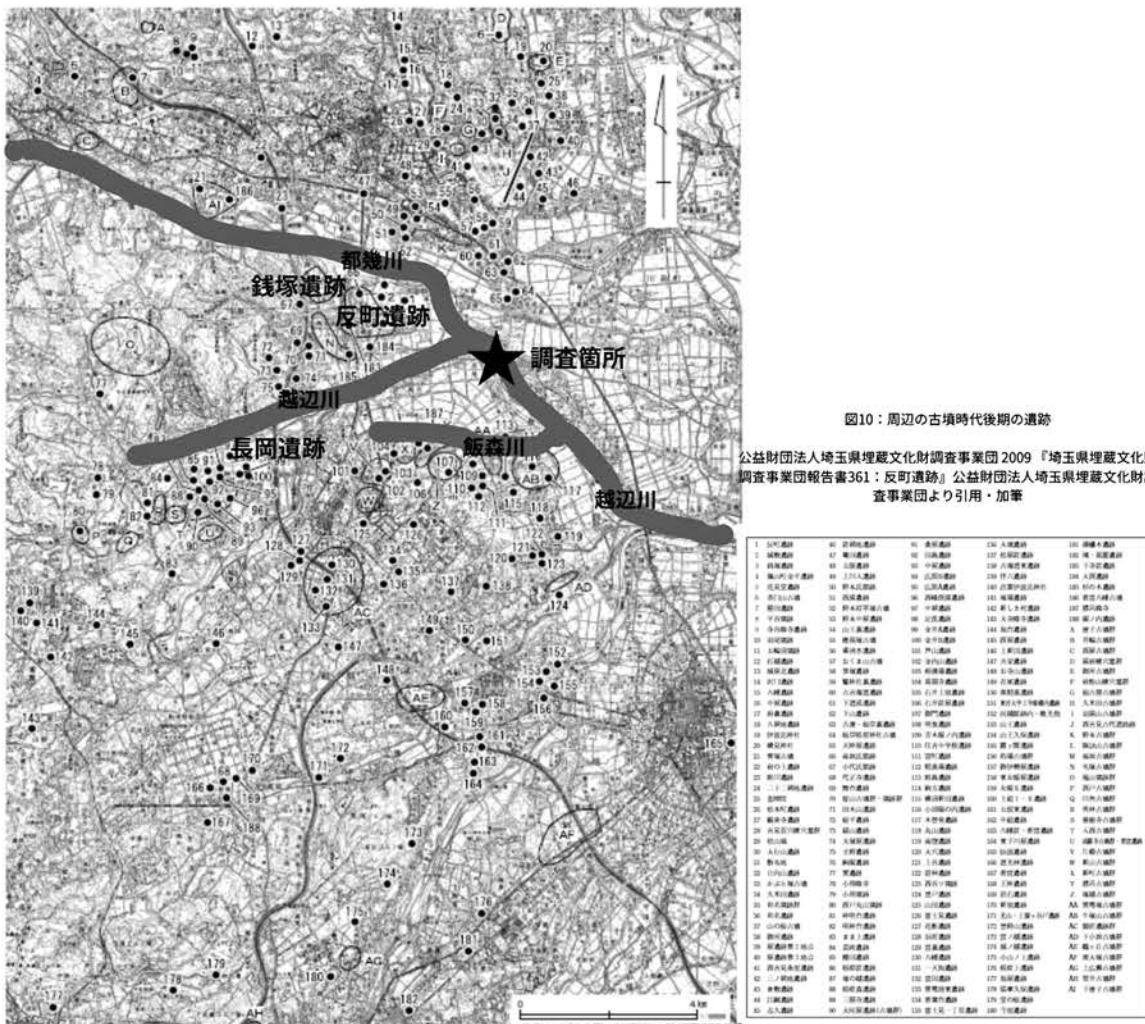
図6：川島町の自然堤防
(川島町史地質考古編 出典)



図8：川島町入間川河床遺跡D～G地点出土の縄文土器(川島町史地質考古編より)

図9：川島町堂地遺跡出土の須恵器と埴輪
(川島町史地質考古編より)





第6図 古墳時代後期から中世の歴史的遺跡

図11：川島町広徳寺古墳出土の須恵器甕
(川島町の文化財資料集1川島町の埋蔵文化財より)



図12：越辺川吹塚西袋町A地区A1・A2地点
河床遺跡からの採集品の年表

採集遺物の年代	5世紀期末	6世紀期	7世紀期	8世紀期
の埴輪				
3 墓				
須恵器				
須恵器				
須恵器				

A地区A1地点イの場所で採集した須恵器片



A地区A1地点イの場所で採集した須恵器片



A地区A1地点イの場所で採集した須恵器片



A地区A1地点イの場所で採集した須恵器片



河床から見た越辺川 (2024.12. 8)



天神橋見た越辺川と河床 (2024.12. 8)



河床の現状 (2024.12. 8)



※河床遺跡の発見後、本資料とは別のもので川島町学芸員に報告した。

参考・引用文献

川島町 (2006) 「川島町史資料編地質考古」

川島町文化財保護審議会 (1994) 「川島町の文化財資料集1川島町の埋蔵文化財」川島町教育委員会

川島町 (2001) 「川島町史調査資料第八集川島郷土誌編集復刻版」

国立公文書館デジタルアーカイブ 「新編武藏風土記稿卷之 190 比企郡之 5 卷之 191 比企郡之 6 卷之 192 比企郡之 7」

<https://www.digital.archives.go.jp/file/1224755.html> (閲覧日 : 2025.7.25)

群馬県立博物館友の会 (1996) 「図説はにわの本」東京美術

町田市「町田市デジタルミュージアム」<https://adeac.jp/machida-digital-museum/table-of-contents/mp200010-200020/d200020> (最終閲覧日 : 2025.7.25)

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 (1983) 『研究紀要』

藤野龍宏 (2016) 「埼玉県の考古学入門」さきたま出版社

昭島市史編さん委員会 (1983) 「昭島市史」

京都橘大学考古学研究室「日本古代土器の基礎知識」<https://haji-sue.jp/> (最終閲覧日 : 2025.7.25)

日本考古学協会編 (1992) 『古墳時代の考古学① 古墳時代の基礎的研究』雄山閣出版

内山敏行 (2024) 「栃木県宇都宮市竹下浅間山古墳の須恵器甕- 真格子叩き須恵器甕の出現期と副葬品」『研究紀要』第 32 号、81-94 頁

滋賀県文化財保護協会 (2024) 『令和 5 年度 江頭南遺跡発掘調査概要』

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 (1982) 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 7 : 桜山窯跡群』

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 (2010) 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 369 : 錢塚遺跡』

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 (2009) 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 361 : 反町遺跡』

坂戸市 (2025) 「第 28 回坂戸市埋蔵文化財出土品展 長岡遺跡の物語 -足元に眠る一万年史- 解説シート」

塩野博 (2004) 『埼玉の古墳 比企・秩父』さきたま出版

佳作ポスター

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)

※ポスター発表は任意のため、ポスターを掲載していない研究レポートがあります。

沈船防波堤の戦争遺跡としての価値

～小名浜港の沈船防波堤を論じて～

大渕 紗慎
磐城桜が丘高校

1 はじめに

第二次世界大戦後、日本では港湾施設は破壊され、戦後の日本経済再建に深刻な影響を与えた。そこで日本は軍艦やタンカーを沈めて防波堤とする『沈船防波堤』が作られた。現在は全国の4か所で現存しており、福島県の小名浜港にもその一つが埋設された状態で残されている。

本レポートの目的

本レポートでは、第一章で沈船防波堤が設けられた背景を明らかにし、第二章では小名浜港の事例を通じて、その歴史的・文化的価値を明確にすることを目的とする。

2 第1章 第一節 全国の沈船防波堤について

沈船防波堤の設置が確認されたのは全国で10港であり、設置港を赤文字で図1に示す。また、下線が引かれているのが現在も沈船防波堤が残っている港である。図1から沈船防波堤は特定の位置ではなく全國に設置されているのがわかる。

軍艦やタンカーは戦時に使われていたものでGHQより船舶が譲り受けられ各港に設置された。現在も発見できていない沈船防波堤があることが推測できる。



第二節 沈船防波堤の設置背景の共通点

それぞれの港湾から沈船防波堤の必要とされた背景を調べているいくつかの共通点を見出した。

第一の共通点は太平洋戦争による港湾工事の中止や港湾の破壊である。港湾の未整備や戦災の影響により、港湾機能維持に深刻な支障をきたしていた。特に、鉱山資源や炭田、油田を後背地に有する港湾では、石炭・石油・硫黄など戦後復興の基幹物資を大量に輸送する必要があり、港湾機能の早期回復はいち早く戦後復興を果たすためには必要であった。

第二の共通点は、戦後直後の深刻な資材不足が挙げられる。通常の防波堤設置には大量のコンクリートや鋼材を必要とするが、戦後の日本ではこれらを十分に調達することが困難であった。そのため軍艦などを転用することが、経済的に早急にできると判断したのではないだろうか。これにより工期を大幅に短縮し、資材を節約することが可能となった。また、GHQには占領政策として軍艦を防波堤にすることで、非軍事化も同時に押し進めたのではないかとも考えられる。

第三の共通点は漁業資源による食糧供給である。神湊港に代表されるように、漁港や離島港湾の整備は食糧難を克服するための国家的課題であった。そのために小さな漁村の港でも防波堤がつくられ食糧問題解消を見込まれたということだ。

以上のことをまとめて考えると、沈船防波堤は単なる臨時の措置ではなく、戦後復興期の日本が置かれた社会的・経済的制約のもとで生まれた「創意的な技術の工夫」であったと評価できる。そのことから、沈船防波堤は戦後復興期の人々の工夫や努力を伝える遺構としての価値が十分にあると考える。沈船防波堤が遺構として残っているのは小名浜港、音戸漁港、安浦漁港、若松港のみで第二章では小名浜港を事例とし、さらに詳細に検討する。



・図5 宇部港沈船防波堤の様子
使われた軍艦の形がはっきりとわかる
資料：宇部港直接作業船の歴史



・図6 秋田港の沈船防波堤引き上げの様子
資料：東北地方整備局港湾航空部
軍艦が防波堤になりました。

第二章 小名浜港の沈船防波堤 第一節 小名浜港の概要

小名浜港は福島県いわき市に位置する。明治以降は石炭輸送や大規模工場（旧日本化成）などの搬出港として港の整備が始まり、第一次修築工事、第二次修築工事とおこなわれたが、第二次修築工事は戦争のため中止。その後は重化学工業を中心とした臨海工業地帯の産業基盤となる物流拠点港湾として整備され、国際貿易港としての港勢を拡大してきた。しかし平成23年3月に発生した東日本大震災により甚大な被害を受けたが、平成29年に施設復旧を完了させている。現在では水産業、工業、観光など多面的な役割を持つ港として発展している。

第二節 沈船防波堤の計画から施工までの方法

小名浜港では戦後漁獲量整備のため魚市場前に防波堤を設置する予定だったが、製作途中の防波堤が崩れてしまった。そこで当時運輸省港湾局で考案され、実験されていた沈船防波堤の設置が簡単で工期の短縮にもなるということで小名浜港にも設置されることになった。駆逐艦の「汐風」「澤風」が設置された。

汐風と澤風は浦賀ドックにて防波堤とするために船体の改装工事が行われ、甲板上部のものはすべて取り除かれ空母のような形で小名浜港に入港してきた。澤風は浦賀ドックを昭和23年3月8日に、汐風は川崎港を同年7月28日に出発した。前者は海上保安庁の「栗橋」に、後者は第三土運丸に曳航され小名浜港に来たことが分かった。今回の調査で今まで明らかになっていたなかった汐風の曳航の様子が明らかになった。

小名浜港では先に漁港区の整備が優先され、魚市場前に昭和23年の4月1～2日にかけて澤風が最初に設置。ついで汐風は同年の8月25日に1号ふ頭（当時の三千トンふ頭の先端）に設置された。

第三節 沈船防波堤のその後

小名浜港は昭和23年8月25日に沈船防波堤が完成した。その計画は成功といえ、工期は約1年、工事費は約1200万円の節約となった。しかし、土木学会誌などの論考を見ると補強費が通常の防波堤よりも多いことや波や腐食による強度低下が問題となって、技術的には成功ではないと記されている。

その後、汐風防波堤は三千トン岸壁が昭和31年に一万トン岸壁に拡張される際に取り壊されず岸壁となって姿を残した。しかし、澤風防波堤は昭和40年の漁港区拡張の際に完全に撤去されてしまった。

撤去された澤風はスクラップとして売却される予定だったが、いわき市に住む旧海軍人らが何か記念に残したいといって売却せず放置されていた。それが昭和48年にターピンを記念碑とすることが決定され、同年1月にいわき市三崎公園に設置された。その他のスクラップの所在は謎であったが、澤風のもう一基のターピンが民家に現存されており、そのターピンを保管している方にお話を伺った。話によると祖父が旧陸軍だったという住民が「一つは記念碑として飾られているのに片方だけ売られるのはかわいそうだ」ということで個人で引き取ったようだ。

汐風に関しては平成12年まで1号ふ頭の岸壁として海面に露出していたが、1号ふ頭が観光区として整備されたことで、完全に埋められてしまった。そこで汐風を紹介するプレートが設置され、汐風がどこに埋められているかわかるように真上にはレンガが敷き詰められ、わかるようになっている。



・図7 民家で保存されているターピン
資料：作者撮影（2025年）



・図8 平成12年まで露出していた汐風の船体
資料：国土交通省東北地方整備局小名浜港湾事務所「沈船防波堤の建設」

第四節 戦争遺跡としての価値

一般的に戦争遺跡とは戦争のために建てられた施設や戦争の被害を受けた建物のことを指すが、戦争からの復興の象徴的な建物も戦争遺跡として保存されるべきと考える。本節では小名浜港に沈船防波堤が設置されたことで、その地域のいち早い復興を支えたのではと推測する。そのことは単なる防波堤の代替案ではなく、戦後復興の象徴的戦争遺跡として評価されるべきだ。

また、現存する沈船防波堤の中で使用された軍艦が残っているのは小名浜港と若松港の事例だけである。また、小名浜港は若松港と違い、沈船防波堤として使用された軍艦の内部部品が記念碑として残っていたり、沈船防波堤に関する説明のプレートも立てられたりもしている。

そのことから小名浜港の沈船防波堤を形ある遺産として残し、より良い保護が必要なのではないだろうか。



・図9 三崎公園にある澤風のターピン
雨ざらしで錆びつき保存状態が悪い
資料：作者撮影（2025年）



・図10 澤風が埋められている上に建てられている説明版
地面は澤風の位置がわかるようになっている
資料：作者撮影（2025年）

まとめ

本研究は戦後復興期に設置された沈船防波堤を全国的に比較し、小名浜港の事例を検討したことにより、小名浜港の沈船防波堤の戦争遺跡としての価値があることを考察した。

その結果、沈船防波堤は資材不足と工期短縮の制約を克服し、港湾機能回復に大きく寄与した創意的措置であったことが明らかとなった。

小名浜港の事例では「汐風」「澤風」による防波堤設置理由、設置過程がわかった。また、撤去された後も記念碑として整備や説明プレートにより沈船防波堤を紹介するなど他地区の沈船防波堤と違い、沈船防波堤をなんらかの遺跡として整備されていることがわかった。ただ保存環境は適切ではなく、残していくには課題がある。

沈船防波堤は戦争の産物であると同時に復興の象徴でもあり、小名浜港の沈船防波堤の現存部分や記念碑は戦争遺跡として保存・研究される意義を持つのではないかだろうか。今後の課題としては沈船防波堤の設置経緯や技術的背景をより精緻に解明することや、現存遺跡の保存環境としては必ずしも適切ではないといえ、今後どのような保存の方法が最善であるかを考える必要がある。また、戦争遺跡として沈船防波堤をどのように位置づけるかを再考する必要がある。

杉戸町関連戦没者全記録

—5冊の『戦没者名簿』をひもとく—

阿久津勇気 小野将太
昌平中学・高等学校 社会歴史研究部

はじめに

1945(昭和20)年8月に戦争が終結してから80年が過ぎた今、私自身の「戦争」への向き合い方について明らかにしていと考えるようになり、高校に保管されていた、杉戸町(本校所在地)の旧村単位にまとめられた5冊の『戦没者名簿』『戦没者原簿』『戦没軍人台帳』(以下『戦没者名簿』)のビーコーを読み込み研究して、「戦争」との向き合い方のヒントにしようとした。

I 『戦没者名簿』からは何がわかるのか

1) 戦没者名簿の実態

日本政府は年次別の戦没者数を公表しており、将兵たちが満州事変以降、敗戦までに何時、何処で、どのくらいの人々が戦死したのかという実態は、多くの場合明らかにされていない。しかし、ここで分析する5冊の『戦没者名簿』には、戦死した日付、戦死した場所が記載されている。これを手がかりとすれば、杉戸町関連者との限定はつくが、戦没者たちの死の実態が少しは解明できるのではないかと考える。

2) 戦没者名簿について

現杉戸町は、1955(昭和30)年に杉戸町・田富村・堤郷村・高野村が合併、さらに、1957年には泉村を編入している。5冊の『戦没者名簿』は、この5村に対応している。それ故に、杉戸町168人、田富地区101人、堤郷地区83人、高野村53人、泉村105人の合計510人の戦没者が確認できるが、データには1877(明治10)年の西南戦争から日清戦争・日露戦争の戦没者も含まれている。今回は、満州事変以後の戦没者463人を分析の対象とする。

II 『戦没者名簿』の分析 一何時、何処で、何人が戦没したのか

1) 時期区分・戦地区分

満州事変から戦争終結まで、何時、何処で、何人が戦没したのかを分析するため、7つの時期区分、10の地域区分を設定し、それぞれの戦没者の特徴を調べた。

2) 時期区分にみる戦没者数の変遷

時期区分は、以下の示すとおりに区分した【図1・2・3】。満州事変から日中戦争開戦までのほぼ6年間の戦没者は4人で戦没者全体の1%にすぎない。日中戦争期8%、III期も合わせて5%であったが、IV期末の1943年1月には1ヶ月6人に増えている例が注目される。つづくV期になると、戦没者の出ない月がなくなる。V期終盤では戦没者が急増し、1944年6・7月は両月とも20人以上で、延べ人数グラフでもその傾きが鋭く、割合も27%に上昇しているのが確認できる【図4】。VI期も増加傾向はつき、戦没者は44年12月に20人、45年3月には最多の33人となって全体の47%を占める。VII期以降も戦病死が確認される。

時期区分	主な戦い
I期(1931年7月～)	満州事変
II期(1937年1月～)	盧溝橋事件、ノモンハン事件
III期(1941年12月～)	真珠湾攻撃
IV期(1942年6月～)	ミッドウェー海戦、リヨン空襲
V期(1943年9月～)	アラブの戦い、インペール作戦、サイパン陥落
VI期(1944年9月～)	レイテ沖海戦、硫黄島の戦い、沖縄戦
VII期(1945年8月以降)	なし

図1 戦没者の時期区分(資料『戦没者名簿』)

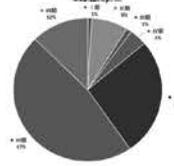


図3 時期別戦没者数内訳(資料『戦没者名簿』)

図2 時期別戦没者数推移(資料『戦没者名簿』)

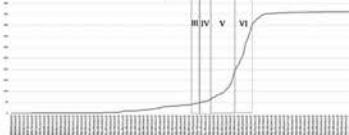


図4 時期別戦没者の延べ人数グラフ(資料『戦没者名簿』)

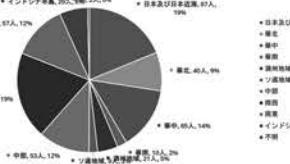
3) 戦地区分にみる戦没者の特徴

戦地区分は、以下の示すとおりに分類した【図5・6】。

①日本・日本近海(87人)を占める。特徴的なのは、硫黄島の戦い8人、沖縄戦関連9人が確認される一方で、戦病死の割合が58%、さらに戦後の戦病死者数も多いことである。次に、中国戦線は全体の25%(115人)である。内訳は③華北9%、④華中14%、⑤華南2%となる。8年に及ぶ日中戦争の戦場の中心が④華中であったことが確認できる。やはり最大の割合を示すのが⑥⑦⑧の太平洋戦線であり、全体の43%を占める。インドシナを含めると49%(229人)にのぼる。注記されるのは、1944年4~6月⑧南東方面のホーランジアの戦い、同年7~6月⑨中部太平洋方面のサイパン島守備隊全滅、同年10月⑨南西方面のフィリピン・レイテ沖海戦などの壊滅的な戦闘の場に杉戸町関係者も参戦していたと思われる。②の満洲では、満州事変の翌年1934年4~5月の1人ずつの戦死者以降、1939年8月のノモンハンでの2人まで戦死者がいない(この間戦病死1人)。その後も戦死者の記述は1940年2人、44年1人である(この間戦病死5人)。ところが、1945年8月11~12~16日に戦死者がでている。最後に⑩ソ連地域では10人の戦没者がみられる。I~VI期には確認できず、VII期の1945年11月の戦没場所のコサクランバ収容所が初めてである。特徴的なのは、戦没者10人中4人が収容所で没していることである。

地域区分	該当する地域
①日本・日本近海	日本本島、沖縄島、硫黄島、朝鮮半島、台湾など
②満州地域	遼寧省、吉林省、吉林省、吉林省など
③華北	河北省、山西省、河南省、北京市など
④華中	江苏省、浙江省、湖北省、湖南省、江西省など
⑤華南	広东省、広西省、海南省など
⑥中国戦線	中国本島、中国東北、蒙古、新疆、西藏など
⑦南西方面	ソロモン諸島、ニューギニア、ラバウルなど
⑧南東方面	フィリピン、インドネシア、ボルネオなど
⑨中部太平洋	ベトナム、インドネシアなど
⑩ソ連地域	シベリア、モンゴルなど

図5 戦没者の戦地区分(資料『戦没者名簿』)



4) 時期区分・戦地区分と戦没者の年齢

『戦没者名簿』には、生年月日も記載されている。ここから戦没者の戦没時の年齢を知ることができる。戦没者の年齢を整理するにあたり、人数の少ないI満州事変期はII日中戦争期と、アジア・太平洋戦争期の前半で期間の短いIII IV期とをそれぞれ合計した。このようにして、以下のようない結果を得た【図7】。

時期区分	平均年齢	最年少	最年長
I、II期	24.1	18	37
III、IV期	26.08	19	38
V期	27.1	17	54
VI期	27.47	16	53
VII期	27.33	18	50

図7 時期別の平均年齢(資料『戦没者名簿』)

これらのデータで、まず、II期の戦没者の平均年齢が他の時期に比べ2歳あまりも若いということと、III期からV期へとわずかではあるが平均年齢が上がっていることが注目される。この結果は、学徒動員や特攻隊のイメージなど、敗色が強まるなかで若い命の犠牲が注目されているように思えるが、実態としては再招集や「根こそぎ動員」による壮年・中年層の動員の多さが影響したと見ることができるだろう。また、年齢層の広がりも見られる。VII期の最年長の2人は50代の将校(少尉・大尉)である。戦車の悪化とともに後方に指揮権を執ることの多かったと考えられる階級上位の士官たちが戦闘に参加し死んだのではないと思われる。

次に、事例数の少ないI満州と⑩ソ連を除いた地域別の戦没者の平均年齢を見ていくと、①日本・日本近海は26.29歳、③④⑤中国戦線は24.95歳、⑥⑦⑧⑨太平洋戦線及びインドシナは28.17歳であった。①②の日本・日本近海と③④⑤中国戦線では大きな差は見られないが、⑥⑦⑧⑨太平洋戦線・インドシナの平均年齢は前者に比べて2~3歳ほど高くなっている。

時期的に見ると、V期の平均年齢が最も高かつたが、地域的にも戦争末期に大量の戦没者を出した太平洋戦線の平均年齢が高くなっている。このことは、先にみた大量動員・大量派遣された壮年・中年兵士の平均年齢という数字にあらわされているのではないだろう。

5) 戦没者名簿からみえてきた戦争

最後に、ここまで見てきた時期区分と地域区分をまとめたグラフを参照しながら『戦没者名簿』からみえてくる戦争の実態について考察を加えたい【図8・9】。

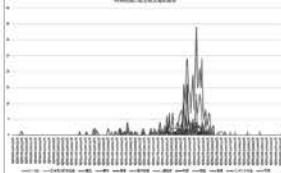


図8 時期地域の総合戦没者数推移(資料『戦没者名簿』)

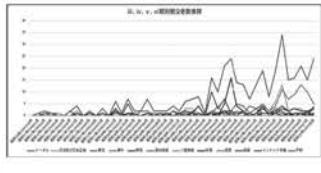


図9 III~VI期別戦没者数推移(資料『戦没者名簿』)

まず時期区分に見る戦没者数の変遷でも見たとおり、I満州事変期～IVアジア・太平洋戦争の前期では戦没者数の大きな変化は見られない。特に満州事変以降は1944年の8月のソ連侵攻まで満洲国内については比較的安定していた様子がうかがわれる。

次に、中国戦線について注目する【図10】。盧溝橋事件からはじまるII期には、南京事件、重慶爆撃などの出来事があったものの、太平洋で戦端が開かれたIII期以降、太平洋戦線に戦没者が集中し、III～VIの中国戦線の様子は忘れがちであった。しかし、先にも言及したように、華中では、1944年8月から翌年3月までの期間、月平均2.5人が亡くなっている。太平洋戦線はどうなったにせよ、中国戦線でもIII IV期に比べてV VI期になると戦没者は増える傾向にある。

戦闘は続き、より激化していくことをうかがわせる。

一方、太平洋戦線ではどのようなことが見えてくるのだろうか【図11】。月ごとの総戦没者数に注目すると、A 1944年4月(16人)、B 1944年7月(24人)、C 1944年12月(20人)、D 1945年3月(34人)、E 1945年6月(22人)にピークがある。この内、ABCDのピークには、それぞれAニューギニアのホーランジアの戦い、Bマリアナ諸島サイパン島守備隊全滅、Dリトルサン・レーテでの戦い、硫黄島守備隊全滅、Eでもフリビルソン・レイテでの戦いがあるが、ピークが各地の激戦と運動している事がわかる。次に、ABDEのピークを、戦地区分の視点からみていくと、Aホーランジアが⑦南東方面、Bマリアナ諸島が⑥中部太平洋方面、Dフリビルソンは⑧南西方面、硫黄島は①日本である。これに基づくと、A→B→D→Eと、月日の経過とともに激戦の地が維持できなくなり、戦線が縮小・狭小化していく日本本土に近づきあつたことが確認できる。さて、C 1944年12月のピークはどう考えたら良いのだろうか。具体的な大きな戦いは見られない一方で、①日本・日本近海4人、③華北1人、④華中2人、⑥中部太平洋4人、⑦南東3人、⑧南西5人、⑨インドシナ1人の戦没者が出ている。ABDEでみたように激戦の場と戦没者の人数が相關すると考えるならば、『戦没者名簿』1944年12月のピークは、拡大した戦線各地で最後の抵抗・激闘が展開されていた証なのではないだろうか。

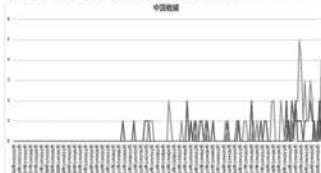


図10 中国戦線別戦没者数推移(資料『戦没者名簿』)

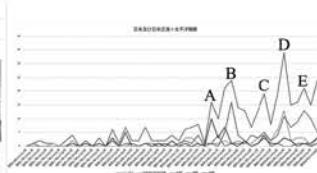


図11 日本・日本近海・太平洋戦線別戦没者数推移(資料『戦没者名簿』)

むすび

『戦没者名簿』の分析を通じて杉戸町関連戦没者463人の実像の検証を試みた。結果は羅列的でまとまりのないものになってしまったが、何時、何処で、誰が戦没したのかを時期別と地域別で意識した分析は意味のあるものになったのではないだろうか。今回の調査を通じて、今の私が戦争とどう向き合うか、それは資料を振り起こし、名も知らぬ戦没者一人一人の記録を明らかにすることなのではないかと考えるようになった。「戦争の記憶」の継承は、経験者だけのものではなく、調査や検証を通して私たち世代もできることなのだろう。

(主な資料・参考文献)

・吉田裕『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実—』中公新書。2017年。

・吉田裕『統一日本軍兵士—帝国陸海軍の現実—』中公新書。2025年。

天守の比較から考える「高島城天守」の存在意義

平田翔太郎
長野県諏訪清陵高等学校

1. 要旨

高島城天守と他の城郭の天守を様々な観点で比較、検証した。また、その結果を基に高島城天守の存在意義について考察した。

2. 動機、目的

- 諏訪市には高島城という城趾があり、古写真により天守の意匠を比較的良好に知ることができる。
- これまでに日根野高吉や、高島城を他の城郭と比較した研究はほぼ行われていない。

そこで本研究では天守のデータと石高のデータを用いて他の城郭と比較し、高島城の天守の特徴を調査することを目的とする。

3. 研究手法

近世城郭140城について調査を行い、天守の外観、意匠などのデータを収集した。その結果から、高島城の特徴が他の城郭でも見られるのか、特徴がどういった傾向で見られるのかを確認した。

4. 高島城、日根野高吉の概要

高島城は日根野高吉が文禄元年から慶長3年(1592~1598年)にかけて築いた城郭である。日根野高吉は豊臣家に仕えた武将で、天正18年(1590年)に諏訪2万石を与えられた。



図1: 日根野高吉像
(『英名百雄傳』(東京大学教育学研究科・教育学部図書室所蔵)を改変)

5. 調査結果、考察1

(1) 重の比較

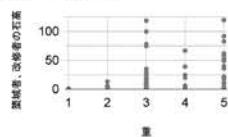


図2: 重と石高の関係 U=88(安土城、大阪城、名護屋城、駿府城、二条城は図のデータには含まれていない)

図2から得られる
相関係数: 約0.423

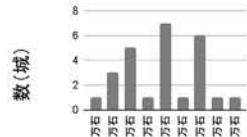


図3: 3重天守のある城の石高(1万石間隔、10万石以下) U=26

図3より3重の天守の最頻値は5万石
全ての範囲の3重の天守
平均: 約13.51、標準偏差: 約20.24
データにはばつきがある。

この結果から高島城は3重の天守の中では比較的石高の少ない部類であることがわかる。

(2) 同時代の大名の居城の比較

城の名前	築城者	天守の存在	重	築城者、全築者の石高
高島城	日根野高吉	あり	3重	2万石
佐賀城	鍋島直茂	なし	3重	2万石
北畠城	北畠親房	なし	3重	1万石
今井城	加藤光泰(後に浅野長政)	天守台のみ	/	24万石
駿府城	中村一氏	あり	/	14万石
丹波守護城	丹波守護	天守台のみ	/	5万石
尼崎城	山内一豊	あり	3重4階	5万石
新潟城	毛利秀頼(後に家康義輝)	なし	/	5万石
小笠城	柏原信久	あり	2重3階	5万石
吉田城	池田輝政	天守台のみ	/	15万石
武田城	越後守備	あったと考えられる	平成	12万石

図4: 1590年(天正18年)に三河、遠江、駿河、甲斐、信濃に入封した主な大名の居城(甲府城築城に加藤光泰が関わっていたかは不明)

図から同時期に東海、甲信地方に入封した大名の中でも高島城は特異な例であったことがわかる。

(3) 花頭窓の比較

花頭窓とは中国から伝わった窓で、窓枠は白木か黒漆塗で格式が高い。また、窓枠により外側からのみ特有の形に見える。

天守では実戦面での利点がある連子窓や突き上げ戸が主に使われる。花頭窓には実戦面の利点がない。



花頭窓は格式を高めるのと同時に、天守を飾る窓としての効果があったと考えられる。よって敵の攻撃を最も受けず、遠方からも目に留まりやすい最上階に設けられる場合が多い。

高島城、彦根城、松江城、大洲城には最上階以外の階にも花頭窓が設けられている。



図5: 取り壇し前の高島城古写真
(竹田凌湖撮影、個人蔵・諏訪市博物館提供、一部改変)

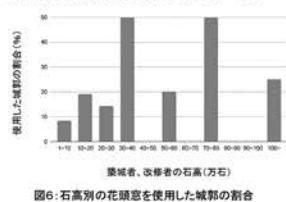


図6: 石高別の花頭窓を使用した城郭の割合

図6より、花頭窓は10万石を超える大名が使用割合が高い。
(使用例は安土城、広島城など)

以上から高島城天守は最上階以外の階に花頭窓を使用した全国でも珍しい例であり、花頭窓を使用した大名家の中では最も石高が少ない。

以上の観点での比較の結果から、高島城は石高に対して規模が大きく、装飾性の高い天守を有していたと言える。

6. 考察2

日根野氏以前は諏訪地域は代々諏訪氏が治めており、突如入封した高吉が領民から快く迎えられたとは考えにくい。また、築城の際、神社仏閣の材木を切り、老若男女に労役を課した。そのため日根野高吉の



図7: 明治44年9月の諏訪の大洪水時の写真。矢印で指した一帯が高島城。天守や櫓はすでに取り壇されている。(諏訪市博物館刊行『なつかしのあの頃』(1992年)より引用、一部改変)

政治の評判は悪く、怠るものは人柱にしたなどの伝承も残されている。伝承どおりのことが起きていたか定かではないが、そのような伝承が残るほど領民には嫌われていたようである。図4で取り上げた他の新しい領主に対する悪評は残されていないことも、それを裏付けている。さらに、築城当時も図7のような姿でいたるところから見ることができたと考えられ、高吉もそれを狙っていたと考えられる。

7. まとめ

日根野高吉は土地を選ぶ際、これから自分の築く城を諏訪の領民に見せることも意識していたのではないか。その高島城の中でもひときわ目立つ天守は豪華絢爛で見た人を圧倒した。

つまり、権力を示そうとしたと考えられる。

8. 主要引用文献、謝辞

主要引用文献

- ・植村忠『諏訪高島城』1970年
- ・今井広庵『諏訪高島城』1978年
- ・一般社団法人大曾根調査会(高見俊樹、中島透)『諏訪の浮城 高島城のすべて』2020年
- ・諏訪市史編纂委員会『諏訪市史 上巻』1995年
- ・『諏訪の歴史と今を知る会』『地域論集II 日根野氏』2009年
- ・三浦正幸『天守～芸術建築の本質と歴史～』2022年

謝辞

本研究をするにあたり、多くの方々にご指導、情報提供を賜りました。ここに深謝の意を表します。

衛門三郎伝承と河野教通一四国遍路(伊予)をつくった戦国大名一 郷土研究部 松山北高等学校

序論

私たち松山北高等学校郷土研究部は、今までに松山平野南部に伝わる様々な伝承を調査してきた。調査を進める多くの伝承が伊予の守護職家であった河野氏に関係しているものが多いと分かった。そこで私たちは、河野氏が関係しているという道後石手寺に伝わる衛門三郎伝承を調査し、河野氏の目的を考えていきたい。

本論

1 戦国期四国遍路(伊予)の状況

上の表は、49番札所淨土寺本堂の厨子に書かれた落書きについてまとめた表だ。落書きは確認できる和年号より大永五(1524)年から寛永十七(1640)年に渡っている。この落書きから読み取れるのは参詣者の分布が広範囲に及ぶことだ。東海地方や北陸地方、近畿地方などの遠隔地から参詣者が淨土寺に訪れていたことが分かる。また、越前国一乗の住人「ひさの小四郎」などの世俗者も混じっていた。そして、淨土寺厨子は河野教通が文明年間に本堂を再建したときにつくられており、当時はまだ新造であったと思われる。これらのことから、この落書きからは戦国期に四国遍路が成立していたことが分かり、全国各地から世俗者を含む多くの参詣者が伊予の札所寺院を訪れていたことが判明した。

2 河野教通の苦闘

永享七(1453)年、河野教通は、父の河野通久が戦死したことを受け家督を継承。嘉吉年間頃の伊予では管領細川勝元と結んだ予州家(庶子家の)の河野通春が台頭し教通との内戦が勃発した。康正元(1455)年、教通は伊予国守護職を細川勝元に奪われ、教通は細川勝元の現地名代的存在であった通春と激しい戦闘に及んだ。しかし、康正二(1456)年、四月二十五日付東寺地蔵堂宛村上治部進書状には、伊予において長・戦が続いている様子が報告され、室町幕府の援軍の到着が遅れたことにより、教通が負けて逃げたことが記されている。このことから、教通が度々戦に敗れていることが読み取れる。数年後、細川勝元は伊予国守護職を予州家の通春に譲り、細川勝元の策動によって山方領主の大野氏・森山氏・重見氏などが通春に味方したため、教通はますます劣勢な立場に追い込まれていった。伊予国守護職を失い、窮屈に陥った教通は状況の打開を図るべく、長禄四(1460)年に河野家の由緒(推古朝時の鉄人退治伝承・藤原純友追討伝承等を述べると)、歴代の幕府に対する河野氏の功績を列挙して、守護職と押領された恩賞地の返還を求めるべく、長文の申状を室町幕府に提出した。しかし、細川勝元が管領であったために幕府はこの教通の訴えを受諾せず、教通は伊予国内において通春の功勢に圧倒された。

ところが、寛正五(1464)年になると伊予支配及び守護職をめぐって管領細川勝元と守護職河野通春が対立を起こす。寛正六(1465)年には、長期に渡って敵対してきた教通と通春が和睦を結び、共に細川勝元に対抗するようになる。更に、応仁元(1467)年、文明の大乱が起こると周防の守護大名大内弘とそれに与する通春が西軍として上洛し、守入に伊予平定に取り掛かった。それにより、文明五(1473)年、教通は遂に東幕府の足利義政によって伊予守護職に再任された。この頃に教通は通直へと改名している(本稿では混乱を避けるため、以後も河野通直(教通)を河野教通と表記する)。その後、伊予国内で勢いを増した東軍伊予守護職の教通方と京都から帰国した西軍伊予守護職の通春方の軍事衝突が続いたが、その後情勢は徐々に教通方が優勢になっていった。文明十四(1482)年に、通春が本拠の濱山城で没すると河野通直が予州家を継ぐが、もやは予州家の劣勢を跳ね返すことができず、惣領家の教通が明応九(1500)年に、湯築城で没するまで教通による安定した伊予統治が続いた。

3 河野教通の国普請

59番札所熊野山石手寺	49番札所西林山三藏院淨土寺	52番札所龜雲山太山寺
文明十二(1480)年に、石手寺本堂・三門・東西伐木宮門再興作事を得能氏・木原氏・松末氏・平岡氏などの在地領主や衆中を動員し、翌年に完成させた。	文明十四(1482)年に、教通が勧懃再建の工事を起こし、二年の歳月をかけて完成させた。	文明十七(1485)年に、教通が本堂と三重宝塔が再興建立した。

教通は伊予の支配領域が回復し、情勢が安定してくると上の表にあるような四国遍路の札所を中心とした寺社の再興作事と在地領主を動員する普請議として進め自分の権力を民衆に示した。教通は寺社勢力と支配下に置くことを目的にしていだと見られるが、結果的に四国遍路の靈場整備に寄与することに繋がった。

4 河野教通の家譜編纂事業

河野教通は札所の整備以外にも河野家に伝わる伝承や、家伝文書を基に家譜編纂事業に取り組んでいく。その代表例が、十五世紀後半に成立した『水里玄義』と『予章記』だ。『水里玄義』の奥書には「沙弥道基」と教通が出自名で署名しており、日付を明治十七(1498)年二月五日として、奥書文末に「子孫千年の宝であり、長く嫡流の証として備えるべきものである」と作成の意図も述べていることが読み取れる。また、『予章記』は内容から見てほぼ同時期に、同じく教通の命で成立し、中・近世以降の伊予における歴史認識、後の『予陽河野家譜』などの歴史叙述に大きな影響を与えた書物正在被编辑。

5 衛門三郎伝承の成立—荏原郷の支配—

衛門三郎伝承の初見は、永祿十(1567)年に、河野左京大夫通宣が作成した石手寺刻板に刻まれている。刻板表面には和銅五(712)年から文明十三(1481)までの石手寺の由緒が記され、淳和天皇御代の天長八(831)年に、衛門三郎を「右衛門三郎」として伝承が刻まれている。そのあらすじは、天長八(831)、浮穴郡原郷に右衛門三郎がいた。富貴を追い求め仏神に逆らったため仏罰を被り、八人の子供を失った右衛門三郎が自ら髪を剃り家を捨てて四国遍路に出て、阿波焼山寺の麓で病死する間際に伊予国司になりたいという一念の望みを告げ、空海和尚は石を一寸八分に切り、「ハ塚右衛門三郎」と書いて左手に封じ、年月を経て伊予国司恩利の元に男児が生まれ、家を継いで息方と名乗り、例の石を当寺本堂に祀ったというものだ。なお、この息利・息方親子は越智息利・息方という河野氏の先祖として『予章記』等の家譜類に登場しており、この伝承には河野の祖先伝承が含まれている。この石手寺刻板文書の表面由緒書きの最後の記事には御土御門天皇の治世期である文明年間頃で、河野教通が石手寺の本堂・山門・東西門を再興したという内容が記載されている。さらにその後には、安養寺の靈宝由・雲墨蹟などが薬師堂・庫蔵炎上時に焼失するに及び、諸衆徒が嘆き和談を遂げたため末までの証拠として板書させたものと書かれている。よって石手寺刻板は、炎上前の由緒書きを河野左京大夫通宣が後年複製させたものであり、そのもとになった由緒書きは、現存している刻板由緒書きの最後の登場人物である河野教通が文明十三(1481)年に、石手寺を再興した折に作成されたものと推測できる。よって、この刻板に衛門三郎伝承を記録させたのは河野教通であった可能性が高い。

石手寺刻板に刻まれた衛門三郎伝承において衛門三郎は「浮穴郡原郷右衛門三郎」と表記され、元々この伝承が浮穴郡荏原郷(松山市久谷荏原地区)に起った伝承であることが示されている。また、刻板には「ハ塙右衛門三郎」という表記も見られるが、荏原郷にはハ塙という八つの円墳からなる群集墳があり、現在伝わる伝承においては衛門三郎の亡くなった八人の子供を祀った墓であるとされている。

河野教通が伊予平定に邁進していた文明年間頃、この荏原郷の支配勢力が美濃土岐氏から、河野教通重臣の平岡氏に代わっている。これは松山平野南部への進出をもくろむ山方領主の平岡氏が、応仁・文明の乱において敵対する西軍側の土岐氏を攻めたのが契機となった可能性が高い。平岡氏は土岐氏を破り、荏原郷に侵入して荏原城を築城したり、四十六番札所医王山淨瑠璃寺を庇護したりした。その後、河野氏家中で筆頭重臣となり、天正三(1585)年に起こった豊臣秀吉の四国出兵まで河野氏当主を支えながら荏原郷を支配していく。次に、河野治世期に、衛門三郎伝承が石手寺に持ち込まれたとする説の根拠を示す。まず、荏原郷が土岐氏の支配領域であった時期に、河野氏が土岐領の伝承を本拠地道後湯築城郊の石手寺に入れるにはなかつたはずであり、伝承が石手寺に持ち込まれたのは平岡氏が荏原郷に進出した文明年間以後であると考えられる。また、衛門三郎伝承が土岐氏支配下の荏原郷にあった時期に、越智息利や息方の河野氏先祖伝承が登場することも不自然である。更に、衛門三郎伝承は、先ほど述べた石手寺刻版に記されているため、永禄九(1566)年の石手寺庫蔵焼失以前には成立しており、刻板由緒書きの最後の登場人物である河野教通当主期には成立していたものと見られる。また、教通の支配の正当性確立に固執する施策方針から見ても、教通が石手寺に衛門三郎伝承を持ち込み成立させた可能性が高い。これらのことから、衛門三郎伝承は、土岐氏の支配領域であった浮穴郡荏原郷に伝わる弘法大師信仰に教通が河野氏の先祖伝承を融合させたうえで石手寺に入れて成立した伝承であることが分かる。

結論

以上の研究から、河野教通が伊予支配の正当性を民衆に訴えるために国普請の実施や家譜編纂事業、衛門三郎伝承の作成などを行っていたことが分かった。河野教通は、現在に続く「四国遍路をついた戦国大名」であったと言うことができるだろう。

参考文献

- 『予章記 水里玄義・河野分限録 改訂版 伊予史談会双書 第5集』著者・河野教通 出版社・伊予史談会 刊行・応永元年(1394)

『予陽河野家譜』著者・不明 刊行・慶長年間~元年間(1596~1624)

『四国遍路』近藤喜博・桜風社・昭和四十六年(1971)

『四国遍路研究』近藤喜博・三弥生書店・昭和五十七年(1982)

『愛媛県史 資料編 古代・中世』愛媛県史編さん委員会 刊行・昭和五十八年(1983)

『空海伝説の形成と高野山』白木利幸・同成社・昭和六十一年(1986)

『四国遍路と衛門三郎の絵解き』『講座日本の伝承文学8在地伝承の世界(西日本)』渡邊昭五・三弥生書店・平成十二年(2000)

『伊予の地域史を歩く』著者・山内謙 出版社・青葉図書 刊行・平成十二年(2000)

『中世の石手寺と四国遍路』『四国遍路と世界の巡礼』川岡勉・平成十九年(2007)

『研究最前線 四国遍路と愛媛の靈場』愛媛県歴史文化博物館指定管理者 刊行・平成三十一年(2018)

『淨土寺・淨瑠璃寺と写し靈場』愛媛県歴史文化博物館指定管理者 刊行・令和四年(2022)

『伊予の中世を生きた人々2-室町時代』著者・山内謙 刊行・令和五年(2023)

第19回 地歴甲子園－全国高校生歴史フォーラム 研究タイトル一覧

(高等学校等コード順に掲載)

研究タイトル	高等学校名
兵の移動に関する二つの異なる「真実」について－満州移民と軍の視点から読み解く－	札幌日本大学高等学校
広島城と吉田郡山城の比較	クラーク記念国際高等学校
東日本大震災を語り継ぐ“歴史のまち白河”で学ぶ私たちに、今、できることとは	福島県立白河旭高等学校
沈船防波堤の戦争遺跡としての価値～小名浜港の沈船防波堤を論じて～	福島県立磐城桜が丘高等学校
水戸鉄道の敷設－茨城県鉄道ことはじめ－	茨城高等学校・中学校
房総里見水軍が城下町岡本にもたらした経済利益の試算	江戸川学園取手高等学校
上州小幡藩における藩政改革の展開と顛末	東京農業大学第二高等学校
越辺川の河床遺跡を検討する－新発見の越辺川吹塚西袋町A地区A1・A2地点河床遺跡を中心として－	筑波大学附属坂戸高等学校
杉戸町関連戦没者全記録－5冊の『戦没者名簿』をひもとく－	昌平中学・高等学校
小田原城～豊臣秀吉をも城内に攻め入らせなかつた強さ～	開智中学・高等学校
青梅街道の歴史	東京都立保谷高等学校
史跡情報登録マップツールの開発－新たな史跡・歴史継承法の提案－	東京都立科学技術高等学校
三輪田学園創立者の教育理念と近代女子教育の関係性～歴史的背景と意義～	三輪田学園高等学校
武家一揆の限界について－平一揆・白旗一揆に着目して考える－	海城中学高等学校
明治期の古地図「東京西部之圖」の成り立ちを考える～当時の陸軍士官学校における測図教育をテーマとして～	〃
八王子城における石垣構造とその背景－実測分析から見る北条氏の築城思想－	駒場東邦高等学校
岩崎城の戦いと城主丹羽家が小牧長久手の戦いにどのような影響を与えたのか	和光高等学校
白洲次郎から考える現代の生き方	フェリシア高等学校
日本に来た宣教師たち－イエズス会の日本布教 善惡の評価－	日本大学鶴ヶ丘高等学校
川越における十組仲間の解釈	豊島岡女子学園高等学校
神社の位置と河川の位置関係～練馬区内の100社を対象とした水害リスクの検証～	武藏高等学校
戦時下の足柄送信所とその役割	神奈川県立足柄高等学校
横浜における生糸勘合符の歴史	サレジオ学院中学校高等学校
愛新覚羅頴琦と厚木市－中国における民間日本語教育－	向上高等学校
穴馬おどり「質調衣ちよい」が伝える伝説	福井県立大野高等学校
日本における校則の歴史	日本航空高等学校
型破りな男河口慧海による日本人初のネパール入国－拒否した日本と認めた福沢捨次郎たち－	〃
天守の比較から考える「高島城天守」の存在意義	長野県諫訪清陵高等学校
長野県内における池中納品信仰について	長野県松本深志高等学校
幻の長野盆地遷都計画の意図に関する一考察－「松代大本營」から「長野大本營」へのパラダイムシフト－	長野清泉女学院高等学校
長野市の災害危険地域と社会的弱者の施設	長野日本大学高等学校
国造・古墳から考える壬申の乱	岐阜県立大垣北高等学校
関飛行場～失われた記憶を呼び覚ます～	岐阜県立関高等学校
船野城と津保・郡上の抗争～天正二年秋、郡上郡沓部をめぐって何が起きたか～	〃
近代文豪の作品における和製英語の使用について	岐阜県立加茂高等学校
東海道新居関所に残る手形の分析及び他関所との比較	静岡県立浜松北高等学校
なぜ浜松は「餃子のまち」となったのか～食文化と地域づくりからの考察～	静岡県立浜名高等学校
浜松における廢仏毀釈と国学の関係性	浜松日体高等学校
城はなぜそこに建てられたか？～現代のハザードマップから考える～	愛知県立安城南高等学校
桶狭間の戦い～今川義元が勝つためには～	東邦高等学校
三河中入軍の進軍ルート	南山高等学校男子部
寝殿造から学ぶ自然と調和した暮らし	三重県立四日市高等学校
室町幕府と各地の大名の上洛－足利義輝、義昭に着目して－	花園高等学校

研究タイトル	高等学校名
京都市中央卸売市場の立地について～歴史的背景と地理的背景～	京都産業大学附属高等学校
ロマンがある幻の都紫香楽宮～地理的要因から遷都に至った理由を紐解く～	明星高等学校
隣人愛を体現した武将：高山右近の信仰と茶の湯～信仰と茶の湯の関係性～	明星高等学校
和食に魚が多い理由	箕面自由学園高等学校
中世城郭の『縄張』にはどのような政治的背景が内在されているのか。～杉山城問題を例に～	清教学園中学校・高等学校
知られざる東大阪の天下人、三好長慶の生涯	大阪桐蔭高等学校
野崎参りの歴史とその変遷、現代との差異について	”
東大阪の地名の歴史	”
江戸時代の東大阪、特に新田開発について	”
前方後円墳の形状と歴史的背景	”
松永久秀について	”
三好実休の肖像 一二つの肖像画の謎ー	天王寺学館高等学校
姫川の戦いにおける浅井側の勝利の可能性を探る 一浅井長政はどうすれば織田・徳川連合軍に勝てたのかー	兵庫県立姫路東高等学校
神戸港の歴史と発展の要因	灘高等学校
高馬家の始祖とその起り	白陵高等学校
奈良県公立高等学校校歌にみる山岳名称の地理的分布と象徴性・地域アイデンティティの地理学的分析	奈良県立西和清陵高等学校
古墳の「その後」—遺跡の破壊と保護についてー	奈良学園高等学校
青谷上寺地遺跡出土の弥生犬の考察 一イヌの大腿骨からのアプローチー	鳥取県立青谷高等学校
戦国期石見吉見氏の公家との接触について 一付吉見頼郷の從五位下叙任・丹後守任官考ー	島根県立津和野高等学校
幕末を生きた剣豪 荒木要平～荒木家とその邸宅から見えること～	金光学園高等学校
関ヶ原と七将～池田輝政の歩み～	鹿島朝日高等学校
「大崎」を辿る 一芸予諸島における地名「大崎」の由来とその変遷ー	広島県立広島叡智学園高等学校
綾羅木式土器の文様～文様に込められた願いとは～	山口県立下関西高等学校
雛菊～菊池寛が書く女性に心惹かれる理由を探る～	香川県立高松西高等学校
衛門三郎伝承と河野教通 一四国遍路(伊予)をつくった戦国大名	愛媛県立松山北高等学校
“驚異の祭り数” 内子町の祭りについて	愛媛県立大洲高等学校
愛媛県の方言について	”
臥龍山荘について	”
開明学校について	”
大洲のいもたきについて	”
大洲市の祭りについて	”
大洲城について	”
中江藤樹と大洲高校の繋がり	”
畠の前橋	”
安政南海地震後に建てられた萩谷名号碑の碑文は、どれだけ信用性があるか	高知県立高知国際高等学校
城野遺跡と方形周溝墓について	福岡県立小倉南高等学校
福岡県における埴安神信仰についての調査	九州産業大学付属九州産業高等学校
壱岐中世史解明の新視点 一誰が生池城を改修したかー	長崎県立壱岐高等学校
箱館戦争は内戦か？戦争か？～戊辰戦争終結の意味を問い合わせ直す～	長崎南山高等学校
出島は長崎でなければいけなかったのか	青雲高等学校
「火の町 小林」～地域の人々と水路の関係について～	宮崎県立小林高等学校
郷中教育が明治維新に及ぼした影響について～西郷隆盛と大久保利通から見る明治時代～	鹿児島県立鹿児島中央高等学校
瓦林城はどこにあったのか	屋久島おおぞら高等学校

※個人情報に配慮して、研究タイトルと高等学校名のみを記載しています。

~~~~~ MEMO ~~~~

~~~~~ MEMO ~~~~

~~~~~ MEMO ~~~~

~~~~~ MEMO ~~~~

〈審査委員〉

今津 節生（審査委員長・奈良大学 学長） 岩戸 晶子（実行委員長・奈良大学 文学部文化財学科 教授）
渋谷 勝己（奈良大学 文学部国文学科 教授） 海津 一朗（奈良大学 文学部史学科 教授）
木下 光生（奈良大学 文学部史学科 教授） 岩崎 敬二（奈良大学 文学部地理学科 教授）
酒井 高正（奈良大学 文学部地理学科 教授） 米屋 優（奈良大学 文学部文化財学科 教授）
岡部 純子（奈良大学 社会学部心理学科 准教授） 劉 慶（奈良大学 社会学部総合社会学科 准教授）
穴井 潤（奈良大学 文学部国文学科 講師）

第19回（2025年）
地歴甲子園 全国高校生歴史フォーラム
発 表 集

編集・発行 第19回 地歴甲子園—全国高校生歴史フォーラム実行委員会
〒631-8502 奈良市山陵町1500
奈良大学 入試広報センター
TEL 0742-41-9588
印 刷 共同精版印刷株式会社
〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6

奈良で学ぶ贅沢

主催
奈良大学